研　究　紀　要

第 28 集

特集　6年一貫教育の総括 －校務分掌・学校行事編－

はじめに
中校一貫の経過と理念 …… 1
6年一貫教育にみるＨＲ、道徳の内容について …… 6
生徒指導部10年の総括 …… 13
本校の視聴覚施設・設備の現状と今後のあり方 …… 22
研究調査部の10年の総括 …… 24
中高一貫同和教育 －本校同和教育10年のあゆみ－ …… 34
本校における要医療災害の実態 …… 44
図書館の予算の変遷と昭和61年度図書館利用情状について …… 49
六年一貫における進路状況 …… 54
ＰＴＡ …… 58
中１一泊行事 －６年一貫教育のオリエンテーションとして－ …… 61
水泳訓練 …… 63
修学旅行について …… 67
音楽会 …… 71
中学写生会 …… 79
学園祭の流れ …… 81
体育大会を総括する －その在り方を求めて－ …… 110
漢字の句法 …… 谷本文男 …… 1
昭和61年度 ── 本校の研究活動 …… 研究調査部 …… 120
（附）研究紀要 第16集～第27集　総目次 …… 122

１９８７

奈良女子大学文学部
附属中・高等学校

は　じ　め　に

奈良女子大学文学部附属高等学校
校長　新　　睦　人

『研究紀要』第28集をお届けいたします。私ども奈良女子大学文学部付属中・高等学校では、昭和48年度に中学に入学した生徒から、中・高６か年一貫教育システムをとってきました。以来、数次におよぶカリキュラムの改訂を経ながら、約10年の歩みをとげてまいりましたので、『研究紀要』第27集では、「６年一貫教育の総括」という特集をいたしました。実施以来のさまざまな問題がこの総括のなかに記されておりますが、多くの学校にさきがけてこのシステムを採用したことの自負もそこには示されております。

本28集では、この総括を承けた形で、いくつかの残されたテーマが論じられています。６年一貫におけるＨ・Ｒと道徳の問題とか、進路状況、一泊行事、水泳訓練などがそれに当たりますが、と同時に、生徒指導部、研究調査部、要医療災害の実態、ＰＴＡだより、修学旅行、学園祭、体育大会などの報告も、６年一貫とはあえて特定しませんけれども、この約10年の歩みを総括するものです。

このような総括が今日の時点で行われることの意義は、皆さまご存知のように、教育改革をめぐる官・民さまざまな論議のなかで６年一貫教育のリアリティが具体的に問われていることに対して本校の実践を通しつ何らかの検討の素材を提供できるというふうに考えることもできますが、この２年度にわたる反省は、必ずしもそうした外在的な理由から行われたものではなく、現今の教育制度と社会環境のもとで本校の教育実践が直面している問題点を素直にみつめるところからも生じております。

実際に、中学から高校へと高学年になるにしたがって大学受験の圧力が生徒たちにかかってきて、クラブ活動から離脱していくという実態や新聞部をも自ら運営できない生徒会の自治能力の問題が指摘されていますし、学園祭についても、何らかの形で見直しが必要であることを「教官アンケート」は示唆しています。見直しは修学旅行についても要請されており、「観光旅行」化した修学旅行が現代の生徒にとって真に教育的な意義をもちうるか、といった問いも示されています。６年一貫というスローガンにもかかわらず、体育祭では中・高別に行っているという実態も反省されています。

決して豊かとはいえない予算・施設・人員などの条件のもとで、教育現場にあって「より良い教育とは何か」と絶えず自省し苦闘している、わが校の教師たちが、実践のなかから掴みとったものを読みとっていただけますならば、本集をお届けする立場として誠に喜ばしいことであります。新しい社会の動向に眼を向けながら、今、本校も、将来への展望を確かめなおす時点に達しております。空虚な理想論でもなく、安易な妥協でもなく、現実味のある教育システムとして本校の教育が個性を発揮できる、そのための貴重な反省をすることができた、と私どもは考えております。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

中高一貫の経過と理念

松　村　正　樹

1. はじめに

1973年の入学者から六年一貫になり、その三年後から高校入試を行なわなくなったので、本校の六年制はすでに十数年の歩みを経たことになる。このあたりで一貫教育の跡をふりかえって総括しておこうというのは時宜にかなったことであろう。後述するようにいろいろな理由から一貫に踏みきったのだが、その後の過程で予想していなかった、予想はしていたがこれほどまでとは思わなかった事態が生まれ、それをめぐってすでに何度も討議が行なわれてきた。ところが、一貫に踏みきる前からのいきさつを知る教師がだんだん少なくなってきて、討議の共通の前提となるべき認識がずれてきているために、話がかみあわないことがよくある。話の途中でこの点がわかって議論しているのだと思ってきたことが実はわかっていなかったと判明して、もう一度スタートに戻らなければならないということも起こる。それに加えて新任の若い教官は昔からの一貫校のように思って着任し、古い教官の話がわからない。そこでこの場所を借りて、そもそもどういうことが原因になって一貫化がなされ、その理念としてどういうことが掲げられたのか、その理念と現実との間にどんなギャップが生じているのかを大まかに略述しておくことにする。

2. 一貫化前の中高に内在した問題点

私が赴任したころ（1966年）は次のようなシステムになっていた。まず中学での入試があり付属小学校から60〜70人（競争率1.1〜1.3倍）が、一般から70〜80人（競争率3.5〜4.7倍）が学力試験を経て入学する。ここでの問題点は、義務教育の段階で入試を行なうこと（これは今もそうだ）と、付属小学校の児童のために人数の特別枠があること（この点も今と同じで、ただ昔に比べて10〜20人減っているだけだ）の二つであろう。どこの付属中学でも大体このようなシステムをとっていた。次にこうして入学した生徒が付高に進む段階でまた入試があって、150人の中三生徒のうち約110人を合格させ、成績下位の約40人が不合格になる。ふるい落とされた人数分だけ一般中学から受験した者を合格させ（競争率10〜16倍）付中からの合格者に加えて150人を高校に入学させる。ここでの問題点はというと、同じキャンパスにあって同じ教師が兼務して教えているのに、その教師が自分たちの教えている生徒を選別してふるい落とすこと、自分たちが教えてきた生徒のうち低学力の者を外に出して公私立を受けさす、一方では公立高校の入試に先だって一般中学の優秀な生徒を上澄みをすくうようなやり方でとること（これは公教育に及ぼしている付属公害ともいえるものだった）にあった。

以上のようなシステムには二つの原理が矛盾しあいながら内在していた。一つは同じ大学の付属あるからという名目上の理由で、実質的には何の必要性もなにのに付属小学校の児童のための指定席を設けるというもので、もう一つはそれに足を引っ張られながらもできるだけ優秀な生徒を集めたいというエリート校志向だった。前者は付属小と付属中が何らかの共同の方針や計画に沿って小から中に進む児童・生徒を対象にした教育実践や教育研究をやるためにこそ必要であり、またその

必要がある場合にのみ容認されるものだが、少なくとも私の赴任した頃から現在までまったくその種の実践も研究もなく、いわば中身がないのに容れ物だけが年々用意されているという不思議な制度である。後者は当時の付属全体の体質ともいうべきもので、今でも多くの付属はこの体質から脱却していない。一貫前の本校ではより広い範囲から優秀な生徒を集めようとして、隣接する他府県（大阪・京都・三重など）からも付高を受験できることになっていた。

3. その制度のもたらした校内矛盾

上記のような制度の矛盾は中三の生徒と担任に凝集されてさまざまな苦悩を生みだしていた。中三の後半になると付高入試を目前にした生徒の不安と動揺から学級経営が非常に難しくなってくるし、担任は自分のクラスの生徒のうち何人かが必ず落ちることを思って夜も眠れないとよく聞かされた。しかも合否を決めるのは他人ではなくて自分たちなのだ。落ちた子に公立や私立高を受けさせる仕事は一般の中学教師なみだとは言えるが、公立にない苦労があった。公立高の入試に内申が重視されるようになってきたが、すべての中学の生徒が同じような平均的組成であるという前提で在学中の成績評価の分布比率を一定にすることが求められたため、中学入学時にすでに入試をやって足切りを行なっている付属中はその点でかなり不利になったからだ。一般中学の生徒と並んで受験し学力試験ではたとえ上位であっても、内申が不利であるために落ちるという事態が生じる。

生徒にとってみても、どこの中学の生徒も高校受験の関門はあるのだが、みんながそれぞれちがう高校をばらばらに受験するというのとちがって、150人全員が同じキャンパスにある付高を受験し、そのうちの40人が落とされて外にはじき出されるという特殊な状況は、付中生にとって重い心理的圧迫になっていた。

当時「野火」という学校新聞が発行されていたが、この「40人カット」の問題がよくとりあげられ、中学でもう入試をやっているのになぜみんながそろって付高に進学できないのかという訴えが毎年のようになされ、教師や生徒からアンケートをとったりもした。入試が近づくと深夜に不安にかられて生徒名簿をとり出し、この子とこの子は落ちるだろう、そしたら自分は入れるかな、などといけないことを考えてしまうという中三生徒の苦悩に満ちた文が載ったりもした。赴任して二、三年もたつと私にも何らかの改革が必要な事態になっていることがわかってきた。

従来から中高のつながりを検討するための接続委員会というのがあって問題点を集約していたがやがて私もその委員になり、いろいろ考えさせられることが多かった。しかし何といっても問題の提起者は中三の担任だった。この中三担任グループからのもう耐えられない、何とかしてほしいという悲痛なと言えるほどのアピールが起動力になって接続委員会が本気でとりくみ、何度もの教官会議での提案や討議を経てやっと中高一貫に向かって踏み出したのだった。

4. 一貫化の始動と問題点

何度も言うように本校の特殊性として中と高が同じキャンパスにあり、教師も中高兼任だという事情がある。そして形骸化し空洞化しながら慣習として続いてきた付小からの連絡進学の制度がある。しかもエリート校的体質をどう考えるかについて教師間に見解の相違があった。こういったことが一貫化を具体的に構想するにあたっての議論を複雑なものにした。

錯雑した討議の内容は省くとして、とにかく中高一貫は実現を見た。付中生の全員が無試験で付高に進めることになり、したがって高校入試がなくなって高校への一般からの入学者もなくなり、完全な六年制に移行したことになる。ところが、義務教育の中学とそうでない高校をつなぐのだから新しい問題点が生ぜざるをえない。つまり、高校のレベルに合わせて六年間の教育に耐えられる

者を中学入学の段階で選別することが必要になるということだ。そのために、付属小からの入学者を50人に減らすことになり、付小の猛反対を招いた。

付小は従来から児童全員が付中に進学することを主張していたから、それが50人に減ることには強く反対し、一貫するのであれば義務教育段階の小中をこそつなぐべきで、高校教育に耐える学力のない者は中高間での入試で落とせばいい、高校で入試のないところはないのだからと主張し、50人しか付中に入れないことになれば付小の児童の塾通いなどの弊害を生み、付小の伝統である全人教育がゆがめられると訴えた。その主張にはうなづける点もあるのだが、根本のところで、何の共同研究もやっていない小と中がなぜ児童・生徒を連絡進学させねばならないのかという問題を問い直すことがなく、ただ同じ大学の付属だから、昔からそうしてきたからという形式論と便宜主義で片付けようとしたところに問題を後に残すことになった原因の一つがあったように思われる。

中高側はその校内矛盾の深さと付中生徒の苦悩がなかなか付小側にわかってもらえないのにいらだち、とにかく中高一貫を認めてもらいたい余りに、小中の連絡進学の制度そのものに対する疑問はひっこめ、ただその人数を50人に減らすことで妥協したのだと言える。

また当時付小側から中高は一貫化によって六年制のエリート校を目指しているのではないかとの危惧が表明されたが、それが単なる危惧であったことは、その後抽選制を導入したり、学区を狭めたりしたことで証明された。中高はただひたすら中三の生徒と担任の苦悩というマイナス面を除去しようと意図から一貫化しかないという結論にたどり着いたのだった。だから一貫化の最大のメリットは中高独特の受験体制と選抜から中三生を解放したという点にある。公立中学の生徒と教師がまだそれから解放されるべくもない中で、付属だからこそできた「特権」的な解放ではあったが。また教師にとっては中三担任の並みはずれた苦労が解消したし、従来中高二つの入試があった三学期の多忙さも緩和された。

高校入試をなくしたということは、下位40人を足切りして同数の成績優秀な生徒を入れることを止めるわけだから、当然ある程度のレベルダウンを前提にしていた。それは前述の校内矛盾の解消のために支払わねばならぬ代償であった。その点で一貫化自体が脱エリート校化の始動でもあったのだが、付属をめぐる世論の動向がさらにそれに拍車をかけることになる。1960年代は全国的に付属学校のあり方に批判が集中した時期で、あちこちの付属で起こった不祥事件が付属学校の特権的体質を露呈して国会でも論議された。文部省も何度か通達を出して、入試方法を変えることと父母負担を軽減することによって脱エリート校化をはかるようにと指導していた。たまたま入試方法を大きく変えようとしていた本校がそういう時代の要請に背を向け続けることはできなかった。こうして一貫化以後の本校は、入試で選抜する中学は一般中学とかなり異った組成の生徒を擁するある程度のエリート校であることは否めないにしても、入試に抽選を加味したり学区を狭めたこともあって、高校段階では公立高校の中位のランクに並ぶ程度の学校に変わっていくことになる。大学進学率もかなり低下して、有名私立や近畿圏の他の付属中学を受けて落ちた者が本校に入ってくるという構図が生まれている。

5. 中だるみと学力差

前述のように一貫化の最大のねらいは中三段階でのゆがみと矛盾を解消することにあり、それは達成された。本校の中三生は高校入試のプレッシャーをまったく感じないでのびのびとやっている。高校に入るための受験勉強に追われている公立中学の生徒から見れば羨ましい限りであろう。ところが六年間というかなり長いスコープの途中に何の関門もないことから、のびのびがのんべんだらりとなり、だらだらとなって中三あたりでだれてしまうという現象が現われてきた。いわば中だる

み現象である。しかしそうだからといって高校入試を復活しようということにはなるまい。たとえ入試という鞭で尻をたたくことがなくても、だれさせないための教育的な方策がいろいろ考えられよう。以前に卒業論文のようなものを書かせる－中学のしめくくりとしてどんなテーマでもいいから択んで自分なりにまとめさせる－試みがたされて成果があったが、他にももっといろんな試行がなされるべきだろう。

もう一つ、一貫化にあたって当然予想されてはいたが、ここまでになるとは思わなかったという現象に学力差の拡大がある。中学段階は義務教育で、一般公立中が本校よりも大きい学力差を持っているのだから、そこでの学力差は口にすべきことではない。問題は高校段階だ。中学で入試を行なっているとはいうものの、中三までの間に差が開きそれが入試なしで高校に入ってくる。公立高校は輪切りの選抜が定着して、上位から下位までのランクがだいたい決まり、それぞれの学校内では比較的学力差が小さい。それに比べると本校は上位から下位までの生徒をふくむ広い学力差をかかえている。これが日々の授業の上での苦労を過重にし、進級・卒業の認定にあたってさまざまな問題を生みだしている。一貫化したこと、さらに抽選を導入したことは将来学力のレベルダウンを生じ学力差が広がることを覚悟してのことだったはずだが、いざそれが現実のものとなって生徒の中から「落ちこぼれ」る者が出、しかもそれをどうにもできないという立場に立ってみれば、苦渋が深まるいっぽうである。

そこから自分たちの教師としての力量に限界を感じ、限られた力量で面倒を見きれる程度にまで学力差を縮めたいという気持が生まれてくる。また、それとからんで付小からの慣習的な連絡進学の足かせをどうにかできないものかという来年の問題点が浮上してくるのだ。

6. 今後の検討課題

一貫化から十数年を経た中高は今立ち止まってこれでよかったのだろうかと歩んできた道をふり返り、これから進むべき方向を探ろうとしている。私見によれば問題点は二つに集約できそうだ。一つは付小との連絡進学をどう考えるかだ。

同じ大学の付属だからというだけでは連絡進学の必要性を弁護できないことは議論の余地がないところだ。現に一般から付中を受験する子の親から、なぜ付小の児童にだけ特別枠があるのか、同じように税金を払っている他の住民に対する人権上の差別ではないのかと申し入れを受けたこともある。また一般から受ける子だけが抽選でまずふるい落とされるのに、付小の児童にはそれが免除されているのはなぜかという問い合わせもよくある。中高の教師自身も納得のいかないまま昔からの慣習だということだけでそれが続いている。文部省が言うように、付属の持っている実験学校としての使命から児童・生徒を継続的にフォローして教育研究や実験的教育を行なうためにこそ連絡進学が許されるのであって、そういう中身を欠いたままどこの付属も形骸的な連絡進学を続けていることに大きな問題がある。中高の内部に付小に対する特別扱いを止めて、一般も付小もまったく同列にオープンで入試をやるべきだという意見が強いのも無理はないと思われる。50人という人数はともかくとして、何らかの連絡進学を続けるのであれば、欠けたまますでに久しい中身を早急に創り出す動きが起こされねばならない。入れるべき中身があってこその容器であって、形骸化した容器の必要性を示すためにそれに盛るべき中身をあわてて探さねばならないというのはいかにもわびしいことではあるが。

もう一つの問題点はやはりここまで広がった学力差にどう対処するかということだろう。小中は別として高校段階で学力差がむやみに広がってはとうていやっていけないのは自明のことだ。ただ小学校であれ大学であれ十人でも五人でもその中に学力差はあるのだから、学力差が小さければ小

さいほどいいということにはならない。学力差があって当然のものだし、またどこにでもあるものなのだ。だから学力差をできるだけ狭めようとする姿勢は、教師が苦労をいとう姿だととられてもしかたがない。ある程度の調整は必要だとは思うが、むしろある程度の幅の学力差を保ちながら、それにどう対応しどう工夫するかという実践に付属としての存在理由を見出すべきではないだろうか。少なくとも、学力差に対応するための実践よりも学力差を縮めようとする策が先行することだけは戒めなければならないと思う。

付属の使命と存在理由はあくまでも教育実験校である点にある。優秀な生徒ばかり集めれば教師は楽だし、ほうっておいても有名大学にどんどん入る。付属は入試の方法をかなり自由に決められるから、そういう学校にしようと思えばできる。だが、そんなことは有名私立にまかせておけばいいではないか。そういう点で私立と競うことは付属の存在理由をかすませ、墓穴を掘ることにしかならない。ある程度の学力差を持った平均的なレベルの生徒を擁し、そういう場で地道な教育実験や指導法の工夫を積み重ねることこそが公教育に貢献できる付属らしい実践であると思う。

最後につけ加えておきたいのは、学力差の大きいことを歎きながらまだなされていない対応策もあるのではないかということだ。特に学力に差の生じやすい英語や数学においては、習熟度別学級をつくることを考えてもいいのではないだろうか。また、現行指導要領が卒業に必要な最低単位数をかなり低く押さえているにもかかわらず、本校では履修した全教科の単位の修得を学力に大きな差のある全生徒に義務づけている点はひどく保守的であるようにも見うけられる。授業で難儀したり、進級や卒業認定で苦渋するのは教師の宿命であるのかもしれないが、巨視的な立場から全体のシステムを見直して活性化の道を模索することが必要であるように思う。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第26集
1985年6月

6ヶ年一貫教育におけるH・R、道徳の内容について

上浦　一道　　中尾　博一
水町　律子　　矢野　幸洋

1. はじめに

6ヶ年一貫教育を実施してから10年を経過するが、これにふみきる段階で、今まで各学年に一任されていたH・R、道徳の内容を、教務部の中にH・R道徳係を設置して、各年度の記録（表①）をとり、活動に必要な資料を集積していくこととなった。

ところで、H・R、道徳の時間は、教育課程の変遷によって、昭和55年度までは、中1でH・R道徳が各1時間であり、中2以後はH・Rが1時間しかなかったが、昭和56年度以後は、中学では全学年がH・R、道徳が各1時間となり、高校ではH・Rが1時間となった。

各学年では、H・R係の教師が1人居り、各クラスにはH・R委員、男女各1名が選出されて居り、これらが中心となって、生徒達の意見を十分に取り入れながら、当該学年の特色を出して、1年間のH・R、道徳の持ち方について、年間計画を立てるのが普通である。

H・Rの時間は全学年とも木曜日の4限ないしは5限目に設定し、全校で取り組む内容のものが一時に実施できるよう考えて居り、道徳の時間は各学年単位で、同一時間に設定し、学年で取り組む内容のものが、一時に実施できるよう配慮している。

以下に10年間の記録を整理して、それを分析し今後のH・R、道徳のあり方を追求していく指針としたいと思っている。

2. 10年間の記録

表①をもとにして、本校が実施してきたH・R、道徳の活動内容を分類してみた。H・R、道徳が各1時間の学年では、年間に約50～60時間の活動があり、H・R1時間の学年では、年間に25～30時間の活動がある。

本校では、H・Rは生徒の自主活動、道徳は教師主導型の活動というように、はっきり区別せず、H・R、道徳を一体のものとしてとらえ、その活動内容は相互乗り入れの形をとっている。

したがって、その活動内容は多岐に亘るものであり、学校行事一つを取ってみても、当該学年だけが関係する中1の一泊行事、中3の水泳訓練、高2の修学旅行、また、中学生のみ対象の写生大会、音楽の授業選択者のみ対象の音楽会等々、学年によってその活動内容は大きく異なる。

しかも、各学年はその独自性を出すために、取り組む重点が異なるのは当然であるから、これらを一つにまとめて、その記録を公表するには、大変な無理があった。

しかし、これらの活動内容を一つの観点から分類し、その概略をつかんで、今後の指針とするために、われわれは、次の3つの分野に分類することにした。

㋐　学校行事に関して、その準備と反省に当てたもの。
㋑　学年として、生徒の自主的な活動を行なったもの。
㋒　学年として、教師が中心となり、その運営に当ったもの。

これが妥当な分類かどうかは別にして、以下にその記録を掲載するが、まず、過去10年間の記録を⑦～㋐に分類して、1年間の活動時間を表にしたものが表②である。

さらに、各学年の特色ある企画を取り出して、表にしたものが表③である。

これらをもとに、分析を試み、今後のH・R、道徳の持ち方について、十分な討議をする機会を持ちたいと思っている。

表①　ホームルーム・道徳の記録　　昭和　年度　中・高　年

月	日	曜	活動単位			場所		活動状況		備考
			学年	クラス	その他	自教室	その他	活動内容	運営方法	

表②　10年間のH・R、道徳の記録
⑦　学校行事

活動内容	学年＼年度	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
一泊行事（中1）	中 1	9	6	5	6	6	8	5	6	9	11
修学旅行（高2）	2	2	5	1	1	2		7	3	5	5
全校レクリエーション	3	1	3	2	3	3	1	4	6	4	3
	高 1	7	1	5	7	4	6	5	5	4	2
	2	4	6	3	6	4	4	3	5	3	2
	3	3	3	1	1	2	4	2	1		1
学園祭	中 1	6	10	16	17	9	18	8	13	17	18
	2	8	4	10	7	14	13	11	18	19	18
	3	4	2	3	5	9	10	14	16	12	10
	高 1	5	5	6	5	6	7	7	6	8	7
	2	6	7	10	9	5	12	6	7	9	10
	3	4	4	7	7	4	9	4	7	7	8
体育大会	中 1	1	4	2	2	2	4	1	4	3	4
球技大会	2	6	1	1	1	2	3	2	2	1	4
水泳訓練（中3）	3	9	5	8	6	4	7	11	11	4	11
	高 1	2	3	2	3	3	1		2	2	1
	2	2	4	2	3	3	2		1	2	1
	3	2	2	2	3	5	2		3	1	1
音楽会	中 1	5	2		3	3	3	4	3	2	7
写生会	2	2	2	2	3	4	2	1	4	2	3
	3	1	2	2	3	6	3	2	5	3	
	高 1	1		1	1	1		1	1	1	1
	2	1	1	1	1		1	1	1	1	1
	3			1	1	2	1			1	1
生徒大会	中 1	1	6	7	6	4	3	1	2	2	1
クラブ集会	2	1	5	4	4	3	4	1		2	1
学芸クラブ発表会	3	1	6	4	6	2	2	1	1	2	1
	高 1	1	5	6	7	4	1	2	2	3	3
	2	2	6	4		4	5	2	3	3	2
	3	3	3	2	4	3	3		1	1	2
文化行事	中 1				1	1					
	2				1	1					
	3			1	1	1					
	高 1				1	1					
	2				1	1					
	3				1	1					
講演会	中 1		1								
	2										
	3										
	高 1								1		1
	2								1		1
	3								1		1
計	中 1	22	29	30	35	25	36	19	28	33	41
	2	19	17	18	17	26	22	22	27	29	31
	3	16	18	20	24	25	23	32	39	25	25
	高 1	16	14	20	24	19	15	16	17	18	15
	2	15	24	20	20	17	24	13	18	18	17
	3	12	12	13	17	17	19	6	13	10	14

④ 自主活動

内動内容	学年＼年度	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
スポーツ大会	中1	3	9	10		5	2	1			3
ボーリング大会	中2	3			1		1				6
雪合戦	中3	2	2				1			3	
	高1	3	3		1	2	1			2	
	高2	3	1	3		2	1	2	2		2
	高3	6	8	1	3	1	5	3	1	4	4
クリスマス会	中1					1	1		3	5	4
お別れ会	中2					3	3			3	1
卒業パーティ	中3					3	5	3			4
新入生歓迎会	高1		2	2			1				
	高2			1							
	高3				1				1		
映画、ビデオ、劇、音楽等の鑑賞	中1	6	1	1	1	2					
	中2	1	1	1		1		5	1	2	
	中3	1	2	1		2	1				
	高1	1	1	2		1	2		1	1	1
	高2			1		3	2	3		4	1
	高3	2		3			1		1	2	1
講演、講話	中1	1									
	中2	1									
	中3										
	高1						1				
	高2		1	1				3		3	3
	高3			1						2	2
感想文	中1								1	3	
3分間スピーチ	中2			4	3			1	2	2	
意見発表	中3										
	高1			1		1					
	高2										
	高3										
園芸	中1	9	8		8		5			3	
料理	中2					7	1				
もちつき大会	中3						4				
	高1						1	2			
	高2	4					1		1	1	
	高3										
タイムカプセル、劇、凧、文集等の制作	中1	2	3	3	6	2	6		2		4
	中2		1			8	9				
	中3	1		5	4				5		
	高1				1			6	7		
	高2						3				
	高3	1	1	1	1		1	4	1	1	1
登山	中1	6			2	1	2				
マラソン	中2					1	2				
ハイキング	中3						3		1		
	高1										
	高2										
	高3										
ゲーム大会	中1	2		5	5		5	3	3	6	5
百人一首	中2		1	2						2	4
合奏会	中3	1	1					1	1	2	
	高1	2									
	高2	3		1							2
	高3										
自由研究	中1		2					4			
自主活動	中2		3			1					
	中3	1				10		3			
	高1		1			1					
	高2					1					
	高3								2		
計	中1	29	23	19	22	11	21	9	9	17	16
	中2	5	6	7	4	21	16	5	3	9	11
	中3	6	5	6	4	15	14	8	7	5	4
	高1	6	7	5	2	5	6	8	8	6	6
	高2	10	2	7		6	7	8	3	7	7
	高3	9	9	6	5	1	7	7	6	7	6

㋐ 教師主導型活動

活動内容	学年＼年度	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
生活指導、学習指導、担任講話	中1	8	2	4	1	3	1	3		2	3
	2	1		1	2			1	1	1	4
	3			1		2	2	3		1	
	高1			1		4		1			2
	2			2		2			1	1	1
	3		1	1				1	3	2	3
学校生活について｛クラス討論、反省会、アンケート｝	中1	4	3	8	4	10	2	4	1	7	4
	2	5	3	4	1	3	8	2	1	12	4
	3	4	1	3		7	2	5	1	2	
	高1	2	3	4	1	2	3	1	3	2	1
	2		5	1		3					
	3					3					
クラス、生徒会の役員選出 生徒会の討議	中1	2		8		1		1	1	1	
	2			4		1		1		1	1
	3			3							1
	高1		1	4					1		1
	2			1							
	3										
教科に関するもの 英語劇、暗誦大会、社会科スライド作り	中1	1	1				3		2		1
	2								10	1	4
	3								8	13	
	高1										
	2			1							
	3										
同和教育に関するもの｛部落問題、障害者との交流｝	中1			1			2	1		1	
	2					4	8	7	11	6	5
	3			1					5	9	11
	高1										1
	2									4	2
	3								6	5	
社会問題について 男性と女性、親と子 友人について	中1	1	1				2	1			
	2					3	1			1	
	3					3	1			1	
	高1						2				4
	2										
	3										
計	中1	16	7	13	5	14	10	10	4	11	8
	2	5	3	5	3	11	16	11	23	22	18
	3	5	1	5		12	5	8	14	26	12
	高1	2	4	5	1	6	5	2	4	2	9
	2		5	4		5			7	5	3
	3	0	1	1		3		1		7	3
合計	中1	67	59	62	62	50	67	38	41	61	65
	2	29	26	24	30	58	54	38	53	60	60
	3	27	24	31	28	52	42	48	60	56	41
	高1	24	25	30	27	30	26	26	29	26	30
	2	25	31	31	20	28	31	21	28	30	27
	3	21	22	20	22	21	26	14	19	24	23

表③　特色ある学年企画

	中 1	中 2	中 3	高 1	高 2	高 3
52	花壇づくり 芋植え 耐寒かけ足	文集	自画像 （作文、講話）	昔の遊び再現	芋植え	
53	凧作り グループ別の自由研究	親と子の対話 グループ別作業	お別れ会	新年会	芋植え	学年球技会
54	自由制作 クラス対抗球技会	親と子の話し合い カルタ大会 3分間スピーチ	グループ作業 同和講演	映画会 ・ルーブル美術館 ・砂の器	クリスマス会 スポーツ会	レコード鑑賞 映画会 赤い風船 おんぼろ人生
55	園芸作業 かるた会 放送劇制作	3分間スピーチ	グループ作業 VTR制作 8㎜　〃 自由研究	グループ別自由活動	文集	スポーツ会
56	壁新聞 登山 クラス対抗球技会	芋植え 放送劇 マラソン	グループ作業	高2との対抗試合	高1との対抗試合 勉強会	学級対抗球技会
57		マラソン 放送劇 交流教育		もちつき	卒業制作	球技大会
58		差別に関するシリーズ 新入生歓迎会		放送劇	先輩に聞く 南極観測 海外協力隊	卒業制作
59	タイムカプセル製作 クリスマス会	英語紙芝居 グループ研究	同和教育シリーズ	放送劇	芋植え 同和教育シリーズ	卒業パーティ
60	花づくり 3分間スピーチ クリスマス会 生活アンケート	自分をみつめなおすシリーズ クリスマス会	障害児との交流 音楽会	先輩に聞く	ビデオ鑑賞 講演 南極観測 飛鳥の水時計	同和教育 日本と朝鮮半島
61	文集作り クラス新聞 クリスマス会	スポーツ大会	ろう学校との交流 卒業パーティ	教育実習生に聞く 男女問題を考える	留学生に聞く	球技大会

3. 内容分析

前節の一覧表から、これらの内容について、分析を試みた。その観点は次の2点にしぼってみた。

(1) 学年の進行にしたがって、H・R、道徳の内容はどのように変化するか。

新教育課程を実施中のこととして、昭和55、56年度入学者について、その内容の変化を表にしてみた。昭和55年度入学者の中学での60時間、高校での30時間について、その主な内容を表にしてみたのが、下表④である。

表④ 昭和55年度入学者の6年間の記録（3時間以上のもののみ取り出す）

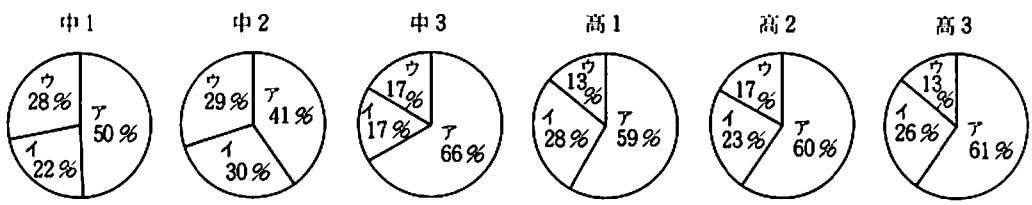
	学園祭	園芸作業	放送劇	新入生観迎会	同和問題	その他
中1	18	8	7			一泊行事5、かるた会6
2	15	7	8	4	障害者 8	
3	9	4	8	5	交流教育5	水泳訓練5、英語劇 5
高1	6	2	6			
2	6	2			同和問題6	修学旅行4
3	7				〃 5	道路3、スポーツ大会4

中学校では、仲間づくりに主眼が置かれ、グループ作業として園芸作業、放送劇の制作などが大きな比重を占めており、また、学校行事の最大のイベント「学園祭」に参加するために、十分な討議と練習の時間をとっていることがわかる。

さらに、中学から高校への同和教育の手順として、交流教育からすべての差別に立ち向かう方向づけが明らかに時間数として表われ、また、学校行事として中1、中3、高2での宿泊行事の討議、反省のため4～5時間が費やされている。

ところで、学年移行として、H・R、道徳の内容がどのように変化するかを見るために、昭和56年度入学者の内容を㋐～㋒の領域に分けて、その比率を表にしたものが、表⑤である。

表⑤ 昭和56年度入学者の時間配分



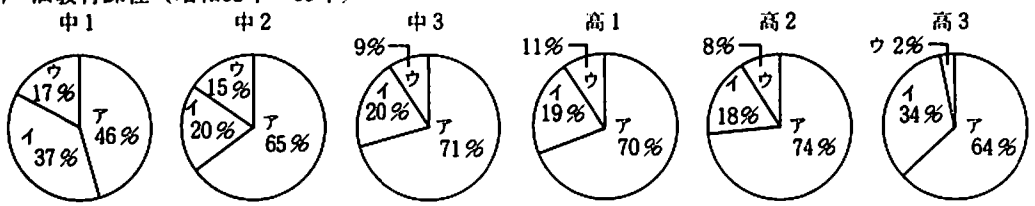
学年によって、特色はあるものの、中1では、学園祭、一泊行事のために多くの時間がさかれ学校行事に費やす時間が多いが、中2では、自主的活動に費やす時間が増加し、中3から上級では積極的に学校行事をリードするために、ふたたびその比率が高くなって行く。しかし、教師主導型の活動は大きな比重を占めていないことは、理想に近いと思われる。

(2) 教育課程の変化が活動の内容をどのように変えるか。

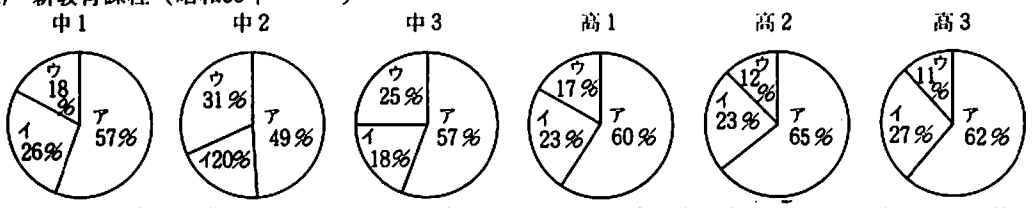
昭和56年度入学者より、新教育課程を実施しているので、中学での活動が全学年で2時間となった。その前後における変化をみるために、昭和55年度以前の活動比率と昭和56年度以後の活動比率を㋐〜㋒の内容に分類して、表にしたのが表⑥である。

表⑥ 教育課程別の内容比率

(i) 旧教育課程（昭和52年〜55年）



(ii) 新教育課程（昭和56年〜　）



旧課程での中2、中3での学校行事の内容に費やされた比率と新課程のそれとの差は、一目瞭然である。すなわち、時間数が増加すれば、単に学校行事の協議、反省だけでなく、各学年とも自主的なH・R、道徳の時間が取れることを示している。しかも、それだけにとどまらず、高校に進んでからも自主的な学年主導の時間を取って行く習慣が身につくことを、上記の表は示していて、何よりも時間の確保が生徒の自主性を養う必要条件であるらしい。

4. おわりに

H・R、道徳の活動目的は、何といつても生徒達の自主活動の保障ということであろう。ここに、始めて今までの10年間の集計をしてみて気づくことは、学校行事への参加のために協議反省に時間を費やしていることが多いことである。

これの内容も一概に学校からの押しつけとはいえないまでも、もっと他の視点からみた自主的活動の時間の保障が必要なのではないだろうか。

そのためには、学校行事の実施がH・Rの時間を取っている木曜日に集中して、H・Rの時間が取れないということをなくさなければならないだろう。

さらに、自主的活動をうながすための場所と材料の保障も必要であろう。たとえば、学年で協議するにしても、120名を収容できる部屋数は限りがあるし、運動用具、農作業道具一つとってみても、全校生が活躍するには不足している。

また、先人の立派な話を聞くことや、よき講師を招くにしても、その予算的な裏付けがなされていない。

これらの困難はあるにしても、ある学年が取り組んだ有意義な自主活動を、次の学年が参考にして取り組むように相互の連絡を密にして、何としても生徒の自主活動を保障する方向で、取り組むよう努力しなければならないであろう。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第26集
1985年6月

生徒指導部10年の総括

加藤　勇・野澤省三・寅貝和男

はじめに

生徒指導部10年間の総括ということになれば、中高6年一貫校として考えた場合、さまざまな問題・課題が山積している。その中でも最大の課題は、義務制である中学と、そうでない高校との間の生徒指導の整合性ということである。6年一貫の国立大附属であるから、本来ならば共通した理念と規範で通せるはずなのだが、中学生と高校生の間には生活体験・認識力の差が大きく、どうしても中学生の場合は「しつけ」を重視しなければならないということで、高校生に比べて規制も厳しくなっている。その典型的な例は服装規定である。

勿論、高校生であっても基本的生活習慣の確立ということが本校のみならずどこの高校でも生徒指導のメインテーマとして位置付けられているが、そのわりには本校の規制はゆるやかであり、伝統的にひきつがれている自由・自治の校訓が生徒に自主的・自律的に活動することを求めてきた。このことは、もちろん中学生にもあてはまるのだが、最近のように自主的・自律的に活動することが困難になっている現状を見るとき、生徒の自治活動能力をいかにして高めてゆくか、ということが大きな課題となってくる。とくに中学生は、入学して来た生徒たちの中からリーダーを育ててゆく期間にあたるわけだが、これがこの10年間にとくに大きく変質をとげた課題である。つまり、以前のように小学生時代から児童会長その他の指導的な役割を経験してきた生徒が極めて少なくなってきたこととあいまって、勝手なことならしゃべれるが、いわゆるオピニオンリーダーとして発言し、まとめてゆける力をもった生徒が、これまた極めて少なくなってきた。

こうした現状に対し、本校でもたゆまざる努力と指導を積み重ねてきたのであるが、一部をのぞき、あまり好転していない。とくに男子生徒の中にリーダーとしての役割を果たせるものが激減したといえる。それがそのまま高校生となるのであるから、生徒会活動の活発化が叫ばれて久しいけれども、教師がイニシアティブをとらないと中々動かない生徒会となってきている。よく「今、生徒会なくしたらどうなるかな？」、「いや、生徒は何も言わんのとちがうか」といった冗談がでたが、これがジョーダンだけでもなさそうな現状に我々はある種の危機感を持つ。

生徒会活動をはじめとする自主活動が不活発なのは何も本校だけの現象ではない。奈良県の高等学校生徒指導協議会でもよく取り上げられる話題である。しかし本校は、前述のごとく、長年にわたって自由・自治の伝統のもとに生徒に自由な自治活動を保障してきた学校である。一部の者が言うような共通一次やその他の受験体制のせいにして、そのことだけで自治活動の不活発化を説明できるものではない。前述の生徒の質的な変化、あるいは今日の子どもを取りまく社会の変化なども考慮に入れておかなければならないだろう。子どもを取り巻く社会の変化というのは、受験体制の問題ではなく情報化社会の進展である。

本校にそくしたいくつかの原因を考えてみよう。まず第1は、前述したようにリーダーとしての経験者が極めて少なくなったこと。第2に全般的な傾向でもあるが、自分の頭で物事を考え、まとめていける子どもが少なくなったということ。つまり、考える力を失ってきているということ。第3に、

受験勉強へのあせりから「余計なこと」に手出しをすることをためらう傾向が強まったこと、言いかえれば、自分に対する自信がもてなくなっている子が多くなったということである。それでいながら背伸びをしたがる傾向は一向になくならないのであるが、ともかく、こうした傾向が生徒の大部分を覆うようになって、生徒会活動・クラブ活動への消極性が加速されてきたように思う。

いずれにせよ、我々の課題として、6年一貫制を実施したタテマエがほとんど生かされていない現状を厳しく点検し、その反省の上に立って、生徒会活動やクラブ活動の活発化に取り組む姿勢が必要となってきている。

1. 生指部10年間のあゆみ

生指部10年間のあゆみといっても、10年前と今日とで大きくかわった点はあまりない。生徒指導部の基本方針はあくまでも「基本的生活習慣の確立」が根本であり、この土台の上にその時々の生徒指導上の課題を積み上げていっているのである。

生指部では日々の学校生活において規律ある生活を送らせるためにいくつかの「届」を出させている。それぞれは「届」であって、一部を除いて「許可願」でない点が本校の特徴である。それには次のようなものがある。

1. アルバイト届　2. 旅行届　3. 自転者通学届　4. 外出届　5. 早朝練習届
6. 特別居残り届　7. 紛失（盗難）届　8. 合宿計画届　9. ガラス等破損届
10. クラブ変更（退部）届　11. 拾得物届　12. 入室許可証（現在は廃止している）
13. 同好会設立許可願　14. 運転免許取得許可願（奈良県高等学校生徒指導協議会指定用紙）

本校には以上のような諸届がある。形式に一部変更はあっても、その多くはここ10年来実施されているものである。

「入室許可証」については、昨年（昭和61年度）から廃止した。「基本的生活習慣の確立」という観点からも遅刻防止は重要な課題であり、一日のはじまりをケジメあるものにしたいということで学校としても真剣に取り組んできた。とくに昭和52年度からは「遅刻絶滅作戦」なるものを実施したこともある。しかし全体としては一進一退の状況であり、あまり改善されたとはいえない。遅刻の問題では、本校のみならず県下の中・高校でも生徒指導上の最重要課題の一つとして取り組んでおり、多くの学校では校門指導を通じて遅刻防止に一定の成果を上げているようである。そんな中で、校内でのチェック機能をもっていた「入室許可証」を廃止したことについて、不安や批判もないではなかったが、遅刻指導をクラス担任にゆだねる方向を決めたことは、本校生徒指導の姿勢の変更として評価したい。

しかし遅刻に関する統計を見るとき、その〝評価〟もくずれてしまう。次頁にその一覧表を掲げておいたが、昭和60年度と61年度の年間遅刻数を各学年毎に見る限り、61年度はウナギ上りの急増ぶりである。また、同一学年集団の1年後の遅刻数をみると、その急増ぶりはすさまじいものがある。昭和61年度の各学年については前年度の1年下の学年の総数で見ればよいから、昭和61年度の中2は106→243、中3・142→575、高1・169→645、高2・195→587、高3・424→1,571という、まさに驚異的な急増ぶりである。中3以上はいずれも3倍以上の増加であるから、学年が進むとだんだん横着度?)も進むものの、この現実はやはり考えものである。次に昭和60年度、61年度の学年別遅刻一覧を示す。次の表のごとく、学校全体としての遅刻の数は倍増した。全てが「入室許可証」の廃止を結びつけるわけにもいかないだろうが、何か考えさせられる数字ではある。

昭和	中 1	中 2	中 3	高 1	高 2	高 3	合 計
60	106	142	169	195	424	866	1,902
61	211	575	575	645	587	1,571	3,832

ここで、この10年間の生徒指導部の主な事柄を列挙して、簡単にふり返ってみよう。

昭和52年度　特になし

昭和53年度
- ◦クラブコーチ制の実施（コーチに謝礼をつけることを決定）
- ◦夏休み等のクラブ練習時間を延長（午後3時迄→4時迄）
- ◦高校「朝の会」復活（昭和54年1月より）
- ◦自転車通学者を登録制に

昭和54年度
- ◦「服装規定」の改訂（昭和55年度より）を決定
- ◦届出用紙等の追加（自転車通学・早朝練習・同好会活動）
- ◦中学生に対する自転車指導（6月）
- ◦近附連「特活」部会、当番校として開催（昭和55年1月）
- ◦生指部仕事分担の変更（昭和55年度より）を決定
  清掃を生指部からはずし、独立の分掌にする

昭和55年度
- ◦奈良市中学校生徒指導協議会に加入
- ◦運転免許試験同意書制度実施（昭和56年度より）を決定

昭和56年度
- ◦自転車通学者の再登録（ステッカーを貼る）
- ◦高校生の運転免許同意書発行を原則として夏休みとすること
- ◦中3生と市立中学生との乱闘事件

昭和57年度
- ◦学園祭の警備に生徒も参加させる（高1・2年男子）
- ◦中2生、集団万引事件
- ◦校内生徒指導協議会の開催
- ◦校舎無人化に向けて下校指導の徹底（昭和58年1月より）

昭和58年度
- ◦上ばき制の実施（スリッパの使用、スノコ板を敷く）
- ◦無人化に伴い、日直割当（施錠・セットを含む）を平日3名制で

昭和59年度
- ◦中学「合同H・R」の実施

昭和60年度
- ◦遅刻チエックを副担任で
- ◦校内巡視を実施（盗難防止の一環として生指部教員で）
- ◦部室の改築成る（使用規定、部屋割当など生徒会で考えさせる）
- ◦学園祭、生指部へ。生指部定員6名→8名に
- ◦防火訓練、総務から生指部へ、日直割当は総務へ

昭和61年度
- ◦入室許可証の廃止（遅刻防止指導はクラス担任で）
- ◦全附連生徒指導部会を当番校として開催
- ◦中学1人2クラブ制を提案（教官会議で可決－生徒側は反対）
- ◦中1のクラブ集会を5月に実施

ザッとながめてみると以上のようにまとめられる。とくに大きなポイントといえばコーチ制実施、高校生の運転免許同意書制度、校舎無人化に伴う日直問題・クラブ指導の問題、上ばき制度の実施、部室

の改築、学園祭担当が生指部に入ったこと、入室許可証の廃止といったことになろうか。ここではクラブコーチの問題と上ばき制の実施についてふれておきたい。

クラブコーチが制度化された契機となったのは、バレーボール部の山口君（ＯＢ）や中学バスケットボール部の藤本君（ＮＴＴ勤務）らのそれ以前からの熱心な指導があったからである。彼らの奉仕的ともいえる指導に対して、何らかのささやかなお礼の気持を表したいということで保護者側の意志表示があり、コーチに謝礼をつけることが決められた。そして、年間を通してみてくれるコーチに10万円、夏休みだけの臨時コーチに1.5万円ということではじまったのである。ところが、いざ実施という段になってほとんどのクラブからコーチが申請され、生指部で査定するわけにいかないから総務に持ち込むと「話がちがう」ということでよくもめたが、結局、どのクラブを認めてどのクラブは認めないといった基準を設けることができず、出てくるクラブ全てを認めてきたので、コーチ料も徐々にではあるが増えてきたというのが実状である。その後もコーチ料については、総務から毎年のように「総括」の中で問題として指摘されている。

クラブ活動の活発化という観点からいえば専門家の指導があるに越したことはないのであるが、他方では、年々増大するコーチ料が他の必要経費を圧迫するということで、何らかの枠をはめたいとする総務などの意向もある。コーチ制度に対する妥当な基準が見つけられないものか、一つの課題である。

もう一つの大きな出来ごとは「上ばき制度」の実施である。本校はそれ以前は上下兼用で長年やってきた歴史があるため、校舎もどこからでも出入りが可能な開放的な構造になっている。しかし教室や廊下に上がった土のために、とくに掃除の時など土ぼこりがもうもうと立ちこめるといったことから健康上問題があり、上ばき制（スリッパ使用）に踏み切った。この件に関しては、当時の高１が３階のベランダのところに「スリッパ反対」を大書した模造紙を貼り出し、それに一部の生徒会役員も加わって反対を表明していたが、当時の執行部と生指部長との話し合いで終結した。しかし建物の構造上、グランドや中庭・前庭に出やすいため、生徒がスリッパのままで出歩くといった現象が跡を絶たない。とくに高３Ａ前はほとんど常態化しているのが実情である。ついでは中庭で、主として中学生が体育やクラブ活動の行き帰りにスリッパのまま歩きまわっている。どうも「全員生徒課」といわれたスパラシイ(?)精神が行きわたっていないようである。

2. 高校生徒指導の諸問題について

ここでは、主として高校のクラブ活動・生徒会活動を中心に簡単な総括をしておきたい。

① クラブ活動

本校（高校）には体育系８（野球・サッカー・バレーボール・バスケットボール・バトミントン・テニス・ワンゲル・卓球）文化系３（演劇・合唱・華道）中高合同６（水泳・放送・写真・器楽・化学・美術）の計17クラブがある。それぞれ放課後を中心に、時には早朝練習や夏の合宿なども折り込みながら活動している。これらのクラブにとって最大のなやみのタネは部員不足である。

本校は男女ほぼ同数の計360名ほどの小規模校であるが、クラブ数は柔・剣道やラグビーなどを除けば、ほぼ大規模校なみにそろっているので、一クラブ当たりの生徒数が少ない上に、高校に入るとクラブをやめたり、１年で入部しても２年には早くも退部する傾向が著しく、部員の定着率は極めて低い。文化系クラブの場合は、主として趣味的傾向が強いので別に考えるとしても、体育系クラブの場合、塾通いを中心とした受験勉強との両立の問題がある。とくに近年は、塾の日にクラブを休むのがむしろ当たり前といった空気があって、全部員がまとまって練習できないということも常態化している。

本校は6年一貫教育に踏み切る際、中高の完全接続によって好ましい人間関係が築かれて、クラブ活動や生徒会活動も活発化する、と讃い上げた。しかし後述する生徒会活動も含めて、その「夢」は見事に打ち砕かれた。今日、野球部をはじめとする各クラブは少ない部員に汲々としており、中学で野球部やサッカー部の部員であった者が高校でも同じクラブにとどまる率は極めて低い。また、入部してもすぐにやめてしまう者も跡を絶たない。

識者は厳しい受験体制、とくに共通一次テスト導入以来の現象であるとなげいてみせる。もとより、学校が現実の社会と切り離されて雲の上に存在するわけではないのであるから、それらの影響をうけるのは当たり前の話であり、今さらなげいてみせる問題ではない。しかし、すでに昭和54年度の生指部総括でも指摘しておいたことであるが、「共通一次・塾通いの過熱ぶりなど社会的背景は重要であるが、6年一貫との関連で本校特有の問題はないのかどうか。深刻に受けとめていかなければならない」ということだ。

先に生徒会活動について少しふれたときに「自分に自信をもてなくなっている子が多くなった」ことを述べたが、クラブ活動の場合ではなお一層そのことが明確になってくる。クラブ活動のような「余計なこと」に手を出すような精神的ゆとりを持った生徒が極めて少なくなったということである。だから、如何に受験勉強とクラブの両立を説いても生徒は決してその手には乗ってこない。これが両立できるのはよくできる生徒だけであり、僕ら（わたし等）にはおよそ関係のない話…ということになってしまうのである。

要するに「よくできる子」はほとんど居なくなったから、高校に入ってまでクラブで毎日遅くなっていたら受験競争から取り残されてしまう、とばかりに「楽しかった」中学の生活とはきれいサッパリとおさらばしてしまう。こうして、高校の体育系クラブは部員が激減する。本校はしくみの上では6年一貫しているのであるが、生徒の生活実態は全く6年一貫していないのである。ここに本校特有の問題がある。いいかえれば、生徒が安心してクラブ活動に打ち込めるような学校ではない、ということになろうか。この原稿を書いているときに新高1の生徒から聞いた話。中3で8人いた野球部員が高1になってたったの2人。高2が2人しかいないから夏の大会済んだら4人やなァ…。

本校がどんな「崇高な」教育目標を唱えようと、生徒の最大の関心事は受験である。勉強とクラブの両立を説くことに説得力をもたせられるようなしくみが学校にはないのだから、いくら「いい教育をしているのだ」といっても、肝腎の生徒がついて来ないのである。それでは最早、いい教育も何もない。あるのは教師や学校の一人よがりだけである。

② 生徒会その他

本校の生徒会についてもクラブで述べたことと考えあわせてもらえばよい。「余計なこと」に手出しをするだけの「余力」をもった生徒が少なくなり、また前述したように、リーダーの経験をもたない生徒が大部分であるから、先頭に立って何かをやろうということにはなりにくい。立合演説会がいい見本である。各学年から推薦された候補者がほとんどだから、中には露骨に「何でこんなところへオレを出すんだ」といった意味の捨てぜりふをはく者も出てくる始末である。「僕に入れないで下さい」という演説を何十回聞いたことだろう。勿論、そんな生徒ばかりではなく、「力一杯頑張ります」と政見をのべる子も中にはいる。しかし、以前のように教師と対立してでも自分たちで何かをやろうと頑張った連中の元気さ（内容の良し悪しはいろいろあるが）を求めたい。

本校の生徒の自治能力の低さをしめす最大の指標は、本校に「新聞部」がないということである。「ない」というよりは「なくなった」というべきであるが、教師の会話の中では、時折、復

活させたいといった話もでるのであるが、生徒の方は「ＰＴＡだより」を学校新聞と取り違えてでもいるのか何の声もあがってこない。廃刊になる直前の学校新聞「野火」は、一部過激派(?)の声を代弁したような機関紙になり下がっていたので、廃刊になったこと自体は止むを得ないのであるが、あれから10年以上も経って、生徒の声を結集した学校新聞がないなどということは信じられない。時折、あちこちの高校から「学校新聞」の交換を依頼する手紙とともにその高校の学校新聞も送られてくるのを見るが、そのたびに赤面するのを禁じ得ない。全く恥ずかしい限りである。新聞部は是非作らせたいものである。

③　運転免許取得問題

この問題に関していえば、二つの大きなポイントを指摘できる。一つは資格の件で、これについては満16才以上であれば取得することについては全く問題はない。法律上保障されていることであるから、本来とやかくいうスジのものではないのであるが、事故から高校生を守るといった安全教育の面から、従来は種々の規制を加えてきた。いわゆる三ナイ運動で、全国的にもしばしば社会問題化したことがある。

もう一つは奈良県高等学校生徒指導協議会と奈良県警（交通課）との関係である。従来は、安全教育の強化という観点から、できるだけ単車に乗せないようにしようということで、運転免許受験同意書を学校に提出させ、学校としてもこのことに関する実態の把握につとめられるしくみをとってきた。そして万一、事故や違反をおこした場合は警察と学校が連絡をとり合うことで単車の免許取得を抑制してきたのである。ところが、上記のこととも関連してプライバシーの問題として顕在化し、警察も学校との連係に難色をしめしはじめた。そのため運転免許を無断で取得し、事故や違反を起したところで学校にはわからなくなったため、これらの生徒が学校でとがめられないといった事があちこちでできてきた。その結果、同意書制度が有名無実になり、無断で運転免許をとらせる所（教習所）などもでてきて、この問題は本校を含めた高校に混乱をもたらした。運転免許取得の問題はそろそろ学校の指導の範疇から除外する時期に来たようである。

3.　中学生徒指導の諸問題

①　校則について

スリッパ制の採用は別として、大きな変更はない。「学校案内」によれば、昭和53年に入室許可証制が開始され、次いで昭和55年、外出許可、自転車通学、居残り、ガラス破損といった諸許可証届類が備えられているが、これらは６年一貫制移行に伴う措置ではない。具体的な資料に乏しいのではっきりとは言えないが、６年一貫制以前から指摘されていた諸事象に一応の対策、対応を試行したということであろう。例えば、昭和51年度総括会議用資料（総務、９月）に既に「生徒の外出禁止の徹底」とあるのは、先の事情を語っている。

服装規定は54年度に検討がなされ、翌55年度より一部改定された（ウィンド・ブレーカーの許可。セーター等の色は、二色追加）。靴、靴下については白と明記されるようになった。この間の事情も前記同様であるが、ことが個人の嗜好に関わるだけに、その規定の徹底を図るには、規定自体の根拠、目的を慎重に考える必要がある。服装の自由化を叫ぶことは本稿の目的ではないので過弁は控えるが、生徒の嗜好を抑えつけるに足る根拠は見つけにくいのではなかろうか。今仮に、質素の教えを掲げるとすれば、学校に於ける服装だけでは心もとないし、集団意識向上のためとすれば、余りにつまらない。規定として生きている以上その遵守を命ずるのは当然にしろ、今後その改定は待たれるところである。

校則全般について、６年一貫でどうのこうのということはない。少なくとも私の耳目には、そ

のような指摘は届いていない。

② 生徒会について

論を進めるにあたって、先ず資料を掲げる。

ア、前役員より受けついでいく活動内容がほとんどないために、新役員は仕事らしい仕事もしないうちに任期が終わってしまう。

イ、役員選挙はスケジュールを消化しているだけで、意欲的な候補者はほとんどいない。

ウ、中学役員の一部に熱心な生徒がいて、「中高連絡会」など機構の改革に着手、他の付属学校の例も調べた。

エ、執行委員会、各部会、代議員会などに対して、生指部の親切な指導と助言が必要で、これまでのように生徒まかせでは、全然すすまなくなってきている。

オ、下請けになっても、なにか課題を与えて、前向きにうごかしていくほうが良いように思われる。

カ、生指部と生徒会役員の会合をきめこまかく定期的にひらくことが必要である。

（昭和54年度生指部総括、生徒会の項より。途中一部省略がある。ア～カの符号は野澤）

エに書かれていることはよく指摘されるところである。生徒会ばかりではなく、諸活動に於ける意欲の低下、内容の貧弱化が言われる。しかし、そうした教師側の声は往々にして退嬰的であることが多く、旧制高校の生徒は出来がよかったと慨嘆するに等しい。寧ろ、以前の生徒集団が出来すぎなのであり、おそらくは現在の生徒集団でも出来すぎなのである。無論、エの指摘はオ、カの指導へと繋がるのであり、エだけ切り離してとやかく言うのは正しくないが、懐旧慨嘆からは何も生まれ得ない。実際のところ、学区内の大半が入学して来る公立中での生徒会活動の困難と本校のそれとでは比較にならない。ここ数年中学生徒会に関わっている経験から言えば、少し相談にのり、時に指示する程度でも、生徒たちは結構活動していると思う。

一体に、リーダー不足と言われる場合のリーダーの要件とはどのようなものなのか。組織の一員ではあっても単なる構成員にはならず、組織外と対峙すべきはそれを行い、また組織内の革新にも意をそそぐといった人物であろうか。かってはそうした人物なり集団が存在したのかも知れないが、では、何故存在したのか。何故、今少なく（いなく）なったのか。6年一貫制以後少なくなったとすれば、それは新制度のどこに起因しているのか。こうした問いに対する答えを一応探してみたが、どうにもはっきりしなかった。生徒全体の学力低下、高学力生徒の減少といった言い古されたことしか見当たらなかったし、それでさえ、資料を丁寧に揃えた上での考察ではなく、感想であった。私が赴任してから今までにいろいろ知ったことを綜合すると、「そういったリーダーたちは、言わば教師とは無関係に存在し、自主的活動に能力を発揮したので、その面に於ける教師の労力は軽微ですみ、また活動自体も充実していた」ということになる。そして今、そうしたリーダーが少ない（いない）のである。観方を変えれば、教師が彼らをリーダーに育て上げたのではないのだから、新制度後彼らが入学して来なくなって、リーダー不足の嘆きが聞こえるようになったのも当然である。

さて、こうした現状に対し、年々の生徒会担当者は引用文オやカを踏まえて指導に努めているか、充分な成果はまだ収められていない。54年以降毎年、生徒会活動の活性化が次年度の課題となっている。その原因は、生徒会担当者に時間的余裕のなかったこと、生徒会についての啓発活動が少なかったこと、学年との連携が弱かったことなどであろう。しかし、これらのうち、啓発活動、学年との連携は59年度後期あたりから強化された。また、61年度からは、生指部の定員が2名増えたこともあって、中学生徒会担当者が1人から3人となり、執行部や各委員会の話し合

いに同席しやすくなった。58、59年度あたりまでよくあった立合演説会での「私に投票しないで下さい」といった不真面目な弁や冗談のような推薦候補者選びも、今はない。今年度前期の選挙では、会長以下５人の定員に９人の立候補者が立った。59年度から新設された中学合同H・Rも、生徒会役員の意識を高めるのに役立っている。全般的に見て、まだまだ活発や充実には遠いにしろ、不活発、不真面目、無気力からは何とか脱しようとしている。あと一押しで車輪が轍から抜け出ようとする、その寸前の揺れに現状は似ている気がする。今誰かが力を抜けば二度と轍から出られないかも知れないし、あと一人誰かが加わればもう動き出せるかも知れない。そして、そのもう一人とは、教師集団の生徒会への好意と関心である。

生徒たちは、ちょっと自信をつけてやりさえすれば、こちらの予想以上に頑張ってくれる。特に中学生ではそうである。あとは、その生徒が孤立無援に陥らぬよう支えてやればよい。実際本校には、少し手助けしてやれば生徒会活動などにも意欲を持って取り組もうとする子たちが多い（他校でもそうかも知れないが）。しかし、生指部の教師だけでは手助けの機を逃す心配がある。生徒会の活動はＨＲを基盤としているのだから、学級担任には是非とも積極的に協力してもらわねばならない。昨年度及び今年度は中学のどの学年にも生指部の教師がたまたま入っているのでよいが、そうでない場合は生指部や生徒会からの広報が少ないため、生徒会が何に取り組んでいるか生指部外の教師には分かりにくく、ＨＲでの協力も得にくい。生指部は教師に対して開かれた生徒会にするよう努めねばならないし、学年はＨＲ運営等も含めてそれに応えねばならない。

また、民主的精神の育成を生徒会指導の目標に掲げるからには、例えば校則を見直したいといった活動に対しては教師の強権発動を抑え、充分に耳を傾けるべきである。いくら活発化させようとしても、材料がなければ活発になろうわけもない。ならば、彼らが選んだ材料は尊重してやるべきである。

高校入試から解放されているだけに、彼らは余裕を持って生徒会活動にも力を入れることができる。中３の生徒たちが丸々１年間生徒会の中心となって活動できるということは実に秀れている点であることを最後に書き添えておく。

団粟の　　背丈も伸びる　　日もありなむ

③　クラブについて

昭和55年度より中学必修クラブ制が施行されたが、入部は名ばかりで活動に参加しない幽霊部員の問題は改善しにくい。顧問がそこまで丁寧に指導していないこと、制度自体にも無理があることが原因である。逆に高校入試のないのをよいことに、勉学はさつさと放棄してクラブのみに走る者もいて、高校部進学後苦労することとなる。顧問、担任等の協力指導が望まれる。

また、部員同士の衝突（特に女子の上級生、下級生間）も具体的な改善策を講じにくい。

クラブの新設、廃部は合唱部、中高生物部がそれぞれ廃部となった。合唱部については現在も特例的に同好会として認められているが（中学に於ける同好会は禁止）、中学になくて高校にのみあるクラブ（合唱の他に、演劇、華道がそうである）のあり方について早急に検討せねばならない。

クラブ問題については、漸く着手したばかりである。部員の特定クラブへの集中、学芸系クラブの沈滞など、問題は山積している。広く助言、叱正を期待している。

おわりに

生徒指導部10年の総括－といわれて、まず頭に浮かんだのが筆者（寅貝）の10年である。ちょうど

10年間生指部に所属してきたので、自分の頭を丸めた方がラチが早いのではないかと思ったりもしたが、それはさておき、本稿は3を野澤、他は寅貝と分担執筆したので、いたるところで論旨に齟齬をきたしていると思うが、生徒指導について考えてもらう材料の一つとでもなれば幸いである。

6年一貫に際して校内で議論したとき、その後に予測されるさまざまな問題についてどのように対処するのか具体的にその対策を考えよ、といった声も上がっていたのであるが、大勢は楽観的なバラ色ムードに包まれ、識者らは附属の存在意義を声高に主張し、地域に貢献できる学校として実践すべきであると説いて、あれやこれやのアドバルーンを打ち上げたはずである。もちろんその中には、生徒会・クラブ活動に関するものもあって、本文で述べたとおりの主張が展開された。しかし、あれ以来10年以上の経過があるが、新任教官から「本校は一体、何をやっているんですか？」とたずねられて退官した松村副校長が「それを言われるとつらいので…」と答えざるを得なかった事実が全てを物語っている。

生徒会活動やクラブ活動は、本来、生徒達自身の手でやっていくべきものである。これが識者の好むタテマエなのである。教師がつきについて生徒の尻をたたかなければならないというのは、どう考えても話がおかしいのである。いわんや、本校のように自由・自治を校訓としている学校であればなおさらのことで、また、6年一貫教育の目ざす理想からいっても、中学生に対しては高校生の方で指導できるようになっているべきであって、教師が手とり足とりやるのであれば普通の学校と何ら変わるところはないのであり、一体、何のための6年一貫かということになる。教師の指導はあくまで補助的であり、ちょっとしたヒントを与える程度という原則を守らなければ 自治能力など育つわけがない。今日、本校の生徒会活動の現状は、全くといっていい位、教師にもたれかかっている。教師がお膳立をしないと何もできない実態であるから「生徒会をつぶしても（生徒は）何もいわんのとちがうか」という声がでるのである。「先生の方で決めて下さい」－有難いようで、ちょっと危惧される生徒の声である。

一般に、集団（目的をもった人々の集まり）であればリーダーは必ずできる。早い話がギャング集団と呼ばれる幼児の集りの中にもガキ大将が生まれるように、世間の仲間うちでも世話好きがリーダーの役割を担うように、リーダーは自然に生まれる可能性をもっているものなのである。そのリーダをより集団の目的に添うようにしむけるのはその集団の構成員であり、教師が生徒会のリーダーをつくるのではない。リーダーになろうとする意欲は、周囲の情況が見えてくればくるほど、自分に自信が持てないと中々でてこないものである。今日、そういう意欲をもった生徒が極めて少なくなったことはまぎれもない事実である。それでも生徒会という組織があるのだからリーダーをつくらなければならないが、いやいやひきずり出されたリーダーたちの生気のない表情の積み重ねが今日に至っているといってよい。3の②ア、イの指摘がまさにそれであろう。

すでに昭和54年の生指部の総括からも引用したように、「6年一貫教育上での本校特有の問題」についても「深刻に」受けとめる厳しい点検なくして、オプティミズムだけで何が解決できるのか。また、例によって「先送り」になるのが関の山である。

とは言うものの、芽は出つつある。最近では、あの当時の議論と直接かかわりのなかった先生方ゝ、とくに中学生に対して基礎的な土台づくりに鋭意努力されている。こうした土台が、高校生になったときに、本来の自由・自治の校訓の中で生かされるよう、教官の一人として関心を持って見ていきたい。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

本校の視聴覚施設・設備の現状と今後のあり方

屋　鋪　増　弘

本校の視聴覚教室は、テレビが2台あるだけで他はスクリーンしかないので、本当の視聴覚教室の役割は、大教室と呼ばれている教育実習生用の教室が果たしている。しかし、この教室は、視聴覚教室の機能は一応備えているものの、視聴覚教育専用の部屋として設計されていないので、次のような問題点がある。

1. 映画やスライドを備え付けのスクリーンに映した場合、天井が低くまた床にも傾斜がないので、画面が前の方の者の頭に隠されて見にくい。
2. テレビが4台しかないので、120名の生徒が入った場合、画面が小さすぎて見にくい。
3. 映写台は、台の面積が狭く、また高すぎて機器の操作がやりにくいので、現在あまり使用されていない。したがって、16㎜映写機やスライド映写機は常設されていない。
4. β2のビデオデッキが常設されていない。また、モニターの親テレビ1台に、VHSとβ1のビデオデッキが接続されているので、少し操作が面倒である。
5. 音楽再生用のアンプやスピーカーに拡声用マイクを接続しているので、音質が悪い。

次に大教室、視聴覚教室以外で、ビデオ設備を備えているのは、理科、技術、音楽、社会の特別教室である。しかしながら、社会科教育以外はビデオデッキが常設されていないので、ビデオデッキをいちいち運搬しなければならず大変不便である。また、普通教室にはビデオ設備がないが、これでは英語や国語など普通教室で行なわれる授業ではビデオが使えないので、問題である。

校内放送設備は、調整卓が放送室にあって一応整っている。しかし、放送室は器具室と化しており、特別の場合を除いて実際の放送は事務室、生徒指導室、教務室の三ヶ所で行なわれている。事務室、生徒指導室からの放送は全体放送のみ、教務室からの放送は、教官、生徒は誰でも行えて、部分放送と全体放送の切り替えができる。しかし、教務室からの放送も全体放送で行なわれることが多いので、本校の放課後は各部屋に関係のない迷惑な放送が数多く流れて来ることになる。

本校の視聴覚施設・設備は以上述べたような状態にあるが、今後のあり方を次に考察する。まず、視聴覚教室であるが、視聴覚教室は、少人数用の教室と多人数用の教室が必要である。多人数用の視聴覚教室の役割は、現在のところ大教室が果たしているが、この教室は前に述べたように問題点が多く、この中には教室の構造上改善出来ない点も多い。それで、新たに多人数（約120名）用の視聴覚教室を作るべきである。この新設の視聴覚教室は、視聴覚教育専用の教室とし、現在の大教室の欠点を踏まえ、次のような点を充分に配慮して作らねばならない。

1. 後方の生徒も、スクリーン上の画面がよく見えるように、天井を高くするか、階段教室にすること。
2. テレビ画面は小さ過ぎるので、大型のビデオプロジェクターを備えること。
3. ビデオデッキは各種揃えて、これらは勿論、16㎜映写機、スライデ映写機なども常設にすること。
4. 多くの者が使用するので、機器の切り替えスイッチや配線等は手を触れられないようにして、

誰でもボタン１つで簡単に操作出来るような機器のシステムにすること。

少人数用の視聴覚教室は、本校にはまだない。この教室は、生徒が個人または数人で利用出来る教室で、ビデオデッキとビデオモニターのセットが数セット、パソコン、スライド映写機、カセットデッキ等を設置する。このような教室があれば、生徒の個人学習や個別指導、また生徒の自主活動等に利用できる。現在の視聴覚教室は、このような少人数用の視聴覚教室に改造すべきである。

次に、校内放送の設備についてであるが、放送室は器具をあまり入れないで、防音設備を施して、本来の放送室として利用すべきである。ただ、この場合、生徒の校内放送は現在のように誰が行ってもよいというのではなく、放送部なりに責任を持たせてやらせるのが良い。そうすれば、現在のように不必要な放送に悩まされることも少なくなる。また、普通教室にも、是非、ビデオ設備を設置するべきである。これは、普通教育で行なわれる授業の為に必要であるのは勿論であるが、ビデオによる校内放送を可能にし、視聴覚教育にとって大変有益である。

その他、本校では、学園祭やＨＲ、教科の活動として、スライドの製作やカセットテープの録音・編集、ビデオの録画・編集、８㎜映画の製作などで数多く行なわれている。しかるに、そのような活動のための機器は不十分で、また作業をする専用の部屋もない。早急に、生徒が使用できる機器を充実させ、録音用の防音室やビデオの編集室、カメラの撮影室などを設置すべきである。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第26集
1985年6月

研究調査部の10年の総括

中道貞子・藤川宣雄・平塚　智

[1] 授業研究のあゆみ

本校では、長い間、対外的な研究発表会が行われずに来た。これには種々の理由があるが、一つには全国を吹き荒れた学園紛争が本校をも襲い、その影が何時までも長く尾を引いてきたことはいなめない事実である。教育の研究・実験学校としての附属学校の使命の達成、その為の研究態勢を整えることの必要性は、何度も叫ばれながら遅々として進まない研究への取り組みであった。昭和62年度にやっと対外的な公開研究会を持つ運びに至った。実にゆっくりとした歩みではあるが、これらの経過について見てゆきたい。

(1) 「研究紀要」の発行

本校に於いては、研究成果の発表は従来から「研究紀要」を年1回発行し、紙上による発表によってきた。（「研究紀要」の内容、その他については、発行年度・発表題目の一覧を掲げたので参照してもらいたい。本年度で第28集を発行する。）

この「研究紀要」への発表も義務づけられたものでなく、まったく自由に行われてきた。優れた個人研究や教科・分掌による発表も行われて来た。がしかし、全体として眺めるとき、「研究紀要」への発表が何の制約もなく全く自由であるということが、かえって、教科の壁や個人の壁をのりこえての共同研究態勢を妨げ、附属学校の重要な役割である研究・実験学校としての共通課題を掲げての研究活動を不活発にして来たとも言える。「研究紀要」が大きな役割を果たして来た事は認められるが、組織を動員しての研究・実験学校としての教育研究に成果が得られなかったと言う点では、充分であったとは言い難い。

(2) 校内研究会

昭和52年5月、総務部より、「附属学校のあり方」についての提案があった。その内容とするところは、附属学校としての機能の回復をはかるためには、現状の点検の上にたって、本校の抱ている問題点として、①教育実習の問題、②研究活動の問題、③入学者選抜の問題の3点について指摘があり、②、③の問題について提案がなされた。

研究活動については、次のような提案がなされたが、継続審議になる。

提案内容……ごく普通の生徒（〝素質・能力・家庭環境の多様な生徒〟）を対象にして6年一貫教育を行い、その能力をどのようにして、どこまで伸ばすかを基本にして研究主題を設定する。

(1) 授業公開、授業研究、――教科ごと、あるいは、教科をこえた研究をすすめる。

(2) 中卒者のほとんど全部が高校に進学している現状に即した創意的な独自のカリキュラムをみんなで考える。

(3) 研究結果の発表――研究紀要、校内での発表大会、全附連その他。

(4) ある程度の義務づけが必要。

これらの審議を通じて、昭和52年12月に第1回の校内研究会が実施された。これより以後毎年6月と12月に実施されてきている。

校内研究会の足取りについては、次に示すような発表題目、発表者で行われてきた。現在も本校の教育研究の中で定着してきている。内容的には、その時々の問題を討議する場として重要な役割を果たしている。

S 52. 12	H・R活動について（中3のH・R活動の実態の報告）	中3担任
	高校生物クラブ活動報告	加藤禎孝
	男女共学の考え方	技術家庭科
S 53. 6	附小教育の伝統から何を学べるか	松村正樹
	53年度入試結果の分析と問題点	玖村由紀夫
S 53. 12	普通科における電子計算機の導入について	木村維男
	本校生徒の実態と考察	研調部・健康部
S 54. 6	標準学力テストを4年間実施して	岡田セイ子
	3・3制と6年一貫における成績の変化の比較	進路部
	中学3年生の「卒業論文」について	中3担任
S 54. 12	アンケート集計結果について	
	全校アンケート（10月中旬実施）集計結果	研調部
	健康についてのアンケート結果	健康部
	クラブと学習に関するアンケート結果	中2担任
S 55. 6	社会科での学力を高めるための1つの試み	鈴木　良
	社会科における生徒の自主活動（フィールドワーク）について	社会科
S 55. 12	教育実習のための授業点検ポイント——社会科の場合——	松村正樹
	附小との学習会の報告	数学科
	道徳・HR実施の記録の紹介	中3担任
	全校アンケートの結果について	研調部
S 56. 6	保健委員会健康部アンケート	健康部
	標準学力テストについて	研調部
S 56. 12	進路状況の報告	進路部
	全校アンケートの報告	研調部
	実技検査（入検）を実施して	理　科
S 57. 6	進路指導について	進路部
	教育実習について	教務部
S 57. 12	生徒指導協議会に変更	
S 58. 5	報告：校内のマイコン利用について	平塚　智
	昨年度全校アンケートの結果について	研調部
	討議：標準学力テストについて——今後のあり方——	
S 58. 12	本校のあり方をめぐるシンポジウム	
	意見発表者　馬嶋玄敏「外からみた附中高」	松村正樹「総務の立場から」
	木村維男「6年一貫の目標と現実」	林　良樹「中堅層の立場から」
S 59. 5	附属学校における教育研究の歴史をふり返って（奈良女子大教授）	山田　昇
	教育工学を利用した実習指導について	松本博史
	社会科における教育実習の指導	鈴木　良

S 59. 11 授業のひと工夫　仲　光雄
プリント学習について　中道貞子
S 60. 1 標準学力テストの結果について　技術家庭科
標準学力テストのＳＰ表について　平塚　智
海外教育事情視察報告　藤川宣雄
S 60. 6 講演：附属学校における教育研究について（附属学校の歴史を通じて考える）
（奈良女子大教授）山田　昇
S 60. 12 パソコンを使った成績処理について　平塚　智
パソコン授業をして　平塚　智
中学入学検査について　理　科
野尻湖人想像図　真下哲子
S 61. 6 講演：発達段階と教育　（大阪教育大教授）秋葉英則
S 61. 12 社会科の総括と課題について　社会科
６か年一貫教育の総括　英語科
理科６か年一貫教育新カリキュラム　理　科

(3) 公開授業と公開研究会

校内研究会が続けられていくなかで、昭和54年に研究調査部からの提案として「研究授業（年２回）を行い、全員で参観し、校内研究会で一つの研究課題とし話し合う。」との提案を行うが、合意に至らず。

昭和56年９月に再度、総務部から「全校的研究態勢について」提案があったが、継続審議となる。

昭和60年研究調査部の提案により、希望者を募り、公開授業が行われる。

第１回、７月15日～16日
授業者　中尾　博一（高２Ｃ　基礎解析）　勝山　元照（中３Ａ　社会、歴史的分野）
矢野　幸洋（中２Ｂ　理科、第２分野）

第２回、12月23日～29日
授業者　上浦　一道（中１い組、技術）　原田　美知子（中１ろ組、家庭）
仲　光雄（高２、ＡＢＣ、国語、古文）松本博史（中２、ＡＢＣ、数学）

昭和61年前年度に引き続き、公開授業が行われる。

第１回、６月９日～14日
授業者　中道貞子（中１、理科、第２分野）　吉沢　栄敏（高２、美術、選択）
加藤　勇（中２、英語）　谷本　文男（高３、漢文）

第２回、１月23日～29日
授業者　平塚　智（中１、数学）　熊野　佐和子（中１、国語）
林　良樹（中３、理科、第１分野、高２、物理、選択）

校内での公開授業が軌道にのり、教科を越えた話し合いの機運が生まれる。

また、昭和59年度から、校内研究会に外部の講師を招へいし、教官の研修会が持たれるようになった。（昭和59年５月、山田　昇、奈良女子大教授、昭和60年６月、山田　昇、奈良女子大教授、昭和61年６月、秋葉　英則　大阪教育大教授）

昭和61年、公開研究会を持とうとの有志による提案があり、研究調査部が次の提案をし「教科や有志グループ等が、研究の成果を授業を通して、校外に公開する場合、学校として、これを主催する形をとり、研究調査部がこれに協力・バックアップする。」ことが決まる。外部へ向けて

の学校としての発表の機会が生まれる。教科を軸とした教科教育の研究に一歩を踏みだす。
昭和62年11月、数学科、社会科の２教科の公開研究会が持たれる運びとなった。

［２］ 標準学力テストについて

(1) 実施に至るまでの経緯

昭和48年度に中・高６年一貫教育にふみ出した中で、学力差の問題、遅進児の補習の問題が話し合われ、教科の到達目標をどの辺におくか、生徒の学習到達度の実態をはっきりつかまねば―ということから、学力テストをやってはどうかという話になった。

昭和48年12月から50年の５月にかけて総務委員会や教官会議での話し合いを重ね、昭和50年７月の教官会議で次のように標準学力テストの目標を決定した。

1. 各学年を通じ、１年間に学習した各教科の内容の到達度がどの程度身についているかをみる。
2. 個々の生徒についての目標への到達度、年間による伸びやゆるみをつかみ、また、指導の不十分であった内容などの把握をし、生徒の個人的学習指導に役立てる。
3. 各学年実施により、６年間の累加記録を作成し、各学年での生徒のつまずきを見て、発達段階に応じた具体的指導に役立てる。
4. 本年度学習した内容について、実施できる教科から実施し、やがて全教科そろうという形でやる。

そして実施時期、方法については進路課が中心となり同年11月の会議で次のように決定した。

実施の教科・時期 { ３月実施――数学、理科、音楽、技術家庭、英語（中３のみ）
４月実施――国語、社会、美術、体育 }

対象……中１、２、３（６年一貫対象学年）

処理……体育以外は100点満点。答案は返却しない。得点も原則として本人に知らせない。問題用紙を回収する。評価、考察、生徒指導は教科で行う。素点、平均点、分布表は学級担任に連絡し、担任は個人票に累加記録する。

(2) 実施してからの経緯

第１回（昭和50年度）

対象中１～中３　各50分標準

	中 1	中 2	中 3	備　　考
国語	○	○	○	
社会	○	○	○	問題印刷
数学	○	○	○	
理科	○	○	○(60)	問題印刷
英語			○	
音楽	○	○	○	テープによる実音テストを含む
美術	○	○		30分
技家	○	○	○	中２女子実技テストを含む
体育	○	○	○	実技能力テスト

51. 3. 8 } 数、理、英、
3. 9 } 音、技家
4. 13　国、社、美
4. 13～15体

第2回（昭和51年度）

対象が中1から高1までとなった。しかし、社会、英語、音楽、美術は第1回と同じ、数学では奈良県立情報処理教育センター（以下センター）におけるコンピューター処理による採点方式が取り入れられた。

第3回（昭和52年度）　53年3月6日、7日　4月13日

対象が中1から高2までとなった。高校は国語、数学（各90分）理科（高校では2科目）技術家庭（女子のみ）体育のみの実施である。

理科・音楽・技術家庭においてもセンターによるコンピューター処理による採点方式が取り入れられる。

第4回（昭和53年度）　59年3月5日～7日

実施時期が体育の実技能力テストを除いては59年3月5～7日の3日間に行われて全校的にも行事としての形も整い、問題印刷も計画的になり、社会、体育以外の教科でコンピューター処理による採点で労力も極度に少なく、個人票も印刷し、今後の継続に見通しがついた。

第5回（昭和54年度）　55年3月1日、4日、5日

当初にきめた目標から5年になるので再検討の必要があり、54年10月の会議で目標の4を削除した。

対象中1～高2　各50分標準

	中1	中2	中3	高1	高2	高3	コンピューター処理	備考
国語	○	○	○	○	○	※	○	
社会	○	○	○	○		2年分	○	今回より高1でも実施
数学	○	○	○	○(90)	○(90)	※	○	
理科	○	○	○(60)	○化 ○生	○物 ○生	2年分	○	
英語			○(150)			※	○	50分ずつ3回
音楽	○	○	○			※	○	テープによる実音テストを含む
美術	○	○	○			2年分	○	30分
技家	○	○	○	△(女)	△(女)	※	○	
体育	○	○	○	○	○			実技能力テスト（4月）

※…昭和53年度に2年分問題印刷済

第6回（昭和55年度）～第8回（昭和57年度）

第5回と同じ形式で実施した、56年度より校内のパソコン（シャープMZ80B）処理による採点方法のプログラム作りにかかる。

第9回（昭和58年度）　59年3月6日(火)～8日(木)

対象中1～高2　各50分標準

カリキュラム改訂

カリキュラム改訂

	中 1	中 2	中 3	高 1	高 2	印刷	パソコン処理	
国語	○	○	○	○	○	○	○	
社会	○(40)	○(40)	○(40)	○(40)			○	高一は昨年度印刷あり
数学	○	○	○	○(90)	○基△代(90)		○	高二代数幾何は選択者のみ
理科	○	○	○	○Ⅰ ○Ⅱ		中1、中2のみ	○	高二は化学か生物の選択
英語			○(100)					50分ずつ2回
音楽	○	○	○			○	○	テープによる実音テストを含む
美術	○(30)	○(30)	○(30)			○	○	実技採点を含む
技家	○	○	○	△女	△女		○	
体育	○	○	○	○	○			実技能力テスト（4月）

今回よりパソコン処理による採点方法実施、パソコン処理の手引き書を作り、59年1月には、パソコン採点処理の講習会を行った。

第10回（昭和59年度）～第11回（昭和60年度）

第9回と同じ形式で実施した。パソコン処理のプログラムを改良、手引き書の改訂版を作成した。第11回より問題はすべて校内印刷になる。

第12回（昭和61年度） 62年3月7日(土)、9日(月)

対象 中1～高2

	中 1	中 2	中 3	高 1	高 2	パソコン採点	
国語	○	○	○	○	○	○	
数学	○	○	○	○	○基△代(90)	○	高二代数幾何は選択
理科	○Ⅰ○Ⅱ(30)	○Ⅰ○Ⅱ	○Ⅰ○Ⅱ	○ ○		○	
美術	○(30)	○(30)	○(30)			○	
技家	○	○(40)	○(40)	△女子のみ(30)	△女子のみ(30)	○	
体育	○	○	○	○			実技能力テスト(4月)

英語、社会、音楽が今回より参加せず2日間の日程になる。

(3) 結果の処理について

標準学力テストの採点は、第2回より大型マークシート回答用紙を用いたコンピューター採点方式が取り入れられた。それは奈良県立情報処理教育センターの中型コンピューターで本校教諭岡田セイ子先生が作られたプログラムによって処理された。しかし、年度末の入試直前に研究調査部の教員3人ほどが2～3日間にわたってセンターで全教科のデータ処理することには、いくつかの難点があった。そこで数学科に配置されたパソコンを使用して校内処理の方向で研究調査部が中心となってプログラム開発され、第9回より校内でのパソコン処理方法を実施した。

	センターでのコンピューター処理	校内でのパソコン処理
利用時期	第2回(51年度)～第8回(57年度)	第9回(58年度)以降
使用機種	中型電子計算機組織 NEAC 2200 シリーズ	シャープMZ80Bシリーズ (MZ80BF、80P4、80MCR)
マークカード	大型マークカード(約18cm×25cm) 解答欄40、各欄1～20の解答可能	小型マークカード(約8cm×19cm) 解答欄42、各欄0～9の解答可能
処理方法	研調担当者3人がセンターで全教科のデータ処理、初日にエラーリストを作成し後日センターで訂正し処理、解答内容は磁気テープへ	各教科の先生が校内で手引書を見て希望日にデータ処理、エラーはすぐ画面表示されその場で訂正できる。解答内容はフロッピーディスケットへ
処理結果	個人別解答番号、正答番号の一覧表 問題別の解答分布と正答率一覧表 クラス単位で個人得点一覧表 5点間隔得点分布表と平均標準偏差 クラス別各教科得点一覧表 ＜以上出席NOで出力＞	同　左（配点も出力） 同　左（正答率はクラス別も出力 学年の正答率グラフも出力） 同　左（偏差値、クラス学年順位 男女別クラス別平均も出力） 同　左　偏差値も出力 ＜以上カタカナ氏名で出力＞

ア）長所として

- 短時間で処理できる。
- 犯しやすい誤答例、正答率が一目瞭然である。
- 教師の処理に要する手間が極度に省ける。

イ）問題点

第1回は普通の記述式で出発、第2回以降マークカード式にしたが数学では第2回は第1回より平均点が約10点低下した。その原因として

- 多くの選択肢からえらぶのに時間を要したこと
- 訂正の際、消し方が不十分な為に娯って読みとられている
- 解答のマークのしかたの誤り

など学力とは関係のない要素で誤答となったものもあり、問題点もあるが、ア）のような長所があるので、短所を改善してこの処理方法を続けてゆくつもりである。

(4) 現在の問題点

ア）教科の独自性と全校的役割との関係

実施要項にも見られるように、教科によっては一学年だけでしか行わなかったり、ここ数年においては、参加を取りやめたりすることもあり、累加記録票や、全校的資料としては歩調を合わせてほしいが、教科の独自性もあり、かみあわない問題がある。

イ）考察の不十分

累加記録の個人票の活用、累積的な考察をまだしていないし、各教科の毎年の考察や、年度による変化など継続しなければならないことが、なかなか困難である。またコンピューター処理になってから点数を出してそれで終わりという傾向がある。

ウ）生徒へのフィードバック

生徒へは成績に関係ないと伝えてあり、かつ個人へ原則として成績を示さないので容易な気持ちでテストを受け、不真面目な解答をする生徒もたまに見られる。

以上のような問題点を中心に研究調査部では昨年より改善策を検討中である。

(5) 参考資料

(i) 社会科　研究紀要　第18集（1976）……出題の目標、各問の正答率、誤答例、その考察、指導上の留意点など。

(ii) 数学科　研究紀要　第19集（1977）……同上

(iii) 理　科　研究紀要　第19集（1977）……同上

(iv) 英語科　研究紀要　第20集（1978）……同上

(v) 研調部　研究紀要　第21集（1980）……同上

(vi) 研調部　研究紀要　第25集（1984）……同上

［3］ 全国国立大学附属学校連盟、学校学校教育研究大会への参加

全附連、高校教育研究大会での発表は、例年、開催部会への発表がなされている。近年の発表を年度を追って記載しておく。

第16回（1974）	プラスティックによる彫塑・工芸実習	吉沢栄敏
第17回（1975）	高校理科Ⅰ・Ⅱから見た中・高一貫カリキュラムの問題点	理科
	人間関係を重視した家庭科教育	藤沢きみえ
第18回（1976）	本校発表なし	
第19回（1977）	標準学力テストを実施して	数学科
第20回（1978）	社会科における生徒の自主活動（フィールドワーク）について	吉田　裕
	普通科における電子計算機の導入について ――中・高6年間を通して――	岡田セイ子
第21回（1979）	「現代社会」の内容について	吉田　裕
第22回（1980）	卒業生の母校実習について―本校の実態とアンケート結果による―	研調部
	中学英語の到達度と高校における指導―英語診断テストの試行について―	英語科
第23回（1981）	理科における六カ年一貫カリキュラム実施記録とその問題点 ――高等学校の場合――	理科
第24回（1982）	中学入検における理科実技検査の報告――入学後の成績との関連――	理科
第25回（1983）	献立指導についての一考察（中1より高3まで）	辻本美奈子
第26回（1984）	情報処理教育について――卒業生に対するアンケート調査から――	松本博史

	社会科での教育実習指導について	鈴木　良	鈴木　良
第27回（1985）	「現代社会」の年間計画と授業及び評価について		吉田　裕
	進路進学について	附属のあり方分科会問題提起	研調部
第28回（1986）	本校音楽科の現状 ――中高一貫教育と中学校入試抽選制導入をふり返る――		山中竹一
	本校の生徒会活動		野澤省三・藤田周子
	教務的内容について	附属のあり方分科会問題提起	研調部
	教育実習について	附属のあり方分科会問題提起	教務部

なお、第16回大会（1974）と第28回大会（1986）の2つの大会は、本校が会場校になったので、第28回大会（1986）について述べる。

第28回高等学校教育研究大会
期日、昭和61年10月24日(土)～25日(日)
主催、全国国立大学附属学校連盟高等学校部会
　　日本教育大学協会高等学校部門
開催分科会…英語科、保健体育科、音楽科、生活指導、附属のあり方
　　の5分科会と理科準備会
発表件数　30、問題提起件数6、その他に、各分科会で情報交換の時間が持たれた。
参加者数…215名
予算の概要…収入　723,500円、　支出　632,550円
　　残高　90,950円（次回大会に繰り越す。）

［4］ 教科担当者会議について

昭和48年度入学生徒より、中高一貫教育が実施された。また、昭和52年度入試からは、抽選制が導入された。こうした入試方法の変更により、本校の生徒組成は変化してきている。学力面では、学力差が大きくなり、それに伴い教科指導のあり方についていろいろな討議がなされた。その結果、教科担当者が集まって、情報交換や個々の生徒の指導について話し合う場として、昭和53年度より、講師の先生もまじえた教科担当者会議が、学年毎に持たれるようになった。昭和53年度については9～11月のあいだに実施した。54年度は、10月を中心に実施。55年度からは6月・11月の2回実施となった。6月については、全学年、会議形式で会をもっているが、11月の形式は学年により、会議形式、教科担当者へのアンケート、担任・副担任のみの会合など、学年の事情に合わせて実施している。

教科担当者会議の主な話題は、次のようなものである。

生活指導について	生活態度・服装・友人関係・家庭環境について
学習について	低学力生徒の扱い・学習態度について
進路について	高3で進学しない生徒の進路の問題など

教科担当者会議を持つことにより、それぞれの生徒についての情報が得らたり、指導のヒントが得られたりして、それなりの成果もあるが、問題点をあげるだけに終始して、具体的な対応策にまで話が深まらないことが多く、今後、そのあり方については充分検討の余地を残している。

［5］ 今後の課題

附属学校としての研究態勢づくり…研究活動を活発化して行くことの一語に尽きるであろう。強制された研究ではなく、現場から湧き出る研究でありたいし、6年一貫教育での生徒の実態に即した授業の在り方を追及する研究でありたい。

また、長年行って来た「標準学力テスト」の今後の在り方についても、本校生徒の実態に対応した授業の研究の側面から、新たな評価の方法論と中・高一貫教育の在り方、特に、カリキュラムの編成の側面からも、新しい「標準学力テスト」の必要性が検討されねばならない。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

中高一貫同和教育

― 本校同和教育10年のあゆみ ―

熊野佐和子　出野上良子
林　良樹　屋鋪　増弘

［1］ はじめに

本校の同和教育は長い間、低調であった。現在においても活発であるとはいえないが、この10年の間にすこしずつ変化が現れている。

公務分掌として同和教育部がつくられたのが昭和46年度で、それまでは同和教育推進委員がひとり決められていただけであった。学校全体の同和教育目標もなく、教科、HRにおける同和教育も個々の教師がおこなっているにすぎず、それらの数は多くなく、またその発表もなかった。年に一回ほど研究会がもたれたりしたが、発言が少ないのが常であった。

このような同和教育の低調さの原因は何によるものであるか。はっきりとはしないが、生徒の中に地区出身者が少ないということも理由のひとつになるかもしれない。しかし、大きな理由は本校の体質である個人主義によるものと思われる。同和教育に限らず、個々の教師がそれぞれの範囲内で教育活動することが習慣となっており、全体的なことは最少限に押さえられているという傾向をもつ。もちろん、このことは欠点ではない。しかし、学校全体の取り組みを考えるとき、この傾向がものごとを押し進めにくくもするのである。

中高一貫教育が始まり、昭和50年度あたりから、同和教育部からはたえず、同和教育目標の確立や研修の必要性が言われるようになり、遅々としてではあるが、次第にその方向へ動き始めることになる。ここではその経過を整理することにした。

［2］同和教育体制

(1) 10年のあゆみ

本校での同和教育は教科、ＨＲなどで個々にはいくらか行われていたが、学校全体としては年に、数回の同和研究会がもたれる程度で、あまり活発であったとはいえない。なによりも学校全体としての同和教育の方針というものがなく、何からどのように取り組めばよいのかわからない状態であった。

ここに、昭和51年９月発行の部落研のパンフレットがある。これを読むと当時のおおまかな様子を知ることができる。そこには、本校生徒の全体像について、「歴史として習う過去の事柄は割に知っているが、現在の状況、それも正確な内部の実態ということには関心が薄いようである。」とのコメントがあり、６年一貫１期生である高１については特に、２、３年よりもその傾向が顕著であることを実証して、「全員附中出身だからであろうか」と記されている。また、「同和教育未経験者の多いことは附小（同和教育は行われていない）出身者にその一因があることは容易に想像がつく」とも書かれている。さらに、「今の高２は高１の時に１クラスだけが学

習した。」「今の高３は高１の時に年２時間、高２の時に年１時間、１クラスだけが学習した。」などの記述から、同じ学年ですらクラスによって学習の機会に差があったということもわかる。まとめの文章には、「小中高を通して同和教育を受けたことのない人が51％を占める」とあり、「同和教育を実施する側に見解の相違があって、実施が困難であるにしろ、我が校の現状は異常であると言わざるを得ない。」と記されている。

ＨＲでの同和教育は少なかったが、教科を通じての指導はそれぞれに工夫されていた。部落研の考察には「日本史において部落の発生を学んだり、政経で福祉について考えたり、フィールドワークで部落を訪れたり」といった社会科の授業を大いに意義あるものとしている。また英語の教材に、キング牧師の演説が取り入れられたりもしていることが書かれている。

しかし、部落研も次の年に、消滅してしまう。以後、学校の同和教育体制はどのように取り組まれていったか。

昭和52年度の年度末総括において同和教育部は次年度への課題として「本校の同和教育方針の確立」をあげている。また昭和53年度の総括には、「生徒の実態に基づき、本校の同和教育方針を定めること」が次年度への課題としてあげられている。これを受けて、昭和54年度には、同和教育部より、本校の同和教育方針の提案、ＨＲ運営に関する委員会設立についての提案が出されたが、両方とも否決されている。この年度の総括では次年度への課題として、「同和教育の実践を積み上げ、交流を行うことによって、同和教育をみんなのものにする」ことがあげられている。さらに提案として、「人権週間などの機会をとらえ、積極的に同和教育を推進する。そのために、つぎのことを提案したい。①実践交流の機会を保障してほしい。②講演会や同和地区での現地研修を実現させてほしい。」があげられた。

次の年、昭和55年度になって、中学における同和教育目標がおおまかに決定された。これは、中学のＨＲにおいて同和教育を年間２～４時間程度行うというものであり、各学年のテーマを次のように決めている。

中１……なかまづくり（協力と友情）
中２……身のまわりの差別・矛盾について
中３……人権と差別について

目標のなかみは具体的なものではなかったが、この決定の意義は大きかった。すなわち、次の年昭和56年度より中学で同和教育のＨＲが始められたのである。

さらに、昭和57年度、昭和58年度の総括では、「高校のＨＲ活動も同和教育研究会で発表してもらえるよう努力すること」を課題としてあげている。

昭和59年度、高校ＨＲで同和教育を数時間とりあげることが決まり、昭和60年度には、ＨＲでの同和教育のテーマとしてあらためて次のように決定された。

中１、中２……なかまづくり
中３、高１……身のまわりの差別
高２、高３……人権と差別

実際の活動においては、必ずしも上のテーマどおりに行われているわけでもないし、また必ず同和教育をしなければならないとしているわけでもない。学年ごとにやりやすい内容を、やりやすい方法で行うということにしている。

これで、一応の同和教育目標がつくられ、それにそって動きはじめたのであるが、これが軌道に乗るためにはなお数年の時間を要するであろう。

(2) 高同教との関わり

奈良県高校同和教育研究会にはその創設以来本校も参加していて、同和教育推進委員を派遣している。また、これと関連する研究大会にも参加していたが、出張の回数が多くなることもあって、昭和52年度より同和教育部の人数が2人から4人に増えた。ただ、同和教育部の教師が同和教育関係の出張要員となってしまっているという指摘が何度も出ており、昭和55年度、56年度には「職員の研究大会への参加」を総括の中の課題として出されている。しかし、この傾向はいまだに変わっていない。

高同教の夏期研究大会における本校からの発表は次のとおりである。

◎昭和55年度……松本博史「全員に微積分を」

◎昭和57年度……加藤禎孝「生物一斉調査について」

◎昭和60年度……松本博史「教具を利用した三角関数の導入」

[3] 同和教育の実践

(1) 職員研修

校内での職員研修として、同和研究会がもたれている。表1に、その内容を年度ごとにまとめてある。同和研究会は以前は年に1，2回しか開かれなかったが、昭和56年度より、年に3回もたれるようになった。これは、前年度につくられた「中学における同和教育の目標」にそって、ＨＲで同和教育がおこなわれ、同和研究会においてその報告と討論が行われるようになったからである。また、昭和60年度の始めに「中高における同和教育の目標」がつくられ、高校ＨＲでの同和教育の実践報告が、昭和60年度以後この同和研究会で発表されるようになった。現在では、校内同和研究会は、職員研修のための講演、中学同和教育の実践報告、高校同和教育の実践報告と年3回行われるのが普通になった。

研究会での講演のテーマは、部落問題、在日朝鮮人問題、障害者問題などであるが、今後は人権に関する他の分野をあつかうことも考えられる。また、教科における同和教育の実践報告やいわゆる「登校拒否」の生徒に関する報告と議論が行われた年もあった。

同和研究会が10年前と変わってきたのは、もたれる回数が増えたということだけではない。会合における議論が比較的活発になってきたことがあげられる。以前は、同和研究会となると途端に発言が減って白けた雰囲気が漂ったものである。

昭和60年度より「同和教育講座」と「ＶＴＲ・映画上映会」が開かれるようになった。この内容が、それぞれ表2と表3にまとめられている。同和研究会というのは教員全部の集まる会合である。それに対しこれらの会合は、放課後、都合のつく者だけが参加し学習するために企画されたものである。

「同和教育講座」という名はいささか大袈裟であるが、これはテーマごとに一冊のテキストを選び、校内の教員を講師として、何回かに分けて学習するものである。これによって同和教育についての基礎知識を学びまた深めることができるようになった。これまでのところ、部落の歴史と日本・朝鮮の近代史を扱ったが、今後も、女性の歴史、人権の思想、障害者問題などのテーマで企画が進められている。

「ＶＴＲ・映画上映会」は同和教育資料として集めたＶＴＲや16㎜映画を見るものである。しかし、ＶＴＲはいつでも見ることができるという気持ちがはたらくのだろうか、参加者はあまり多くない。しかし、同和教育部としては、ＶＴＲだけではなく、同和教育関係の資料の収集と紹介にいっそう務めなければならない。

表1　校内同和研究会

年　度	内　　容
52	①　スライド映写による研修
53	①　生徒の意識調査の結果報告
54	①　第2回意識調査の結果報告
55	①　＜11／6＞　報告「K生の担任として」(山中昭生先生) ②　＜12／10＞　講演「部落問題の現状と課題」(奈良教育大学・中川喜代子先生)
56	①　＜6／24＞　報告 ・「VTR製作」(旧中3) ・「学級作り」(旧高1) ②　＜11／11＞　報告「社会科における部落問題」(鈴木良先生) ③　＜3／1＞　中学HR実践報告 ・「一年間のあゆみ」(中1) ・「障害者への理解」(中2)
57	①　＜6／21＞　映画鑑賞「解放をめざして」 発表「個人差を生かす授業」(松本博史先生) ②　＜10／13＞　講演「同和教育の現状と部落問題学習」 (京都府立高等学校同和教育研究会会長・畦地享平先生) ③　＜2／10＞　中学HR実践報告 ・「いま仲間作りをさまたげているもの」(中1) ・「障害者への理解」(中2) ・「障害児校との交流」(中3)
58	①　＜6／23＞　討論「仲間作りと長欠生徒の問題について」 ②　＜12／1＞　講演「障害児教育について」 (奈良教育大学附属養護学級・藤森善正先生) ③　＜2／17＞　中学HR実践報告 ・「仲間はずれ問題とアンケート調査結果」(中1) ・「『差別』を考えよう！シリーズ」(中2) ・「障害者への理解」(中3)
59	①　＜6／24＞　討論「在日朝鮮人問題」 ・「講演の感想文を読んで」(中塚明先生) ・「中学サッカー部の発言問題」(平塚智先生) ・「在日朝鮮人問題を指導して」(中2) ・「本校の在日朝鮮人生徒について」(高1，高2) ②　＜12／5＞　講演「本校の実態をふまえた同和教育について」 (神戸大学・杉山明男先生) ③　＜2／18＞　中学HR実践報告 ・「友だち関係の調査」(中1) ・「身のまわりの差別」(中2) ・「『部落差別』のとりくみ」(中3)

60	① ＜6／13＞ 高校HR実践報告 ・「障害児校との交流、部落問題」（高３） ② ＜2／13＞ 中学ＨＲ実践報告 ・「『いじめ』の問題」（中１） ・「障害者への理解」（中２） ・「交流教育」（中３）
61	① ＜6／11＞ 講演「外国人と人権」（京都精華大学・金明觀先生） ② ＜12／4＞ 高校ＨＲ実践報告 ・「在日朝鮮人問題」（旧高３） ③ ＜2／12＞ 中学ＨＲ実践報告 ・「班活動」（中１） ・「障害者への理解」（中２） ・「交流教育」（中３）

表2 同 和 教 育 講 座

年度	内　　容
60	「部落の歴史」全５講（講師　勝山元照先生） テキスト『新版　やさしい部落の歴史』（部落問題研究所編） ① ＜11／1＞ 序、古代から中世へ ② ＜11／13＞ 近世封建制の確立 ③ ＜11／20＞ 近代日本と部落問題Ⅰ ④ ＜12／2＞ 近代日本と部落問題Ⅱ ⑤ ＜12／26＞ 戦後日本と部落の変化 補 ＜1／26＞ 島崎藤村『破戒』読書会（講師　野沢省三先生）
61	「近代日本と朝鮮」全３講（講師　中塚明先生） テキスト『新版　近代日本と朝鮮』（中塚明著、三省堂） ① ＜5／15＞ 日本の近代的発展と朝鮮 ② ＜6／4＞ 日本による植民地支配と民族運動 ③ ＜6／27＞ 第二次世界大戦後の日本と朝鮮

表3 ＶＴＲ・映画上映会

年度	題　　目
60	① ＜7／1＞ ＶＴＲ「指紋押捺拒否」（在日朝鮮人問題） ② ＜7／3＞ 16㎜映画「イルム」（在日朝鮮人問題） ③ ＜7／5＞ ＶＴＲ「日帝36年」（在日朝鮮人問題） ④ ＜7／6＞ ＶＴＲ「ある手紙の問いかけ」（在日朝鮮人問題） ⑤ ＜7／8＞ ＶＴＲ「スケボーに乗った少年」（障害者問題）

	⑥ ＜7／9＞ ＶＴＲ「世界わたぼうし音楽祭」（障害者問題）
	⑦ ＜7／10＞ ＶＴＲ「授業『生ましめんかな』」（核問題）
	⑧ ＜7／13＞ ＶＴＲ「窓をあけて走れ洋一」（部落問題）
	⑨ ＜7／15＞ ＶＴＲ「部落の歴史(1)」（部落問題）
	⑩ ＜7／16＞ ＶＴＲ「部落の歴史(2)」（部落問題）
61	① ＜11／13＞ ＶＴＲ「人間の街」（部落問題）
	② ＜11／21＞ ＶＴＲ「こずえさん20歳の青春」（障害者問題）
	③ ＜11／26＞ ＶＴＲ「ハルモニとの約束」（在日朝鮮人問題）

(2) ＨＲ、教科などにおける同和教育

前にも述べたとおり、以前はＨＲで同和教育が行われたことがまれにあったが、その場合もクラス単位であり、学年単位ではあまりみられなかった。しかし、昭和56年度以降、学年単位で同和教育が行われるようになった。表４には、ＨＲにおける同和教育がまとめられている。この表を見れば分かるように、各学年の同和教育の内容は必ずしも「中高同和教育の目標」の内容と一致しないし、また同和教育を毎年必ずやっているわけでもない。このように、目標をある程度決めておいて、弾力的に行うというのが、現実的でよいと思われる。しかし、実際の同和教育はまたまだ不十分なところがある。同和研究会などでよく研修、討論して、さらに充実したものをめざさなければならない。

昭和57年度より、高校生全員を対象にした同和教育講演会をもつようになった。これは講演を通じて、生徒が人権や差別についていくらかでも考えるということを目的としたものである。講演のテーマは毎年変えており、その題目と講師を表５にまとめてある。講演の後で全員に感想文を書かせている。

教科における同和教育については、アンケートをまとめたものを表６にのせてある。同和教育では、教科の中でも社会科が重要である。かって社会科では、社会科教育のなかでの人権学習をどのようにすすめるかを検討し1975年の研究紀要に発表したが、これは内容中心であった。中１から高３までの６年間の生徒の発達過程を考慮した教材再編成を検討中である。

本校の「現代社会」と「日本史」における同和教育の取り扱いは次のとおりである。

<u>現代社会</u>

「憲法学習における人権」として、約１時間扱っている。内容は次のようなものである。

Ⅰ．憲法が国民に保障する平等権…法の下の平等、男女の平等、教育の機会均等、選挙権の平等。

Ⅱ．法の下にある不平等…①合理的根拠のある法（少年法、労働基準法、公職選挙法）②問題のある法（尊属殺人刑の重罪規定、労働基本権を制限する国家公務員法）

Ⅲ．法の外にある差別…①部落差別（差別の現実、差別意識、差別からの解放）②民族差別（在日朝鮮人への差別、歴史、指紋押捺制度）②女性差別（封建的道徳と観念）

<u>日 本 史</u>

部落問題については日本史の全体像のなかに位置づけて授業を行っている。したがって、独立単元としては扱っていない。次に比較的、比重の高いところの例をあげる。

◎士・農・町（賤）……封建的身分制度の成立

◎明治の大和農村 ……地主・小作制と部落問題

◎片桐村小作争議 ……大正デモクラシーにおける水平社と日農

表4　ＨＲにおける同和教育

年度	学年	内　　容
54	中３	部落問題
55	中３	生徒によるＶＴＲ製作「カンニング」
56	中２	障害者問題
57	中２	障害者問題
	中３	障害者問題
58	中１	同和問題アンケート調査
	中２	身のまわりの差別
	中３	障害者問題
59	中２	身のまわりの差別
	中３	部落問題
	高２	部落問題
60	中２	障害者問題
	中３	障害者問題
	高２	部落問題
	高３	在日朝鮮人問題
61	中２	障害者問題
	中３	障害者問題
	高１	身のまわりの差別（男性と女性）
	高２	身のまわりの差別

表5　同和教育講演会（高校生対象）

年度	題　目　と　講　師
57	＜12／8＞　「人間として生きる」（京都精華大学・日高六郎先生）
58	＜10／6＞　「日本になぜ朝鮮人・韓国人がたくさん住んでいるか」（奈良女子大学・中塚明先生）
59	＜10／1＞　「人間の尊さ」（オリエンタルシューズKK・松本明先生）
60	＜11／8＞　「私達のいきがいについて」（大阪市立盲学校・藤野高明先生）
61	＜10／9＞　「いのちを見つめて」（作家・高史明先生）

表6　教科における同和教育

教　科	内　　容
国　語	・文学教材全般にふくまれている。 ・班活動
社　会	・日 本 史…部落の歴史、女性史 ・世 界 史…インドのカースト制、アメリカの黒人奴隷制、アメリカインディアン、南ア人種差別、欧米・日本による他国の植民地化。 ・地　理…発展途上国の問題 ・政　経…基本的人権の保障、自由平等の思想。 ・現代社会…多くの教材の中にふくまれている。
理　科	・環境科学（公害、核問題）
英　語	・松葉杖の少女の話、盲導犬の話、黒人問題。 ・原爆、赤潮の話、アフリカの飢餓の話。 ・バングラデシュのサイクロンによる被害の話。
音　楽	・黒人霊歌、ゴスペルソング、日本民謡、わらべ歌。
美　術	・人権ポスター
技術家庭	・結婚、遺伝。 ・男女の生き方、家族関係、老人問題。
保健体育	・老人問題、疾病と環境。 ・スポーツの場での差別的発言の指導。

(3)　障害児校との交流

昭和56年（1981年）は国際障害者年であったが、この年の中学２年がＨＲで障害者問題を扱い、さらに４つの障害児校との交流を始めた。次の年度になって、この交流は継続され、さらに高校になっても、相手校は２つになり、また全員ではなく有志となったが交流は引き続き行われた。そして、昭和57年、ひとつ下の学年も障害児校との交流を始め、次の年も続けていった。これらの交流教育の詳しい記録は、本校紀要第25集（1984年）と第27集（1986年）に載せられている。

さらに、昭和60年、この年の中学３年が２つの障害児校との交流を始め、そのひとつ下の学年とともに交流を継続して行うようになった。また、さらにそのひとつ下の学年が、昭和62年度に交流を計画している。表７はこの６年間の交流校と交流内容を簡単にまとめたものである。

このような交流教育の意義はいろいろ考えられるが、大切なことは実際的なふれあいの中から両方の学校の生徒がともにさまざまの感動と刺激を受けることができるという点である。このことは双方の生徒の感想文を読んでもよくわかる。今後も交流が続くようできるだけの努力をしていかなければならない。

表7 障害児校との交流

年度	学年	交流校	内容
56	中2	県立盲学校	<12／10> 学校訪問（クラブ活動見学、講話、座談会）
		県立ろう学校	<12／10> 学校訪問（映画、話し合い）
		西の京養護学校	<12／10> 学校訪問（授業見学、校舎見学、講話）
		奈良教育大学附属中学養護学級	<12／10> 学校訪問（自己紹介、ゲーム）
57	中2	奈良養護学校	<11／17> 学校訪問（ゲーム、歌、自己紹介、講話）
		七条養護学校	<11／17> 学校訪問（クラブ活動見学、スポーツ、講話）
		県立盲学校	<11／17> 学校訪問（校舎見学、話し合い）
		奈良教育大学附属中学養護学級	<11／17> 学校訪問（わらび餅づくり、ゲーム）
	中3	県立盲学校	<7／12> 作品交流
			<9／22> 学園祭招待
		奈良ろう学校	<9／22> 学園祭招待
			<10／23> スポーツ大会（バレーボール、ダンス）
			<11／21> 文化祭見学
		西の京養護学校	<7／12> 作品交流
			<11／11> 音楽会招待（「あそびの歌」を歌ってもらう）
			<11／18> 文化交流会参加
			<11／21> 文化祭参加
58	中3	奈良養護学校	<11／12> 学校訪問（ゴロゴロ野球、話し合い、紙芝居）
		七条養護学校	<11／12> 文化祭参加（見学、合唱）
		奈良教育大学附属中学養護学級	<11／12> 交流ハイキング
	高1	西の京養護学校	<7／8> 学校訪問（自己紹介、終の会参加）
			<8／24> 夏休み交流会（旗作り、歌・ダンス）
			<9／23> 学園祭招待
			<11／27> 文化祭見学
			<12／21> クリスマス会
			<2／16> 授業参加（音楽、体育）
		県立ろう学校	<5／3> ハイキング
			<7／18> 料理教室
			<9／22> 学園祭招待
			<11／20> 文化祭見学
			<12／7> クリスマス会
			<3／19> スポーツ大会（ハンドボール、バドミントン）

59	高2	西の京養護学校	＜6／21＞ 学校訪問（ゲーム、ダンス）
			＜7／31＞ 校外学習
			＜8／12＞ ハイキング（飛火野）
			＜8／24＞ 文化会館作品展見学
			＜9／23＞ 学園祭招待
			＜9／30＞ 運動会見学
			＜10／13＞ 授業参加（美術、家庭、社会訓練）
			＜11／18＞ 文化祭見学
			＜12／13＞ クリスマス会
			＜2／17＞ 作品展見学
			＜3／13＞ 料理教室
		県立ろう学校	＜6／16＞ スポーツ大会（バレーボール他）
			＜9／22＞ 学園祭招待
			＜12／15＞ クリスマス会
			＜3／21＞ ボーリング大会
			＜3／22＞ バレーボール大会
60	中3	県立ろう学校	＜6／28＞ 学校訪問（自己紹介、話し合い）
			＜9／21＞ 学園祭招待
			＜11／10＞ 文化祭見学
			＜12／21＞ クリスマス会
		奈良教育大学附属中学養護学級	＜12／12＞ 養護学級生徒の劇「ごんぎつね」鑑賞
			＜1／30＞ 学校訪問（話し合い、ゲーム）
61	中3	県立ろう学校	＜9／20＞ 学園祭招待
			＜10／4＞ スポーツ大会（ソフトボール、バレーボール）
	高1		＜11／9＞ 文化祭見学
			＜12／20＞ クリスマス会
			＜1／24＞ もちつき大会
			＜2／14＞ 卒業祝賀会

［4］おわりに

10年ほど前より、学校全体の同和教育について検討し、目標を定めることが、同和教育部より言われ続けてきて、やっとその目標ができたところである。だが、この目標というのは漠然としたものであって、明確で、具体的なものとはいえない。また、ＨＲにおける同和教育の実践についても学年まかせである。しかし、本校においては、とうぶんの間はこれで十分だと思われる。むしろ形はどうあれ、ＨＲなどで同和教育を続けるということが重要である。

同和教育といっても、人権と差別に関する問題を広く扱うことが課題であり、そのためにもさらに研修を深めていく必要がある。

障害児校との交流も６年ほど続いたが、実際的なことは各学年で運営されている。交流については学校全体で企画したほうがよいという声もある。これらのことはさらに検討していかなければならない。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第26集
1985年6月

本校における要医療災害の実態

健康部　米田　博行　　吉岡　一郎　　中村ハツ子

Ⅰ　はじめに

前回（22）号、昭和45年度～昭和55年度（11年間）にかけて医療災害の実態を記載したが、今回は昭和56年度～61年度（６年間）をまとめてみた。

48年度より中・高６年一貫教育が導入され、現在14年目になる。一貫教育導入時に、生徒達にとって、高校入試がないために精神的な余裕もでき、体力作りにも励め、クラブ活動もいっそう充実するのではとの期待もあった。しかし全体的に緊張感がなくなり、学習面においても集中力のない生徒が多くなり、授業時、クラブ活動等においても注意散漫と思われる傷害も多くみられるようになった。

Ⅱ　観　　点

(1)　表Ⅰについて（年度、月別発生件数）

昭和56年度～昭和61年度迄の６年間の件数の内、昭和61年度が最も多く、特に中学生の傷害が目立って多かった。

月別にみると、年度始めの４月～５月にかけて多く、次に２学期に入って９月、11月に多い。学期始めに、クラブ練習の不慣れのためか、傷害件数が多い傾向がみられる。

(2)　表Ⅱについて（曜日別発生件数）

曜日別にみると、今回はあまり差がない。月曜日は、体の不調を訴える生徒（月曜病）は多いが、傷害は少ない。週末にかけて金、土曜日に少し多い傾向がみられる。

(3)　表Ⅲについて（活動別発生状況）

クラブ活動中の傷害が１位で88件、全体の（48.4％）次に授業中65件（35.7％）の傷害が目立つ。

(4)　表Ⅳについて（クラブ活動種目別）

クラブ活動の内、種目別にみると、サッカークラブの傷害が多いが、クラブ人数、練習量、試合回数にもよるので、いちがいには云えない。

(5)　表Ⅴについて（体育授業時の種目別）

ラグビーによるケガが一番多く、次にサッカーによる傷害が多い。

(6)　表Ⅵについて（傷害別一覧）

傷害名別にみると、骨折が全体の33.5％を示し、次に挫傷27.5％を示している。

(7)　表Ⅶについて（傷害部位）

足部のケガが最も多く（41.2％）次に手、指部が（30.8％）が多い。

Ⅲ　おわりに

昭和61年度５月に体育大会の練習中に１件、中学男子（前頭骨陥凹骨折・脳挫傷）大きな事故が発

生した。

直ちに応急処置を行ない。救急車で脳外科に運び、即、手術を行なったため、幸いに大事にいたらなかった。（現在経過観察中）この件について、学校側も今後の安全指導体制に関して討議を重ねた。生徒個々人に対しては、その都度、安全について指導はしているが、ケガをしてからの指導ではどうにもならない。学校として集団的に安全指導を行なう必要性を強く感じた。

表Ⅰ

月　別　発　生　状　況

年度／月	56		57		58		59		60		61		月別小計
	中	高	中	高	中	高	中	高	中	高	中	高	
4	2		4				2	2	2	3	3	4	22
5	1	2			5		5		1	2	4	2	22
6	2		2	2	3	1	1				5	1	17
7		3	2	1	1				3			1	11
8			1				1	2	1		2	3	10
9	3	4	1	1	1			2	1	4	2	1	20
10		1	2	1	2	2	1		1	1	3	1	15
11	4	5	1	1	1	1	2	3	1		2	1	22
12	1	1		1	1		1				2	1	8
1	1	1		3		5	1	2	1		1	1	16
2	1		2	2	1	4	1		1	3			15
3	1		1	1					1				4
中高小計	16	17	16	13	15	13	15	11	13	13	24	16	
件数合計	33		29		28		26		26		40		

表Ⅱ

曜　日　別　発　生　状　況

年度／曜日	56	57	58	59	60	61	曜日小計
月	5	2	3	4	2	5	21
火	6	7	3	2	4	3	25
水	5	5	6	5	2	7	30
木	2	3	5	4	5	5	24
金	4	5	7	4	5	8	33
土	10	6	2	5	6	5	34
日	1	1	2	2	2	7	15
件数合計	33	29	28	26	26	40	

表Ⅲ

活動別発生状況

活動別＼年度		56	57	58	59	60	61	
授業時		10	15	12	5	3	10	65
クラブ活動		17	12	10	15	14	20	88
体育大会			1			1	2	4
球技大会		2		1			2	5
放課後		2	1	1	3		3	10
休憩時間		1		4	1	5	2	13
その他		1			2	3	1	7
件数合計		33	29	28	26	26	40	182
合計内訳	中学	17	17	15	16	13	24	
	高校	16	12	13	10	13	16	

表Ⅳ

クラブ活動別発生状況

クラブ別＼年度	56	57	58	59	60	61	
サッカー	5	4	2	9	4	11	35
バスケットボール	2	1	5	3	4	4	19
テニス	3		2	1		2	8
ワンダーフォーゲル	3						3
野球	3	5	1	1	3	3	16
バレーボール	1	2		1	3		7
件数合計	17	12	10	15	14	20	88

表V

体育授業時の種目別発生状況

種目別＼年度	56	57	58	59	60	61	計
バレーボール	3	3					6
柔道	3	1					4
ハンドボール		3				1	4
走り高跳び		1	2			1	4
バスケットボール		2	1	1			4
ラグビー	2	2	7	1			12
サッカー	2	2	1	1	2	2	10
バトミントン				1		2	3
マット運動				1		2	3
その他			1			1	2
件数合計	10	14	12	5	2	9	

表VI

傷害別一覧

傷害名＼年度	56	57	58	59	60	61	
骨折	13	15	11	9	5	8	61
挫傷	7	5	11	8	9	10	50
捻挫	2	2	3	3	6	11	27
切創	1	2	1	1	2	1	8
脱臼	1	2		2		2	7
打撲	6	1	2	3	3	5	20
突き指		1				2	3
その他	3	1			1	1	6
件数合計	33	29	28	26	26	40	182

表Ⅶ

傷害部位一覧

部位＼年度	56	57	58	59	60	61	
足	11	5	14	13	11	21	75
手・指	8	19	8	8	7	6	56
肩	4	3		1	2	2	12
胸・腹	3	1			1	2	7
頭	1		3		3	3	10
首					1	1	2
眼・顔	3		2	3	1	4	13
歯		1	1			1	3
その他	3			1			4
件数合計	33	29	28	26	26	40	182

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

図書館の予算の変遷と昭和61年度図書館利用情況について

図書科　堀内　幸子　　荒木　孝子

図書部7年間の予算の変遷

昭和55年度	1,500,000円
56	1,560,000円
57	1,444,000円
58	1,200,000円
59	1,300,000円
60	1,500,000円
61	1,500,000円

本年度（昭和61年度）図書館貸出利用状況

一学期（表1）　　頁

二学期（表2）　　頁

三学期（表3・4）　　頁

生徒達の活字離れの進む中で、図書館から本を借り出して読む生徒は、高学年になるほど少なくなっています。本校では専門の司書が定員化されていないので、週三回、昼休みと放課後が貸出日となっている。そのことが一層借り出しを困難にしているとも言える。毎日、いつでも借り出せる状況があればもう少し本を借り出す生徒も増加するでしょう。

また開架式になっていて、しかも係の者が毎日カウンターにいるわけではないので、黙って本を持ち出す生徒も多く、頭痛の種である。本校では自習室がないため、図書室が自習室になっており、その使用状況は年々悪くなっている。

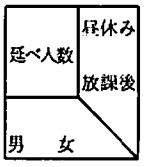
以上のような点を改善するために、1. 専門の司書を置く。　2. 自習室を別に設置する。3. 読書指導をする。などのことが必要だと思われる。

昭和61年度1学期　4月　5月　6月　貸出し利用状況

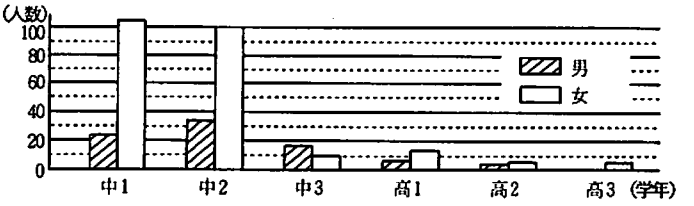
	中1	中2	中3	高1	高2	高3	合計
4月	20 / 15 / 2 / 2 / 18	42 / 16 / 19 / 12 / 30	9 / 2 / 3 / 6 / 3	6 / 6 / 0 / 2 / 4	2 / 1 / 0 / 0 / 2	0 / 0 / 0 / 0 / 0	79 / 42 / 25 / 22 / 57
	貸出日……8回(5)						
5月	46 / 32 / 10 / 13 / 33	36 / 23 / 10 / 14 / 22	5 / 2 / 3 / 3 / 2	7 / 5 / 1 / 2 / 5	4 / 4 / 0 / 3 / 1	4 / 4 / 0 / 0 / 4	102 / 70 / 24 / 35 / 67
	貸出日……10回(7)						
6月	60 / 37 / 13 / 8 / 52	45 / 21 / 15 / 7 / 38	9 / 5 / 4 / 6 / 3	4 / 3 / 1 / 1 / 3	1 / 0 / 1 / 0 / 1	1 / 0 / 0 / 0 / 1	120 / 66 / 35 / 22 / 98
	貸出日……13回(9)						
合計	126 / 84 / 25 / 23 / 108	123 / 60 / 44 / 33 / 99	23 / 9 / 10 / 15 / 8	17 / 14 / 2 / 5 / 12	7 / 5 / 1 / 3 / 4	5 / 4 / 0 / 0 / 5	301 / 176 / 84 / 89 / 212
	貸出日……31回(21)						

(　)内の数字は、1日2回の貸出日の回数

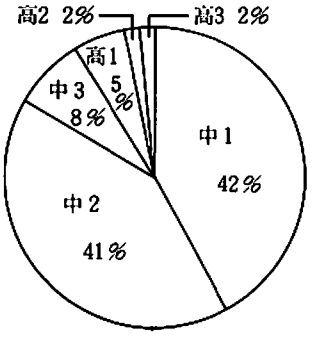
見方



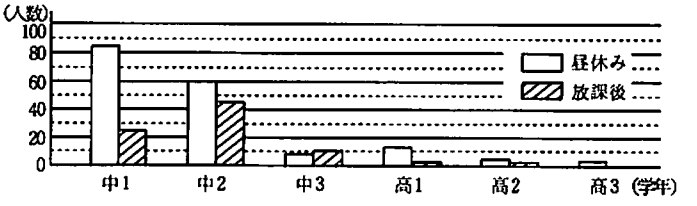
学年別男女利用状況



学年別利用状況



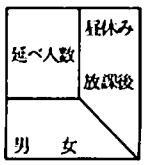
学年別時間帯利用状況



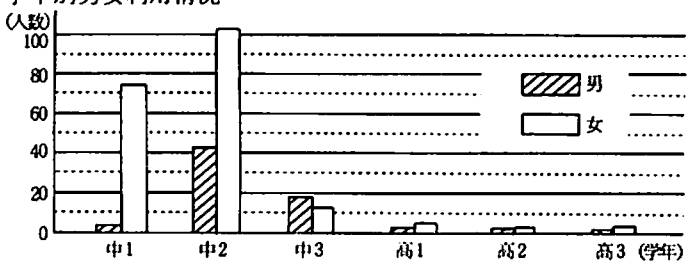
昭和61年度2学期　9月　10月　11月　貸出し利用情況

	中1	中2	中3	高1	高2	高3	合計
9月	延べ人数 21 昼休み 14 放課後 6 男 1　女 20	延べ人数 38 昼休み 18 放課後 10 男 9　女 29	延べ人数 9 昼休み 6 放課後 0 男 6　女 3	延べ人数 2 昼休み 0 放課後 1 男 1　女 1	延べ人数 1 昼休み 1 放課後 0 男 1　女 0	延べ人数 3 昼休み 1 放課後 0 男 2　女 1	延べ人数 74 昼休み 40 放課後 17 男 20　女 54
	貸出日……11回（7）						
10月	延べ人数 24 昼休み 18 放課後 6 男 2　女 22	延べ人数 45 昼休み 19 放課後 26 男 12　女 33	延べ人数 8 昼休み 7 放課後 1 男 4　女 4	延べ人数 5 昼休み 0 放課後 0 男 2　女 3	延べ人数 0 昼休み 0 放課後 0 男 0　女 0	延べ人数 0 昼休み 0 放課後 0 男 0　女 0	延べ人数 82 昼休み 44 放課後 33 男 20　女 62
	貸出日……12回（2）						
11月	延べ人数 33 昼休み 28 放課後 5 男 1　女 32	延べ人数 62 昼休み 30 放課後 32 男 21　女 41	延べ人数 14 昼休み 10 放課後 4 男 9　女 5	延べ人数 1 昼休み 0 放課後 1 男 0　女 1	延べ人数 4 昼休み 3 放課後 1 男 1　女 3	延べ人数 3 昼休み 3 放課後 0 男 0　女 3	延べ人数 117 昼休み 74 放課後 83 男 32　女 85
	貸出日……10回（0）						
合計	延べ人数 78 昼休み 60 放課後 17 男 4　女 74	延べ人数 145 昼休み 67 放課後 68 男 42　女 103	延べ人数 31 昼休み 23 放課後 5 男 19　女 12	延べ人数 8 昼休み 0 放課後 2 男 3　女 5	延べ人数 5 昼休み 4 放課後 1 男 2　女 3	延べ人数 6 昼休み 4 放課後 0 男 2　女 4	延べ人数 273 昼休み 158 放課後 93 男 72　女 201
	貸出日……33回（9）						

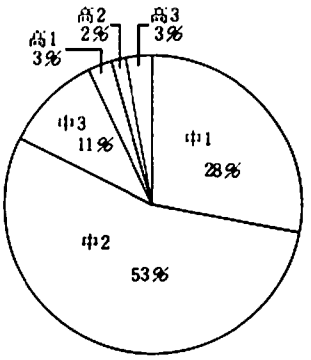
（　）内の数字は、1日2回の貸出日の回数



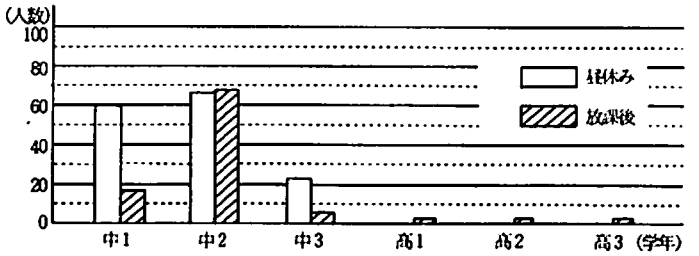
学年別男女利用情況



学年別利用情況



学年別時間帯利用情況

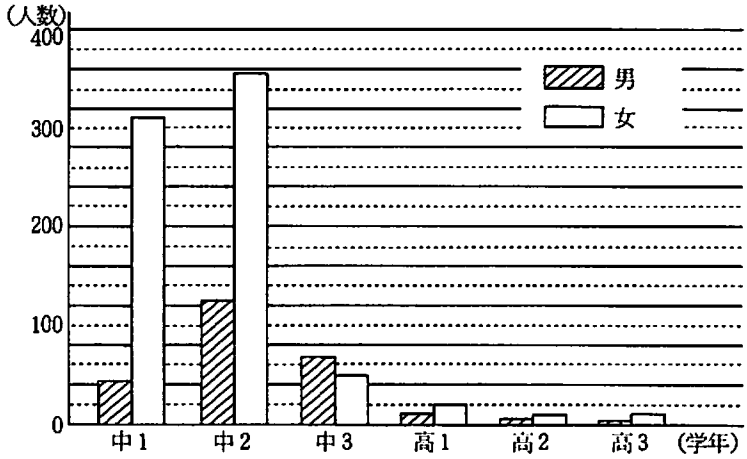


昭和61年度貸し出し利用状況(学年末)

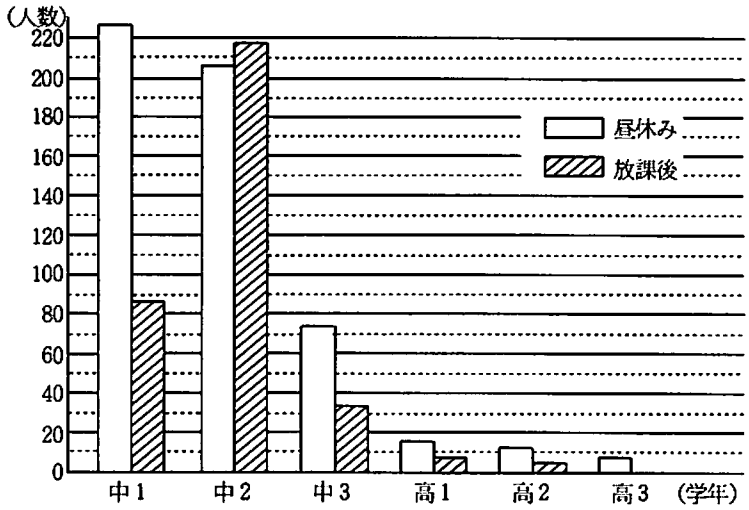
	中1	中2	中3	高1	高2	高3	合計
4月	20 / 15 / 2 / 2 18	42 / 16 / 19 / 12 30	9 / 2 / 3 / 6 3	6 / 6 / 0 / 2 4	2 / 1 / 0 / 0 2	0 / 0 / 0 / 0 0	79 / 42 / 25 / 22 57
	貸出日……8回(5)						
5月	46 / 32 / 10 / 13 33	36 / 23 / 10 / 14 22	5 / 2 / 3 / 3 2	7 / 5 / 1 / 2 5	4 / 4 / 0 / 3 1	4 / 4 / 0 / 0 4	102 / 70 / 24 / 35 67
	貸出日……10回(7)						
6月	60 / 37 / 13 / 8 52	45 / 21 / 15 / 7 38	9 / 5 / 4 / 6 3	4 / 3 / 1 / 1 3	1 / 0 / 1 / 0 1	1 / 0 / 0 / 0 1	120 / 66 / 35 / 22 98
	貸出日……13回(9)						
7月	36 / 13 / 5 / 12 24	40 / 9 / 12 / 2 38	13 / 9 / 3 / 4 9	3 / 1 / 1 / 1 2	2 / 1 / 1 / 1 1	0 / 0 / 0 / 0 0	94 / 33 / 22 / 20 74
	貸出日……7回(3)						
9月	21 / 14 / 6 / 1 20	38 / 19 / 26 / 12 33	9 / 6 / 0 / 6 3	2 / 0 / 1 / 1 1	1 / 1 / 0 / 1 0	3 / 1 / 0 / 2 1	74 / 40 / 17 / 20 54
	貸出日……11回(7)						
10月	24 / 18 / 6 / 2 22	45 / 19 / 26 / 12 33	8 / 7 / 1 / 4 4	5 / 0 / 0 / 2 3	0 / 0 / 0 / 0 0	0 / 0 / 0 / 0 0	82 / 44 / 33 / 20 62
	貸出日……12回(10)						
11月	33 / 28 / 5 / 1 32	62 / 30 / 32 / 21 41	14 / 10 / 4 / 9 5	1 / 0 / 1 / 0 1	4 / 3 / 1 / 1 3	3 / 3 / 0 / 0 3	117 / 74 / 83 / 32 85
	貸出日……10回(10)						
12月	20 / 14 / 6 / 0 20	41 / 16 / 25 / 10 31	12 / 7 / 5 / 9 3	2 / 0 / 2 / 1 1	0 / 0 / 0 / 0 0	0 / 0 / 0 / 0 0	75 / 37 / 38 / 20 55
	貸出日……9回(7)						
1月	34 / 23 / 11 / 2 32	73 / 31 / 42 / 20 53	14 / 14 / 0 / 8 6	0 / 0 / 0 / 0 0	2 / 1 / 1 / 0 2	1 / 1 / 0 / 0 1	124 / 70 / 54 / 30 94
	貸出日……10回(10)						
2月	48 / 30 / 18 / 0 48	42 / 16 / 26 / 10 32	20 / 11 / 9 / 10 10	0 / 0 / 0 / 0 0	0 / 0 / 0 / 0 0	0 / 0 / 0 / 0 0	110 / 57 / 53 / 20 90
	貸出日……11回(10)						
3月	9 / 2 / 5 / 0 9	18 / 9 / 2 / 6 12	1 / 0 / 1 / 1 0	0 / 0 / 0 / 0 0	0 / 0 / 0 / 0 0	0 / 0 / 0 / 0 0	28 / 11 / 8 / 7 21
	貸出日……4回(1)						
合計	351 / 226 / 87 / 41 310	482 / 208 / 219 / 123 359	114 / 73 / 33 / 66 48	30 / 15 / 7 / 10 20	16 / 11 / 4 / 6 10	12 / 9 / 0 / 2 10	1005 / 544 / 392 / 248 757
	貸出日……105回(79)						

( )内の数字は、1日2回の貸出日の回数

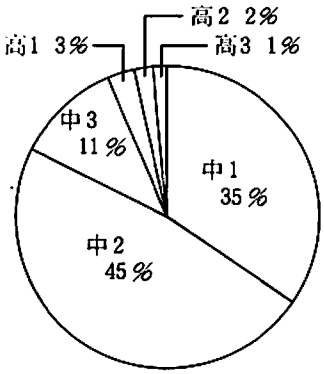
学年別男女利用情況（学年末）



学年別時間帯利用情況



学年別利用情況



夏休みの利用情況

貸出日 ― 8回

利用者 ― 中1　3人（男1人、女2人）

中2　15人（男1人、女14人）

中3　2人（男0人、女2人）

高1　0人

高2　0人

高3　0人

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

六年一貫における進路状況

進路科　木村　維男　　松本　博史

はじめに

本校における進路指導の実態は、最近10年とそれ以前とは大きく様がわりしてきた。以前は、「本校の教育は大学進学を目的とはしていない、大学受験は個人的な問題であり、学校が関知すべき事柄ではない」というような極論もまかり通っていた。その時代の生徒達は、各自で進路を決定し、受験先を選び、教師は調査書を作成するだけ、というのが大勢であった。しかし、最近は進路指導部と高校の担任が、進路指導に積極的に関与し、予備校の入学まで世話をしているというのが現実の姿である。

今後の本校の進路指導、進路保障を考えるために、六年一貫教育になってからの進路の情況を総括する。その際、プライバシーに抵触しない、紀要の内容として適当なものと言う観点から、中高六年一貫実施後の昭和53年度から60年度卒業生までを考察の対象とした。また、一貫実施後、昭和58年度卒業生からは、それまでの中学入学選抜方法（学力検査のみで選抜）とは異なり、附属小学校から約50名接続し、残りの定員の３倍になるように、応募者をまず抽選で選抜し、その後入学検査を実施するという方法を取っている。このように、選抜方法が異なる対象を分析するため、便宜上昭和53年度～昭和57年度の卒業生656人を＜非抽選＞組と呼び、昭和58年度～昭和60年度卒業生367名を＜抽選加味＞組と呼ぶことにする。なお、考察の主たる内容はデータ数の関係から、進路指導のうち大学進学を中心に行う。

(1)　昭和53年度から昭和60年度卒業生の進路状況

次の表は、今回の考察の対象となる学年の進路状況の一覧表であり、今回の分析の基本資料である。

表　1

卒業年度	卒業者数	国公立大学				私立大学				短期大学				専門学校				就職				自宅学習	
		現役	一浪	二浪以上	計	現役	一浪	二浪以上	計	現役	一浪	二浪以上	計	現役	一浪	二浪以上	計	現役	一浪	二浪以上	計	人数	割合(%)
53	136	45	23	5	73	31	16	5	52	9			9	1	1		2	0			1	50	36.8
54	128	45	17	4	66	30	22	2	54	9	1		10	0	2		2	0			0	44	34.4
55	131	45	19	7	71	28	21	1	50	6	1		7	1			1	3			3	48	36.6
56	126	35	27	9	71	31	16	2	49	6			6	1		2	3	2			2	51	40.5
57	135	38	19	4	61	40	21	6	67	5			5	2	4	1	7	1			1	49	36.6
58	130	29	19	8	56	28	19	7	54	11	5		16	2		2	4	2	1		3	58	44.6
59	118	25	19	2	46	33	21	4	58	9			9	2			2	3			3	46	39.0
60	119	27	(20)		(47)	30	(23)		(53)	5	(1)		(6)	0			(0)	2			(2)	55	46.2

（注）60年度卒業生で一浪の者は、国立大学の入試制度が以前と大きく異なるため(　　)をつけた。

(2) 大学・短大進学者について、現役と一浪の割合（対卒業者数）

表 2

	国公立大学		国公私立大学		大学・短大	
	現役	一浪	現役	一浪	現役	一浪
非抽選	208 人 31.7 %	105 人 16.0 %	368 人 56.1 %	201 人 30.6 %	403 人 61.4 %	203 人 30.9 %
	47.7 %		86.7 %		92.3 %	
抽選加味	54 人 21.8 %	38 人 15.3 %	115 人 46.4 %	78 人 31.5 %	135 人 54.4 %	83 人 33.5 %
	37.1 %		77.9 %		87.9 %	

高校卒業後、現役で大学・短大に進学する者は、<非抽選>、<抽選>で61%、54%である。一年後には、それぞれ92%、89%となる。したがって、卒業一年後には、約90%の者が大学・短大に籍を置いている。また、1.8%の者が専門学校に、1.4%の者が職に就いている。残りの約7%の者が進路未定の状態である。表1、2からみて、<非抽選><抽選>の差異は、私立大学、短期大学、専門学校、就職への進路を取るものの実数は、ほとんど変化がない。しかし、国公立大学では、大きく変化している。本校の目指している非エリート化は確実にすすんでいると考えられる。

短期大学進学者は、年度によって若干の差はある。しかし、ほとんどが現役での進学者である。一浪した者は、大部分が4年制大学に進学し、短大はごく僅かである。

短大進学者については、以前は第一志望の4年制大学が不合格の場合に、次善の策として、どこかの短大へという生徒が多かった。しかし、最近の短大志望者は、自分の将来の生活設計を考慮して、英文科、家政科、初等教育、芸術方面の短期大学へと志望学科を絞り、進学を早くから決めている生徒達が顕著になってきている。

(3) 地区別、国公立大学進学者数

表3は国公立大学への現役進学者と、一年後の進学者を地区別に調べ、その国公立大学進学者に対する割合を表したものである。

表 3

	北海道		東北		関東		中部		近畿		中・四国		九州		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
非抽選	4	0	2	1	13	9	10	5	130	124	11	2	2	0	172	141
	4 1.3 %		3 1.0 %		22 7.0 %		15 4.8 %		254 81.2%		13 4.2 %		2 0.6 %		313	
抽選加味	0	0	2	0	6	2	8	3	38	29	2	1	1	0	57	35
	0		2 2.2%		8 8.7%		11 12.0%		67 72.8%		3 3.3%		1 1.1%		92	

表2から、国公立大学への進学者は、それぞれの卒業生に対して

（非抽選）　47.7 %　　（抽選加味）　37.1 %

である。国公立大学への進学率は選抜方法の差異により、10.6％の差がある。

また、表3から近畿圏の国立大学への進学者は、それぞれの卒業生に対して

（非抽選）　38.7％　　（抽選加味）　27.1％

であり、近畿圏の国公立大学への進学率は11.6％の差がある。以上のことから、国公立大学への進学者の減は、近畿圏への進学者減とほぼ一致している。また、近畿以外への進学者の割合は、あまり変化していないといえる。しかし、中部地方への進学は、大きく増加している。

表4は、国公立大学進学者のうち、近畿圏への進学者の男女別の割合を表したものである。

表　4

	男　子	女　子
非 抽 選	75.6％	87.6％
抽選加味	66.7％	82.9％

女子の4.7％減に対し、男子は8.9％減で、男子の減少が大きい。奈良県の場合、大阪や京都府下の大学に進学しても、専門課程になると、下宿することが必要となる者が増えてくる。したがって、最初から自宅通学はあまり考えず、自分の希望する専門の内容と大学の特色をよく研究し、幅広く全国に進学先を求めるのが望ましいと思われる。

女子の地元志向は、「女子の下宿生活は許さない。」という家庭の考えに影響されていると思われる。また、女子は同じ近畿圏でも、奈良・大阪よりも神戸に魅力を感じ、ムードで進学したがる傾向がある。これは、奈良が閉鎖的な歴史の古い、海にめぐまれない地域であり、開放的で、エキゾチックな気分にひかれるためと思われる。

(4)　現役の時の受験

表5　四年制大学の受験率
（受験者数／卒業者数）

	男	女	全 体
非 抽 選	97.5％	96.7％	97.0％
抽選加味	96.8％	91.8％	94.3％

短 大 の 受 験 率

非 抽 選	8.7％
抽選加味	12.8％

表5は、現役時の四年制大学と短期大学の受験者の割合を示している。この表より、現役の時に四年制大学を受験する者が、女子において5％減少していることが分かる。これは、企業の女子社員採用の条件が大学卒より短大卒になっていることに影響されている。四年間の大学生活より、社会での労働に意欲をもつ者が、短大進学を第一志望とする傾向になりつつあると思われる。したがって、進路指導をする者は、今後それぞれの短大の内容・特色を詳しく把握していかなければならない。

表6　一人あたりの受験校の数(延受験者数／受験者数)

四 年 制 大 学

	男	女	全 体
非 抽 選	2.8校	3.0校	2.9校
抽選加味	2.7校	3.1校	2.9校

短　　大

非 抽 選	1.7校
抽選加味	1.9校

表6は、現役のときの一人あたりの受験校の数（出願校数ではない）を示している。この表より、一人あたりの受験校の数は、非抽選・抽選加味のいずれにおいてもあまり差はなく、男子は3校弱、女子は3校の大学を受験していることがわかる。けれども、生徒個々については、1校のみ受験する者から、浪人だけはしたくないとの強い考えから10校以上受験する者まで大きな差がある。全体的に、「1年ぐらいの浪人は人並」との考えが男子に強く、「合格すればラッキー」と、無理な受験をする者が目立つ。

(5) 就職について

58年度卒業生以降61年までの4年間における就職者は8人で、その内訳は

奈良県警　2人　　地方公務員　2人　　サービス業　3人　　製　造　業　1人

である。一般企業に就職した4人中、学校が生徒および保護者との話し合いの結果、職種・企業を決定したのは1人だけである。他の3人は、縁故または推薦者のある就職である。

高三の学年始めにおける就職希望者は、例年ほとんどなく、そのため、企業からの求人申し込みは大変少ない。今後、就職希望者が増加した場合、企業とのつながりが全くないため、そのときの就職指導は、かなりむずかしいと思われる。

(6) 本校の進路指導について

六年一貫における中学生に対しての進路指導を、いつ、どのように行えばよいのか。長年課題になっているが、具体化できないまま、各学年にまかせた形になっている。そのため、あまり進路について考えることがなかった生徒が、高校生になった途端、自分の進路について考えはじめ、不安になる。そして、どこから、どのようにして知識や判断材料を得たらよいのか分からないまま、時を過ごしてしまう。そこで、高一・高二のHRの時に

1. 進路とは何か。
2. どのように進路を決定するか。
3. どんな進路があるか。
4. 学習について。
5. 受験について。

などについて触れ、学年P・T・Aにおいて、「家族との対話」と「社会に目をむけさせる」ことを依頼する。そして、自分の進路を考える1つの材料として、進路適性検査と全国模試を実施する。つづいて、高二で2回、高三で4回全国模試を行い、それらをもとにして、そのつど担任が進路指導を行う。

高校生には、1週に33時間の授業（そのうち、1時間はHR、1時間は特活）を行っていて、進学のための時間外の補習は、学校としては行っていない。ただし、高三生は、いろいろな学校行事や家庭学習で授業時数が不足するための（高三生の実授業は、年間約22週分）、夏季休暇中、多くの教科担任が自主的に補講を実施している。

本校の教科方針は、中高6年間の内容を、5年に圧縮するのではなく、6年かけて指導することになっている。これは、受験のための授業にならないよう、あくまで学問的な深さ・広さの指導に努めているからである。この方針は、教科指導のあるべき姿といえるが、進路指導の上からは、受験のための演習が十分ではないという短所をもっている。そのかねあいは非常に難しく、今後の大きな課題といえる。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

P　T　A

辻本美奈子　　吉沢　栄敏

1.．ＰＴＡだより　まとめ

年度	号	厚生部	教養部	広報部
51	1 2 3	（不明） ・マット清掃具購入 ・ウォータークーラー設置	・飛鳥見学会（門脇先生） ・陶芸教室	・会員のページ ・先生のプロフィール ・行事報告 ・夏休み作文、読書感想文
52	4 5		・レザークラフト ・寺院めぐり （銀閣寺、南禅寺、エルミタージュ展見学）	・父母のページ ・先生のプロフィール ・行事報告 ・入試方法改善について ・「親と子の対話」
53	6 7	（ＰＴＡ組織変え） ・スポーツ大会 （バレーボール） ・奈良を歩く会 （山の辺の道）	・学園祭展示 ・七宝焼 ・社会見学（高雄・神護寺）	・先生のプロフィール ・「共通一次テストとは」 Ｑ＆Ａ ・「子供と共に　中一中二」 ・共通一次初年生
54	8 9 10	・スポーツ教室 （バレーボール、テニス） ・ハイキング （春日奥山めぐり） ・園芸講習会 ・講演会「人生半ばからの出発」（冨士谷先生） （藤　掛先生）	・七宝焼 ・音楽会（文館） ・学園祭展示 ・社会見学（湖東三山）	・先生のプロフィール ・学校行事報告 ・「インベーダーを考える」

年度	号	厚生部	教務部	広報部
55	11 12 13	・スポーツ教室 （バレーボール、卓球） （ソフトボール大会） ・料理教室 ・講演会（松村先生） ・ハイキング（竜王山）	・七宝焼 ・社会見学　京都美術館 国際会議場 仁和寺 ・学園祭展示	・体育大会 ・先生のプロフィール ・一泊行事 ・「親のあり方をさぐる」 ・学園祭 ・知っていますか こんな生徒の活動 ・フィールドワーク ・卒業特集
56	14 15 16	・料理教室 ・ソフトボール大会 ・食品工場見学	・学園祭展示 ・社会見学 （民族学博物館） ・講演会　（常盤勝憲師）	・随　想 ・〝わが校の良いところ 悪いところ〟 親への希望＝先生方の意見 ・中高一貫の表と裏 （松村先生） ・学園祭特集・ビル君 ・卒業にあたって 〝中高6年間を振り返って〟高三父母の座談会
57	17 18 19	・料理教室 ・ヨガ体操と体力検査 ・ハイキング（飛鳥路）	・陶芸教室 ・学園祭展示 ・社会見学（吉野山） ・大和文華館見学会	・〝あなたは学校に何を 望みますか〟 ・ゆとり時間いろいろ ・学園祭特集 ・卒業特集
58	20 21 22	・料理教室 ・バドミントン大会 ・ボーリング大会	・陶芸教室 ・学園祭展示 ・社会見学 醍醐寺、万福寺	・今、子供たちは・・・ 〝私を信じて、あまりかまわないで〟（アンケート） ・学園祭特集 ・〝今子供たちは、お互いにもっと理解を〟 ・卒業一翔び立つ ・〝今子供たちは〟まとめ
59	23 24 25	・ヨガ教室 ・料理教室 ・講演会（田中恒子先生）	・陶芸教室 ・学園祭展示 ・社会見学（湖東三山）	・〝明日をめざし、進路問題を考える〟 ・〝考えよう親と子のかかわり合い方〟 ・学園祭特集 ・〝子らと共に育ち合おう〟（本の紹介） ・卒業特集

年度	号	厚生部	教養部	広報部
60	26 27 28	・料理教室 ・バドミントン大会 ・ボーリング大会	・陶芸教室 ・学園祭展示 ・社会見学（高雄）	・〝お父さん出番ですよ〟 ・〝続お父さん出番ですよ〟 ・学園祭見てある記 ・玖村先生追悼特集 ・卒業特集
61	29 30 31	・料理教室 ・大阪ガス見学会 ・ボーリング大会 ・講演会（森尾仁子先生）	・陶芸教室 ・学園祭展示 ・社会見学（大原三千院）	・〝僕は私は、そして思うこと〟ホンネは？ ・学園祭特集 ・卒業特集
主なもの		＊料理教室 ＊スポーツ教室 ＊工場見学会 ＊講演会	＊陶芸教室 ＊学園祭展示 ＊社会見学	＊特集 ＊学園祭特集 ＊卒業特集 ＊その他の行事

2. 現状と問題点

本校のＰＴＡ活動は、校区が広いという理由から、公立校に比べて、活動しにくいところがある。

加えて、近年、母親で勤める方が増えており、役員の引き受け手が少なくなっていることも理由として上げられる。

ＰＴＡといっても、Ｔである教師の行事への参加も、校務などのため難しく、行事に参加する保護者はよく参加されるが、全然されない方が多い。行事案内のプリントが生徒から親へ届かないこともあったり、学年のＰＴＡ活動と学校全体の活動との兼ね合いもむづかしいところである。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

中1一泊行事 —6年一貫教育のオリエンテーションとして

(1) 一泊行事の位置と意義

6年一貫教育になってから、一泊行事の位置が一層明確にされた。各年度の中1発行のしおりによれば、各学年ともこの一泊行事を6年間の学校生活のオリエンテーションとして位置づけ、

① グループ活動を通じて、よき友人関係を育てる。

② 団体生活を通して、基本的行動様式を習得させる。

③ 自然を観察し、自然に親しむことを通して、健康な心身の育成をはかる。

などの目的をかかげて実施してきた。6年間で3回しかない宿泊行事の1回をここにあてているわけだが、その効果は大きく今後共一層の充実をはかっていく必要があろう。

(2) 実施期日および場所

一泊行事は、例年4月末から5月初のゴールデンウィークを中心に実施してきた。4月20日前後では準備にあわただしく、5月10日前後では中間考査などの関係もあって苦しいので、妥当な期日といえよう。場所は、青少年野外活動センター（県立、山辺郡都祁村吐山）でながらく実施してきたが、1982年度から国立曽爾少年自然の家（宇陀郡曽爾村）に変更して、今日に至っている。

(3) 活動内容

活動内容の骨組みは、10年間あまりかわっていない。おおむね右ページ資料の日程からわかるように、①ハイキング②キャンプファイヤー③野外炊事④日常生活・団体生活に関する訓練、の4点である。

①ハイキング　貝ケ平山、後古光山などに登るもので、天候などによって若干違いがあるものの割合長い距離を歩いている。

②キャンプファイヤー　生徒に司会や企画を任せて実施しているが、中1という発達段階のせいか、フォークダンスには抵抗が強い。

③野外炊事　火のおこし方、調理のし方などは未熟だが、なんとか食べられるようである。

④生活訓練　朝夕のつどい、夕食入浴のマナー、ベッドメイキング及び後片づけなどすべてを集団のなかで、手ぎわよく実施せねばならない。順調に行っているわけではないが、訓練する意義は大きい。

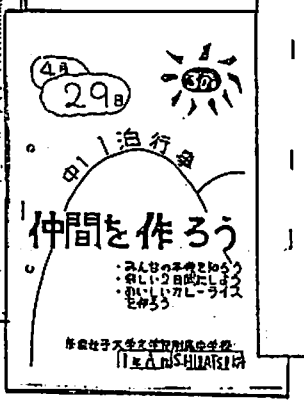
(4) 事前事後指導

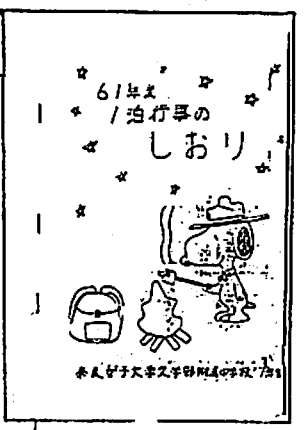
事前指導でとくに力を入れているのは、①生徒の代表も含めた〝下見〟②生活班（8名ぐらい）の編成と指導、③各係（班長、副班長、食事、レクレーション、保健、生活など）ごとの指導で、この指導の是非が一泊行事成功のカギを握っている。

さらに、生徒の参加を得て、行事用の『しおり』を作成し当日に備えている。こうした事前指導は年々丁寧になり、『しおり』も拡充される方向にあるが、今後共一層の強化が要求されることになろう。

事後指導は、①感想文の提出や文集の作成、②写真の展示などを行っている程度である。

一泊行事
しおり表紙





しおりより

一泊行事

目的、期日 ―― 1.
学級～自然の家の地図 ―― 3.
スケジュール ―― 4.
生活のきまり ―― 6.
生活班名簿　班員名簿 ―― 7.
生活班の仕事 ―― 10.
健康、安全について ―― 11.
親具の取り扱いについて ―― 12
清掃について ―― 14.
宿泊中の注意 ―― 15
野外炊事 ―― 17.
ハイキング ―― 20
キャンプファイヤー ―― 22

ハイキング

長ながいとロープで結び、暗く寒しい時の
宿舎の中を通りぬけ、暗闇の中をかきわけ、夜
石老山に、たどりつけ!

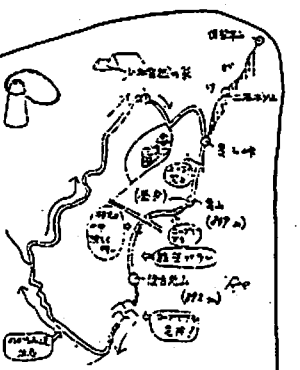
◎ハイキングコース　(本部決行)

学年自然の家 → 石山 → 石山(491m) ―― 赤倉(180m)
11:30出発!

→夜日光山(491m) → 学年自然の家

◎南(A組)の場合

学年自然の家 → 石山 → 二本杉山 → 横倉山 ―
二本杉山 → 石山 → 石山 → かもに → 学年自然の家



・学校行事は絶対にとらないこと

・弁当、水筒、ビニール袋、スプーン用品
用具、しおり、アップアップ
(必要品にすぐ出されるように
荷物をかたづけておくこと)

・雨天時は、本をもいたかがいよいにしよう。

・ゴミはきちんとしまうこと。

・すべりやすい所、ロープで引き時には注意しよう

1泊 一泊行事

目的

1 自然生活を通して基本的行動様式を身に付ける

2 学校生活の延長線上に、仲間づくりの場面の一貫として自然を深める。

3 自然環境を学習に活用し活動を通して健康生活の基礎をはかる

期日　昭和61年 5月18日(日)～5月20日(土)

場所　国立青少年自然の家　宇都宮市田村
TEL 0286-77-2311

参加者　中学1年生126名(男子65名、女子61名)

全体

1年1組	A班	14名	平塚、中村
2年1組	B班	14名	神山、足立
3年1組	C班	14名	原田、山中(男)
教師	8名		

集合、解散　集合　5月18日(日) 8:40分
学校集合(体育館)
解散　5月20日(土) 午後4時
集合場所は、当日、お知らせします。
(バスの入口)

5月18日(日)

時刻	活動内容	場所	指導
8:00	学校に集合、点呼(校長挨拶)	体育館	全職
8:15	学校出発 (バス3台)		
10:45	中学生の自然教室(子ども会) 入所式(所長挨拶、校長先生挨拶) オリエンテーション(所長)	野外炊飯場	全職
11:00	昼食	ロビー	
12:30	登山 小学生の遊戯を使用生徒 登山の注意 ア 出発 (校舎裏山へ)	山	山川
13:00	炊事、班長会議(夕の献立)	炊事場	
15:30	合流		
17:00	夕のつどい(校旗、校歌、校歌)		全職
17:30	入浴 ビンゴ (5人1組のグループ) (ビンゴ当日発表)		
19:30			
19:50	フィナー (はっぴつ太鼓)		
20:00	夜の一食(とた弁当)、入浴 (班長会議 (1日のまとめ))	ロビー	
22:00	就寝・消灯		

5月20日(土)

時刻	活動内容	場所	指導
5:00	起床、洗面、身の回り整理		
5:30	清掃(班毎)、洗面(班毎)しつけ、 [illegible]		
7:00	朝のつどい (校旗、校歌、校歌)	つどい場	全職
7:30	朝食		
9:00	出発準備(忘れ物チェック)	ロビー	
9:30	野外炊飯(集合の時間に遅れる)	炊事場	全職
	準備		
	炊事		
	食事		
	後片付け(環境整備)		
12:30	点検、点呼	つどい場	
14:00	自然の家 (出発)		
16:00	学校 (とう着)		
16:10	解散 (各自帰宅)		

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

水　泳　訓　練

出野上良子　　奈良　重幸

水泳訓練については、6年一貫教育における学校行事のあり方についての特集（1974年、第16集）で水泳訓練の目的、指導組織、指導内容、実施にともなうさまざまな問題について述べた。

ここでは、前回の発表との一部重複をまじえながらその後の、とりわけ安全確保の面からの指導の実態、改善点について報告する。

1. 安全確保のための配慮と事故防止対策

(1) 水上安全講習会

日本赤十字社に依頼し、7年前から2～3年に一回ずつ水上安全講習会を実施してもらっている。受講対象は本校の教官と水泳訓練に参加する助手（構成は水泳部O・Bと卒業生）である。内容は救助法、蘇生法、救急処置などで、本校のプールを用い実施している。

この講習会の影響、および養護教諭の要請のもと本校では蘇生機を購入、以降、実際の遠泳の場にも搬入している。

(2) 事前指導（プール指導）

教科指導での班別をもとに、生徒の泳力を上級（A）、中級（B）、初級（C）の3ランクにわけ、海への出発前に3～4日間、プールで事前指導を行っている。この目的は、①、身体のコンディションづくり、②、個々の泳力をアップすること、③、遠泳の際のペース配分と隊列づくりの練習、④、遠泳の体力づくり、である。

A、B、C、3ランク別に時間帯をもうけ、海での遠泳を仮想して、隊列を組み、それぞれ1,000～500 mを毎回泳がせるが、概して、生徒は楽にこなしている。隊列を組んでの練習後、特別に時間を取り、初級のCランクのものに教官と助手で個別指導を行うが、運動に関する適応能力にすぐれた年ごろのこと、事前指導最後の日には対象者全員がランクアップしている現状である。

(3) 先発グループによる現地海浜の事前チェック

水泳訓練本番1日前に先発隊として体育教官3名が現地に出向き、訓練場の海浜の様子、特に訓練場となる海底の様子、水温などのチェックと訓練に必要な道具の準備・整備に当り、より安全に訓練が実施できるよう努めている。

(4) ミーティング

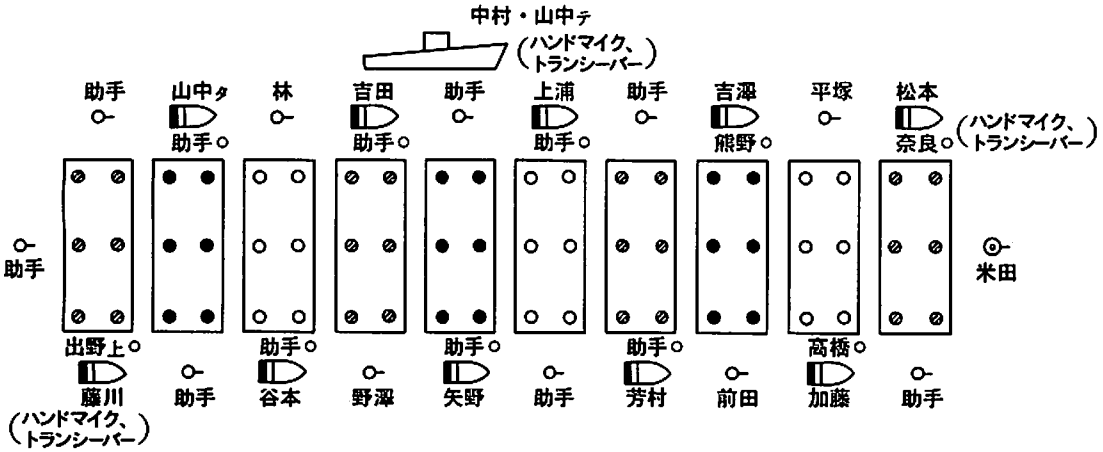
まず、初日の訓練開始前に先発隊によりチェックされた報告を受け、訓練に際しての船上監視、陸上監視、救助体制などの打あわせを引卒教官・助手全員で行っている。また機会あるごとに、各班別に生徒の身体の調子のチェック、泳力、泳法などのチェックも報告しあい、最後の遠泳前のミーティングでは遠泳隊形（男女別）、監視体制（ボート10台、機動船1台）、陸上監視、救助体制、教官・助手の伴泳などを図示し、さらに万全をこころがけている。

(5) 海での訓練と遠泳指導

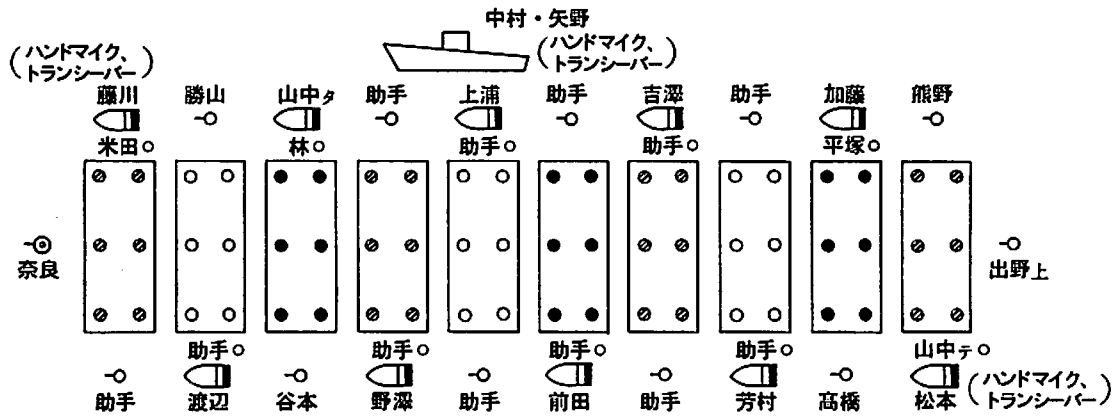
第1日目午後と2日目午前は、事前指導の隊列をもとに、約300 mを小まわり遠泳のかたちで

図 3.　遠泳時の監視、救助体制

〔女子〕



〔男子〕



<注>①船上監視、および伴泳者は□部分の 6 名を特に監視、救助にあたる。なお、監視しやすいように泳者の帽子を色わけする。

②船上監視の○印はとび込み要員。

③泳力の弱い者は後方の列に配置する。

訓練をしている。特にペース配分、隊列のとり方、泳法、泳力の不十分なものの再チェックなどに注意し、男女別にA・B班別で2回程度（1回約300～400 m）の練習を行っている。2日目はさらに距離をのばして2～3回泳がせ、遠泳に備えている。2日目の午後、約2kmの遠泳を男女別に実施している。監視、救助体制、隊形については(6)に詳しく図示する。

(6) 監視、および救助体制と遠泳隊形

訓練時、遠泳時の監視、救助体制、遠泳隊形については下図のとうりである。

図1. 練習コース

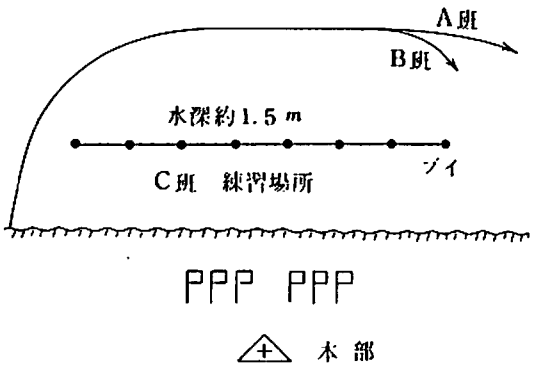
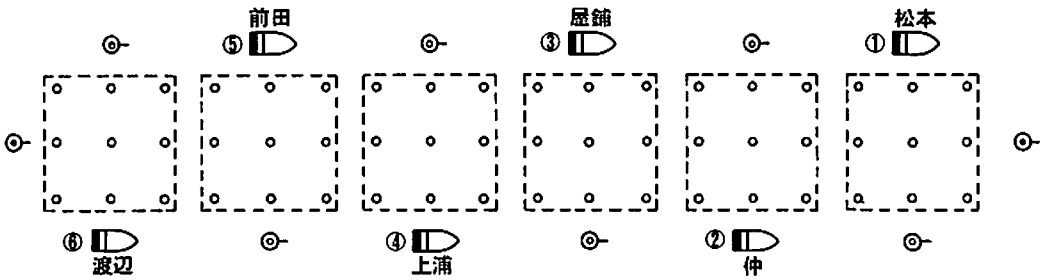


図2. 監視、救助体制（小まわり遠泳）練習時小まわり
遠泳時の隊列と船上監視、伴泳者の位置



<注> ボート、　チューブ持ち伴泳者、　ペースメーカー

の①、③、⑤は沖側、②、④、⑥は陸側、

には、救助用ヒモつきチューブ、メガホン、①、④、⑥にはトランシーバーをのせる。

船上監視はそれぞれ の部分の監視、救助を主として、①と②、③と④、⑤と⑥といった具合にお互いに協力しあう。

(7) 緊急時の体制

遠泳時の緊急事態の発生を考え、ボート、および機動船にトランシーバーをつみ、浜にある本部の教官とたえず交信を行っている。もしもの際、本部と海上とを結ぶ交通の便は機動船である。

遠泳中は養護教諭と現地の医師に本部待機をお願いしている。現地の救急病院にも遠泳をする旨事前に声をかけ、緊急事態発生の場合の対策を講じている。

ちなみに、引卒教官・助手に配布するプリントは以下のようなものである。

事故発生の際の心得と処置の仕方

① 事故発見者は、笛を長く、何回も連続して鳴らす。
（ピー、ピー、ピー、ピー……）

② 事故が発生したところの近くのボート、伴泳者、およびボートのとびこみ要員は、協力しチューブを持ってすばやく救助にあたり、機動船（ボート）に上げる。機動船（ボート）のトランシーバーで本部に事故の様子を知らせ、本部の指示をあおぎながら陸にあげる。

③ 事故が発生すると連鎖反応で他の者がパニック状態になりやすいので冷静に事故に対処して他の者をもまき込まないように十分配慮する。

④ 万一、重大事故が発生したときは、事故処置者以外の者は、パニック状態を引き起こさないように配慮しながら他の生徒の泳ぎを中止させ、全員を近くの陸にあげる。

⑤ 救助にあたっては、特別な場合以外は素手で救助にあたることのないように注意し、また単独での救助も危険が伴うので、できる限り近くの者がす速く協力して救助にあたり、万全を期すように心がける。

⑥ 陸上の本部は、船上連絡、指示、医療機関への連絡、救急車の要請など必要な処置をすみやかに行う。

2. 安全確保上からみた問題点

以上、本校の安全確保のための配慮と事故防止対策を記してきた。これらに関しては、一応それなりの成果をあげてきてはいる。しかし、過去に事故がなかったのはたまたま幸運だったといえるのかも知れず、こと安全確保に関しては、十分すぎるというものがない以上、さらにすべての箇所で改善の余地はあろう。例えば、水上安全講習会を毎年行うとか、救命具機器のさらなる充実を行うとか、ボートこぎ、ボートからのとび込み、救命具投げの練習を行うなどである。これらの問題は、今後、順をおって改善していくつもりであるし、実際、より改善できるものと考えている。

今回は述べなかったが、海が遠すぎることや助手人数確保の困難点、さらに引卒教官の高齢化など、間接的な安全確保上の問題点も改善課題として残っている。さらに、本校の誰もが切実に感じている水泳訓練行事そのもののマンネリ化からくる参加者の気持の上での安易な慣れというものにたいする対策もこうじなければならない。

毎回、水泳訓練後、反省会をもってはいるが、水泳訓練行事そのもののあり方についても、継続審議の必要があろう。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

修学旅行について

谷本　文男　吉田　裕

1.　10年の経過

年	行き先	行程	引卒者
52年	信州方面	25（T）　京都＝＝＝塩尻－－－諏訪湖－－－霧が峰－－－白樺湖 26（W）　白樺湖－たて科牧場－小諸－鬼押出－白根山－－志賀高原 27（T）　志賀高原－－－戸隠高原－－－－善光寺－－－－上高地 28（F）　上高地－－－－－－－－信濃町－－－－－－－－－－鹿島槍 29（S）　鹿島槍－扇沢－黒四ダム－扇沢－松本＝＝＝＝＝京　都	地主・木村 荒木・山中 井田・吉沢 出野上・仲
53年	信州方面	24（T）　京都＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝松本－－－－－－－－上高地 25（W）　上高地－－－－－－乗鞍－－－－－松本－－－－白　馬 26（T）　白馬－－－扇沢－－－黒四ダム－－－－扇沢－－白　馬 27（F）　白馬－－－長野－－－戸隠高原－－－白根山－－志賀高原 28（S）　志賀高原－－－－－－－－長野＝＝＝＝＝＝＝＝京　都	中道・龍野 仲　・寅貝 中尾・水町 吉岡・森口
54年	九州方面	23（T）　奈良－－－－－－－－－－－大阪南港～～～～～～～～～～～～～～～ 24（W）　～日向港－－つ葉道路－－サボテン公園－－青島－－宮崎 25（T）　自由研修－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－鹿児島 26（F）　鹿児島－－－三太郎峠－－－御船－－－熊本－－－阿　蘇 27（S）　阿蘇－－－立野－－－太宰府－－－博多＝＝＝＝＝京　都	上浦・水町 松本・荒木 林　・寅貝
55年	東北方面	21（T）　京都＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝ 22（F）　秋田－－－－－寒風山－－－－－能代－－－－－－弘　前 23（S）　弘前－－－十和田湖－－－－後生掛温泉－－－－藤七温泉 24（S）　藤七温泉－－－八幡平－－－小岩井牧場－－－－鶯宿温泉 25（M）　鶯宿温泉－－－盛岡＝＝＝＝＝東京＝＝＝＝＝＝＝京　都	加藤・堀内 寅貝・山中 芳村・藤沢 木村
56年	東北方面	20（T）　京都＝＝＝＝＝東京＝＝＝青森 21（W）　青森－－ねぶたの里－－焼山－－十和田湖～～～～～休　屋 22（T）　休屋－－－大湯－－後生掛温泉－－八幡平－－－藤七温泉 23（F）　藤七温泉－－渋谷村－－盛岡－－小岩井牧場－－網張温泉 24（S）　網張温泉－－盛岡＝＝＝東京＝＝＝京都＝＝＝西大寺	木村・加藤 渡辺・仲 屋舗・玖村 樋口

年	行き先	行程	引率者
57年	九州方面	19（T）大阪南港〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 20（W）日向港―――――――――――――――――――――――宮崎 21（T）A・宮崎――――志布志湾――――桜島――――――鹿児島 B・宮崎――――えびの高原―――霧島――――――鹿児島 22（F）鹿児島――――――水俣――――――宇土――――――――阿蘇山 23（S）阿蘇山――――――太宰府――――博多＝＝＝＝＝＝＝＝京都	藤田・吉岡 芳村・中尾 中村・吉沢 松村
58年	東北方面	21（F）京都＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝ 22（S）大館―――――――十和田湖〜〜〜奥入瀬―――――――休屋 23（S）休屋――――後生掛温泉――――八幡平――――――網張温泉 24（M）A・網張温泉――――――小岩井牧場――――――――網張温泉 B・網張温泉―――宮古―――浄土が浜――――――網張温泉 C・網張温泉―――角館――――田沢湖――――――網張温泉 25（T）網張――――――盛岡――――――東京―――――――― 京都	藤川・谷本 吉田・木村 寅貝・松村
59年	信州方面	23（T）京都＝＝＝名古屋――――馬籠――――諏訪――――霧が峰 24（W）霧が峰――白樺湖―軽井沢―鬼押出―白根山―――志賀高原 25（T）志賀高原―――長野―善光寺――松本城――――――大町温泉 26（F）大町温泉―黒四ダム―大観峰―美女平―立山――千里浜海岸 27（S）千里浜海岸―能登金剛――兼六公園―金沢＝＝＝＝＝京都	林・山中 荒木・野沢 木村・藤田 中村
60年	九州方面	22（T）奈良―――大阪南港〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 23（W）日向港――――青島――――――――日南―――――――都井岬 24（T）都井岬―――佐多岬―――根占〜〜〜山川――――――指宿 25（F）指宿――鹿児島港〜〜〜桜島港――えびの高原―――霧島温泉 26（S）霧島温泉――人吉――熊本――太宰府――博多＝＝＝京都	中道・中尾 寅貝・米田 谷本・辻本
61年	信州方面	20（M）京都＝＝＝＝＝＝＝＝高山――――――――――――平湯温泉 21（T）A・平湯温泉――上高地―大正池――諏訪湖――――白樺湖 B・平湯温泉―新穂高温泉―鍋平高原―上高地―――白樺湖 22（W）白樺湖――小諸――鬼押し出し――白根山―――――志賀高原 23（T）A・志賀高原―リンゴ狩り―善光寺―松本城―――大町温泉 B・志賀高原―リンゴ狩り―善光寺―木崎湖―――大町温泉 24（F）大町温泉――黒四ダム―大観望―美女平―立山＝＝＝奈良	木村・仲 堀内・谷本 屋舗・林 中村

＝＝＝汽車　―――バス　〜〜〜船

2. 本校の修学旅行の特色

① 高校2年の二学期に実施する。共通一次試験の実施により高3春休みに行っていたものを高二の10月下旬にするようになった。

② 期間は四泊五日、費用は6万円～7万円を限度とする。

③ 内容は観光旅行である。

④ 計画・運営は生徒の主導で行われる。

◎ 高校1年の1学期に生徒の修学旅行委員会を結成する。旅行委員は立候補及び選挙によって選ばれる。修学旅行委員会は、生徒の意見や希望を聞いて、行き先、見学地や自由行動の方法などをきめる。

◎ 修学旅行委員会は担任・旅行業者と相談して、細かい日程を決めて、生徒全体の意見を聞いて修学旅行案をつくる。

◎ 修学旅行案は教官会議で承認を得る。

◎ 修学旅行委員会（高校2年で委員を改選することもある。）には、委員長・副委員長・会計・記録・渉外・レクレイション係・写真係行動班長・部屋長などがおかれる。

◎ 修学旅行委員会は、旅行のしおり・歌集の作製、乗り物の座席の割り振り・旅館の部屋割りなどを行い、旅行中のすべての計画案をつくる。

◎ 旅行中は委員長が行動の指揮を取る。宿舎到着後直ちに、委員会を開い添乗員と共に宿舎の人と会い、部屋長を集めて諸連絡をするとともに、その日の反省や問題点などを話し合う。

3. 修学旅行の問題点

本校の教師に対して行ったアンケートにもとづいて、問題点を整理してみると次のようになる。（アンケートの回収は20）

(1) 修学旅行の是非について

必要　5　　不必要　4　　その他　5　　無回答　6

◎ その他には、形を変える・旅行に代わるもの・学年を変えるなどの意見があった。

◎ 修学旅行については、この10年間、日程の承認以外教官会議の議題にならず、その是非について討議したことがない。従って、修学旅行は慣例行事の一つとして行われてきた。

◎ 必要が5と少ないのは、修学旅行は実施期間としては6年間の中で最も長い行事であり、生徒にとっては期待の大きい行事であるにもかかわらず、教師にとっては意義の少ない行事ということをあらわしている。あるいは、修学旅行そのものが、現在の学校教育の中では、もはや意味がないと考えているようである。

◎ 本校でも、行事の見直しとともに、修学旅行について徹底した討論が必要である。

(2) 現状の修学旅行について

今のままでよい　1　　改善が必要　16　　その他　3

◎ いままでにも何度か改善の試みがなされたが（スキー教室、壱岐・対馬歴史の旅など）生徒の反対で成功していない。

◎ 「今のままでよい」というのは、生徒主導の計画・運営方法がよいということである。

◎ 観光旅行つまり、昼はバスの中で眠って夜は宴会でカラオケ、旅行業者に引卒された団体旅行に対する批判が圧倒的である。

◎ なんらかの改善が必要なことは、ほとんどの教官の意向である。

(3) 改善の方向について

A. 日数について　増やす　2　減らす　2

B. 費用について　増やす　2　減らす　2

C. 学年を変更する　2　毎年同じ所に行く　1

D. 観光旅行をやめる　6　社会見学にする　6

◎ 観光旅行をやめて社会見学的なものに改善しようというのがひとつの方向である。

それについては、スポーツ（スキー、ボート、水泳訓練の延長のもの)・登山・体験学習（農村での米や野菜作り、草刈りなど）・交流教育・合宿（校庭でキャンプや討論会）・グループ行動など多数の意見がある。

費用と時間をかけてユニーク（異文化にふれる旅）なものにすべきだ、学校生活では得られない体験を思い出として持ち得ればよい、充実した旅のしかたを学ばせるもの、などの意見もある。

4. 今後の方向

以上のことから、本校の6年一貫教育の中で、中1の宿泊訓練・中3の水泳訓練・高2の修学旅行と続く宿泊行事の見直し、とりわけ修学旅行について根本的な検討が必要であることはいうまでもない。

本校の第一の特色である生徒による自主的運営が、次第にうすれていっているという指摘もあり、今ここで本校の現状に立脚した改善がのぞまれる。そのキーポイントは次のようなものであろう。

1. 生徒の自主的活動であること。
2. 日常の学校生活とはちがったもの。
3. 自己の向上をはかれるもの。
4. 観光旅行的でないこと。
5. 費用と日数については討論を要する。
6. 時期についても、旅行の準備が学園祭（中心学年である）と重なることから検討を要する。
7. 修学旅行委員会の構成（男女のバランスなど）を考える。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

音　　楽　　会

吉田　信也　　山中　竹一

本校では、毎年秋に校内音楽会を行ってきた。その内容は、年々の教育の実状を反映させている。ここに、その特徴的プログラムを表示して、これまでの音楽会をふりかえる。

ふるくから行われた形態は次のとおりであった。

第1部……中学各学年（3クラス合同による）の合唱と合奏をそれぞれ1曲演奏。

第2部……高校生の音楽選択者による演奏。

第3部……中高の合唱クラブと器楽クラブによる演奏。

第4部……高校生の特別に優れた者の演奏。

この形態は、昭和44年まで続いていた。しかしこれには多くの問題があり、生徒達は第2部と第4部に批判の目を向けた。それは、校外で特別の指導を受けた者のために用意されたプログラムときめつけたのである。

そのプログラムは次の通りである。（昭和44年）

［第1部］

1. 合唱と器楽合奏（中1）
   - 森の歌 …… キユッケン
   - 小さな小鳥たちの踊り …… チャイコフスキー
2. 合唱と器楽合奏（中2）
   - 山道ゆくなら …… ハヨス
   - モルダウ …… スメタナ
3. 合唱と器楽合奏（中3）
   - かに …… 市川都志春
   - 狂詩曲「スペイン」から …… シャブリエ

［第2部］

4. 混声四部合唱（高1・2）
   - Zum Sanctus …… シュウベルト
   - Ave Maria …… アルカデルト
5. 習作発表（高3）
   - 25のソナタ「15番」…… スカルラッティ
   - 平均率No.1～17 …… バッハ
   - ソナタ「悲そう」第3楽章 …… ベートーベン
   - アベマリア …… ルッチ
   - 夢 …… トスティ
   - 厳格なるバリエーションOp.54 …… メンデルスゾーン
   - バラード第3番 …… ショパン

ラ・カンパネラ …… リスト
スケルツオ№1 …… ショパン

［第3部］

黒人霊歌2曲 …… 高3生徒合同編曲

6. 女声合唱（中学合唱クラブ）

円舞曲 …… ブラームス
野ばら …… シュウベルト
歌のつばさ …… メンデルスゾーン

7. 女声合唱（高校合唱クラブ）

狩りの合唱 …… ウェーバー
月光とピエロ …… 清水 脩

8. 器楽合奏（中高器楽クラブ）

ピアノ協奏曲「戴冠式」…… モーツァルト

［第4部］…… 高校生特別演奏

9. 二重唱「秋の歌」…… メンデルスゾーン
10. ピアノ独奏「ロンド ブリランテ」…… ウェーバー
11. バイオリン独奏「コンチェルト ホ短調」…… メンデルスゾーン
12. 独唱「さらばナポリ、カタリカタリ」…… イタリア民謡
13. 独唱「嘆きのセレナータ、マリアマリ」…… 同 上
14. ピアノ独奏「ためいき」…… リスト
15. ピアノ独奏「バラードOp.47」…… ショパン
16. ピアノ独奏「ウィーンの謝肉祭」…… シューマン
17. ピアノ独奏「ロンド・カプリチオ」…… メンデルスゾーン
18. 教官の独唱「待ちぼうけ、すみれ、おお愛しい父よ」

このプログラムは、たしかに高校生を中心にすえて、しかも直接授業とかかわらない部分の発表に多くの時間を費やしている。このころの教育界は、学園紛争の過中で、本校でもその例外でなく、このことは、音楽会にも影響を与えた。つまり、これまで続けられた音楽会の形式は一変して、純粋に校内で学習した音楽のみを発表することとした。そのプログラムは次の通りである（昭和45年）。尚この年から、中学生の発表を学年単位からクラス単位とした。

［第1部］…… 中学生による合唱と器楽合奏

中1．混声合唱「陽に寄せる」…… 京嶋 信
　器楽合奏「魔笛より なんと素晴らしいおとだ」…… モーツァルト
中2．混声合唱「湖 畔」…… 京嶋 信
　器楽合奏「森はにぎやか」…… 小林秀雄
中3．混声合唱「海の賛歌」…… 京嶋 信
　器楽合奏「新世界より ラルゴ」…… ドボルザーク

［第2部］…… 高校音楽選択生

高2．混声合唱「Lord, I want to be a Christian : Swing Low, Sweet Chariot」
　…… 黒人霊歌
高3．作品発表「太刺耳曲」（ピアノ曲の創作）
　ソプラノ独唱「うつろの心」……パイジエッロ「エーデルワイス」……オーストリア民謡

ピアノ独奏「プレリュウド Op.24 №3・6」…… ショパン
〃 「ソナタ Op.31 №1 第3楽章」…… ベートーベン
作品発表「牧歌」（ピアノ曲の創作）
ピアノ独奏「ソナタOp. 27 №2 第3楽章」…… ベートーベン
コントラバス独奏「協奏曲Op. 1」…… カール・スタミッツ
高1・2．混声合唱「ハレルヤ・コーラス」…… ヘンデル
［第3部］…… クラブの発表
中学合唱クラブ「狩人の合唱」…… ドイツ民謡
「信 仰」…… ロッシーニ
「村の風車」…… ビゼー
高校合唱クラブ「おおひばり」…… メンデルスゾーン
「グローリヤ」…… モーツアルト
中高器楽クラブ「ハフナーセレナードより“ロンド”」…… モーツアルト
「コントラバス協奏曲 第1楽章」…… カプッチ

この45年は、学園紛争のあおりで大変さびしい内容であった。この生徒のエネルギーを音楽活動に向けるべく努め、その結果46年度は、中学生に共通合唱曲のほかに2年・3年の自由器楽曲を演奏させた。また中学各組から代表者を出して、その演奏をさせた。それに高校生の演奏として、彼らの意志で歌劇の発表まで加わった。そのプログラムは次の通りである（昭和46年）。

［第1部］…… 中学合唱と器楽合奏
共通合唱曲 …… 中1「おかあさん」…… 高田信一
中2「風になりたい」…… 喜志邦三
中3「五木の子守歌によるコンポジション」……高橋克行
自由合唱曲と器楽合奏
1A．「モルダウ」…… スメタナ、（器）「山寺の和尚さん」…… 古謡
B．「野ばら」…… ウエルナー、（器）「 〃 」…… 〃
C．「ローレライ」…… ジルハー、（器）「 〃 」…… 〃
2A．「王の旗は進む」…… フランス民謡、（器）「メヌエット」…… ボワモルチエ
B．「My Bony」…… フラー、（器）「聖者が町にやって来る」…… 黒人霊歌
C．「荒城の月」…… 滝廉太郎、（器）「大漁歌い込み」…… 石井 勧
3A．「白ばらのにおう夕べは」… ネーゲリー、（器）「子供の謝肉祭」… ストリーボック
B．「ともしび」…… ロシヤ民謡、（器）「ます」…… シューベルト
C．「家 路」…… ドボルザーク、（器）「天国と地獄」…… オッヘンバック
［第2部］…… 中学各組代表演奏
1. 三重唱（中1A）「みどりのそよかぜ」
2. 三重唱（中1C）「だれかがくちぶえふいた」
3. ピアノ独奏（中2A）「ピアノの為の二つのソナタ№2」…… 奥村 一
4. 〃 （中2B）「エチュードOp.10 №12 “革命”」…… ショパン
5. ヴァイオリン二重奏（中2C）「トリオ」…… ヘンデル
6. 二重奏（中3A）「セレナード」…… シューベルト
7. 〃 （中3C）「スペインのセレナード」…… ビゼー

〔第3部〕…… 中高音楽クラブ

1. 女声合唱（中学）「歌の翼に」…… メンデルスゾーン
   「ことばの歌」…… 林　光
   「流浪の民」…… シューマン
2. 三 重 奏（中学）「時無し草」…… 磯部　俶
3. 女声合唱（高校）「Liebe vereinet」…… ヘンデル
   「Canon」…… デュラント
   「Though Philomela lost」…… モーリー
   「Ave Maria」…… アルカデルト
4. 弦楽合奏（中高）「アンダンテ・カンタービレ」…… チャイコフスキー
   「ブランデンブルグ協奏曲　No.3」…… バッハ

〔第4部〕…… 高校音楽選択生

1. 器楽合奏（音Ⅰ）「田園より」…… ベートーベン
2. マリンバ独奏（音Ⅱ増）「バンブルビー」…… リムスキー・コルサコフ
3. 独　唱（　〃　）「すみれ」…… スカルラッティ
4. ピアノ独奏（　〃　）「エチュード Op.10 No.12 “革命”」…… ショパン
5. 独　唱（　〃　）「おお優しの恋人よ」…… ドナウディー
6. ピアノ独奏（　〃　）「水の戯れ」…… ラヴェル
7. ヴァイオリン独奏（　〃　）「協奏曲第3番第1楽章」…… サンサーンス
8. ピアノ独奏（　〃　）「バラード第3番 Op.47」……ショパン
9. リコーダー・アンサンブル（音Ⅱ増全員）「コンチェルト」…… J. S. バッハ
   「W. A. モーツァルトのための8つの舞曲より “ブーレ”」…… モーツァルト
   「古いオランダ舞曲より “パパーヌ”」…… 〃
10. マリンバ・ヴァイオリン・ピアノのトリオ（音2増）
   「スプリング・ソナタ」…… ベートーベン
11. 歌劇（音2）「真間の手古奈」…… 服部　正
12. 全員合唱「ハレルヤ・コーラス」…… ヘンデル

このプログラムで、もう一つ特筆すべきことは、全員合唱（出演者全員と教官希望者による）が実現したことである。この全員合唱は、現在まで確実に受け継がれてきた。

昭和47年は、上記の様式を基本的には踏襲した。変化した点を強いて挙げるなら、器楽クラブの楽器（これまでは弦中心）に、金管、木管を加えたことである。これによって前述の全員合唱が、小規模ながらオケ伴で可能になった。

昭和48年は、中高6年一貫が初めて実施された年であったが、48・49年共に特筆すべきことはない。50年になると、6年一貫制の中のひとつの改革として、中学生の一人1クラブ制がとられることになり、そのプログラムから中学合唱クラブの文字がきえた。中高一貫による変化は、この程度であった。

次の51年は、校内の音楽会のかわりに、奈良県文化会館で、卒業生による演奏会を開き、同時に美術を選んだ卒業生の作品展示を行った。そのときのプログラムは次の通りである。

卒業生による演奏会プログラム

1. マリンバ独奏「イントロダクションとタランテラ」……ハッチ
   「木琴小協奏曲」…… 黛　敏郎
2. ピアノ独奏「交響的練習曲　作品13」…… シューマン

3. ヴァイオリン独奏「ソナタ　イ長調」……　フランク
4. ピアノ独奏「ブゾーニ編：シャヌコンク」……　バッハ
5.　〃　「ソナタ」……　バルトーク
6. ソプラノ独唱「鱒」……　シューベルト
「この柔らかなレースの中で」……　プッチーニ
「ああそはかの人か」……　ヴェルディ
7. ピアノ二重奏「幻想曲　作品5」……　ラフマニノフ

中高一貫制導入後4年が経過して5年目には、その最初の生徒は高校2年生となった。このころになると、合唱・器楽共に、クラブ活動が旺盛になった。これは明らかに、一貫教育の成果である。一旦消えた中学合唱部は、同好会として高校合唱部の中で活躍し、器楽クラブの取り組みが真剣になった。また、中学各学年の発表内容も改革し、これまでの器楽合奏を廃止して、課題曲と自由曲による合唱コンクールの形態とした。このことで、音楽会2～3週間前の中学各教室は、早朝からハーモニーにわいた。また、音楽室の手狭が問題となってきたのもこの頃である。下に、このプログラムと、中学合唱コンクールの審査基準を示す。

（昭和52年）

［第1部］……　中学合唱コンクール
共通曲　……　1年「波 の 音」……　川口　晃
2年「我 が 町」……　渡部節保
3年「海の賛歌」……　京嶋　信
1. 中1A「湖　畔」……　京嶋　信
B「水車小屋の思い出」……　川口　晃
C「秋 の 湖」……　ハンガリー民謡
2. 中2A「泉のように」……　渡部節保
B「星空を仰ぐとき」……　京嶋　信
C「星」……　〃
3. 中3A「雪　国」……　〃
B「そ　ら」……　堀　輝房
C「仏 法 僧」……　京嶋　信
［第2部］……　高校音楽選択生とクラブ
1. 音Ⅰ選択生
混声四部合唱「合唱賛歌」……　平井康三郎
2. 音Ⅱ選択生
女声合唱「Ave Maria」……　グノー
「別離の歌」……　チャイコフスキー
「祭りと花と娘」……　シャブリエ
3. 中・高合唱部
女声合唱「モルダウの流れ」……　スメタナ
「夢路より」……　フォスター
「村の風車」……　ビゼー
4. 音Ⅰ選択生
管弦楽「シンコペーテッド・クロック」……　L. アンダーソン

5. 中・高器楽部

管弦楽「シバの女王」…… M. ローレント

6. 全員合唱

“オーケストラで歌おうハレルヤ・コーラス”

オラトリオ「メサイヤ」よりハレルヤ・コーラス …… ヘンデル

52年度　中学合唱コンクール審査投票用紙

投票者氏名（　　）

審査要領

1. 1曲毎に採点し、10点満点。ただし校長は30点とする。
2. 1曲毎に演奏態度、技術、意欲、学級のまとまりを考慮して採点する。
3. 各学年の身体的発達条件の差も考慮して、1, 2, 3 年のそれぞれの基準で採点する。
4. クラブ演奏終了後に、審査結果の発表と表彰をする。

	中	1	中	2	中	3
	共通曲	自由曲	共通曲	自由曲	共通曲	自由曲
A						
B						
C						

53年には中学入試に抽選制が導入されたが、そのことによる音楽会のプログラム編成上の問題は何も無い。52年から始まった中学合唱コンクールは、今日までつずいているが、審査方法は一部改めた。つまり担任意外の教師による審査を廃止して、音楽科教師と各クラスの学芸部員（男女各1名）が投票する方法に変えたことである。この審査方法の改定の理由は、一部教師が審査に難色を示すこと、高校の授業の関係でこれに参加し難い、それに直接生徒に参加させることにより多くの関心が期待できるなどが挙げられた。また53年からは、音Ⅲの履修講座が成立し、プログラムは一層賑やかになった。この喜ぶべき傾向は、昭和58年のプログラムまでであった。54年以降の入学者から課せられた教育課程表からは、完全に音Ⅲの文字が消され、選択教科の組み合わせの都合で音Ⅱの履習すら難しくなった。そのために59年のプログラムから音Ⅱ、音Ⅲ選択生の文字が完全に消えて今日にいたっている。6年一貫の理想は何であったのか。ゆったりした教育内容の確立やし烈な競争からの解放が目的であったとすれば、54年の高校教育過程の改訂は、音楽教育のたちばでは間違いであった。また進学の観点からも、当該生徒にとって不利は免れない。その対策として、誠に消極的ながら、音楽大進学希望者の補習や、音楽会への出演を特別演奏の形で補った。これは教育過程の再検討なくして解決出来る問題ではない。6年一貫教育を推し進めて、それを音楽会との立場で眺めるとき、このことの改善が特に必要と思われる。ここに昭和53年（音Ⅲ参加）と、昭和62年（音Ⅱ、音Ⅲ共に消滅）のプログラムを表示してこの稿を閉じる。

（昭和53年）

［第１部］…… 中学合唱コンクール

共通曲 …… １年「風になりたい」…… 磯部 俶

２年「タンホイザー行進曲」…… ワーグナー

３年「モルダウ」…… スメタナ

1. 中１Ａ「並 木 道」…… 福田準一

Ｂ「チム チム チェリー」…… シャーマン

Ｃ「思い出のグリーングラス」…… ピート・シーガー

2. 中２Ａ「夢は大空をかける」…… 渡部節保

Ｂ「若木たちよ」…… 〃

Ｃ「嵐」…… 京嶋 信

3. 中３Ａ「ゆかいな音楽家と野菜たち」…… 川口 晃

Ｂ「はばたけひな鳥」…… 稲葉谷猛

Ｃ「星に聞こうよ」…… 渡部節保

［第２部］…… 高校生とクラブ

1. 音Ⅰ選択生

器楽合奏「アルルの女 第２組曲より メヌエット」…… ビゼー

混声合唱「町のかじやに」…… ロシヤ民謡

2. 音Ⅱ選択生

混声合唱「滝 と 私」…… 渡部節保

「雪渓より」…… 角 荘三

3. 音Ⅲ選択生

女声合唱「冬の夜はふけて」…… チャイコフスキー

「川」…… 橋本国彦

独 唱「歌劇“ミトゥラーネ”よりああレンディミ」…… ロッシーニ

「歌劇“ジャンニ・シッキ”よりおお優しきパッピーノ」…… プッチーニ

ピアノ独奏「アベッグ変奏曲 作品１」…… シューマン

4. 中高合唱部

女声合唱「美しく青きドナウ」…… ヨハンシュトラウス

5. 中高器楽部

管 弦 楽「“アルルの女”第一組曲より、メヌエット、カリヨン」…… ビゼー

（昭和62年）

［第１部］…… 中学合唱コンクール

共通曲 …… １年「風になりたい」…… 磯部 俶

２年「風の中で光の中で」…… 岩河三郎

３年「モルダウ」…… スメタナ

1. 中１Ａ「気球に乗ってどこまでも」…… 平良毅州

Ｂ「夢は大空をかける」…… 渡部節保

C「君をいつまでも忘れない」…… 新実徳英

2. 中2A「ムダの歌」…… 京嶋 信

B「翼をください」…… 村井邦彦

C「あの素晴らしい愛をもう一度」…… 加藤和彦

3. 中3A「We are the world」…… L. リッチ

B「My way」…… ルポー・フランソワ

C「アメリカン・フィーリング」…… 小田裕一郎

〔第2部〕…… 高校生と音楽クラブ

1. 音I（高1）

混声合唱「タンホイザー行進曲」…… ワーグナー

「フィンランディア」…… シベリウス

「Swing low sweet Chariot」…… 黒人霊歌

「Deep River」…… 〃

2. 音I（高2）

弦楽合奏「魔弾の射手より序曲」…… ウエーバー

混声合唱「いざたて戦人よ」…… グラナハム

「Aura Lee」…… プールトン

「Heidenröslein」…… ウエルナー

3. 合唱クラブ

女声合唱「さようなら」…… 小田和正

「Yes - Yes - Yes」…… 〃

「あかいサラファン」…… ロシヤ民謡

「流浪の民」…… シューマン

4. 器楽クラブ

オーボエ独奏「オーボエ協奏曲ニ長調 第1楽章」…… J. S. バッハ

管 弦 楽「バレー組曲“白鳥の湖”より」…… チャイコフスキー

1. 情 景

2. ワルツ

5. 全員合唱

オラトリオ“メサイヤ”より「ハレルヤ・コーラス」…… ヘンデル

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

中　学　写　生　会

大谷　泰子　　吉沢　栄敏

1. 経　過

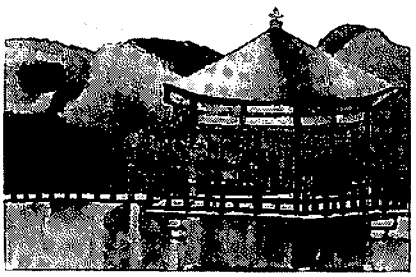
本校が中高一貫教育を始め、学校行事の見直しが行われたのにともなって、中学校での全員写生会が、秋一回もたれるようになった。(当日、高校生は球技大会)

初め、1年生は、県美術展を見学してから、飛火野で、2年生は、興福寺国宝館を見学してから同寺境内で、3年生は、正倉院展を見学してから東大寺三月堂辺で、それぞれ写生をしてきた。しかし数年後、写生の前の見学は、展覧会の時期・混雑・写生時間の不足などの理由からとりやめとした。又、1年生の飛火野での写生は、構図的にとりとめのないものとなりやすいので、その西側の浮御堂辺で行うこととなった。

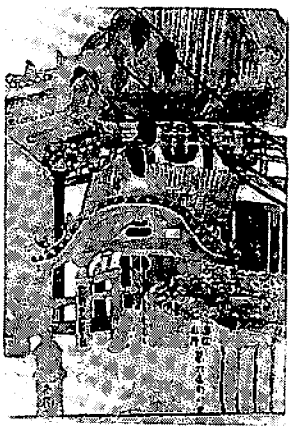
作品は、全員のものをＨＲの後壁・廊下に展示している。近年は、選抜展として各学年の優れた作品を、ロッカールームの廊下側壁に展示している。

写生会については、次頁のようなプリントを配布し、特に1年生には先輩たちの作品例を見せて、こまかな注意をしている。

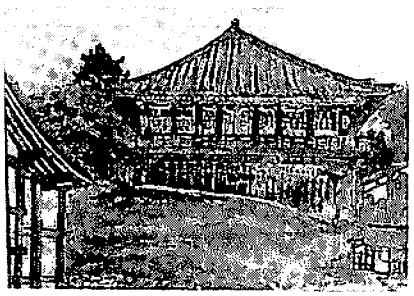
作品例　写真



1年生



3年生



2年生

展示の様子

中 学 生 写 生 会

日 程 ・ 10月　　日（　）
　＊朝　6：55のＮＨＫ天気予報で☂のマークが出たら11月　日になる

　中１　＝　９時、円窓亭の横に集合（浮御堂の北上）――浮御堂辺で写生
　中２　＝　９時、県庁前　公園に集合――興福寺境内で写生
　中３　＝　９時、東大寺南大門の横に集合――三月堂辺で写生
　　ともに午後３時まで

持ち物 ・ 画版（学校のものは貸し出さない）、絵の具、水入れ、クリップ、昼食、水筒、ビニールの敷物、新聞紙、雑巾、このプリント

注 意 ・ 担任の先生から、集合場所などの指示をうける。
　・ 写生地では、騒いだりゴミをだしてはいけない。
　・ 他校生や、観光客のじゃまをしてはいけない。
　・ 昼食は、12時～１時の間にとる。
　・ 午後３時に集合し、絵を集める。仕上がらなかった人は、先生に申し出て、残って描いてもよい。２、３日後には提出すること。

その他 ・ 作品は、採点後全員展示する。
　・ 当日、写生か授業か不明のときは、両方の用意をして、８時30分までに登校する。
　・ 寒い場合、ジャンパー、カーディガンなどを用意する。

＊ 写生する場所を決める時、近景～遠景まで変化のある構図を選ぶこと。
＊ 絵の具は、明るい色を先にぬり、乾いてから重ねぬりをする。
＊ 対象の色をよく見て、絵の具を２、３色混ぜて作ること。
＊ 提出する時は、乾かして、裏へ学年・組・氏名を忘れずに記入すること。

2. 現状と問題点

大変めぐまれた環境が近くにあり、有り難いことであるが、秋の観光シーズンの時期なので、人出と、同一場所での他校（２～３校）との重なりなど、近年とくに問題となってきた。61年度３年生は、急きょ大仏殿裏（講堂跡）で写生することとなった。（それでも他校と重なった）

又、初め寺側には「お願い」ですんでいたのが、近年は細かな注意事項のついた許可証をもらう必要があり、引率教師は腕章の着用が義務づけられるようになった。

生徒側の問題点としては、場所の選定に時間をとったり、おざなりな仕上げの者と、根気よく時間をかける者（後日、又描きに行ったりする者もある）との差が大きくなって来ている。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

学園祭の流れ

生徒指導部学園祭担当　仲　　光雄

Ⅰ．はじめに

行事としての学園祭をみるとき、ここ数年、生徒主導から教師主導へとすっかり様変わりしたように思える。そこらあたりを資料をもとにして示そうというのがこの稿のねらいである。

Ⅱ．年表風に整理してみると……

年度(回)	日数	指導体制								
S 46 (27)	3	生徒課中心	生徒課、施設、視聴覚で委員会をつくる							◦学園紛争期
S 47 (28)	2.5									
S 48 (29)	2									
S 49 (30)	3									◦30回記念祭で盛大
S 50 (31)	3	実行委員会								
S 51 (32)	3	文化部	(吉澤)	招待券制度（半公開）	期間中の出欠確認					◦六年一貫最初の生徒が高一
S 52 (33)	3		(林)							
S 53 (34)	2		(吉澤)			学年毎（中1～高1）に催し物の形式固定				◦共通一次試験はじまる
S 54 (35)	2		(水町)							
S 55 (36)	2		(藤田)							◦家族券も併用（入場者多し）
S 56 (37)	2		(吉岡)				授業時間中の講堂使用禁止			
S 57 (38)	2		(吉岡)					生徒の警備部		◦警備が大きなテーマとなる
S 58 (39)	2		(堀内)						高校生六時半まで特別居残り	◦校舎内スリッパのはじめ
S 59 (40)	2		(堀内)							
S 60 (41)	2		(芳村)							◦生徒間で存廃論議さかん
S 61 (42)	2	生指部	(仲)						特別見回り終了時の	

Ⅲ. 資　料

教官会議録・生徒会室残存資料・学園祭プログラムなどをもとに、各年の学園祭の内容・指導ポイントをひろってみた。

═ 昭和46年（第27回）═

a．この年の特徴的なこと

- この年まで、しばらくの間、形式が固定していた。
- 日程は三日間。
- 教師側は、生徒課２名・施設１名・視聴覚１名に総務２名を加えて、実行委員会を構成していた。
- 事前に教官会議において次のような報告がなされている。二つめはそれに対する教官の要望をまとめたもの。

目　標	全員参加を盛り上げる。
指導留意点	1. 前例を参考とする。 2. 参加団体責任者・発表内容の不明確なものは認めない。 3. 顧問をつける。 4. 中学生のみの模擬店はやらない。 5. 中学有志の参加はしない。 6. 時間・場所・予算については実行委員会で決める。

1. 地道に努力したものがみられないので、工夫・努力をさせるようにしてほしい。
   a．模擬店を少なくし、種類を限定する。
   b．文芸部などの成果を発表する。
   c．カッコさばかりで内容の不十分なものを考えさせる。
   d．金銭的な面でルーズなところがある。
2. 実行委員会まかせなので、生徒全体におりない。顧問・担任から生徒全体におろしてほしい。

b．内容概観

日　程	9月23日(木)・24日(祝)・25日(土) （22日は、午後準備）
（舞台）	中１Ｂ（リア王） 中１Ｃ（ベニスの商人） 中２Ａ（トム・ソーヤの冒険） 中２Ｃ（三年寝太郎） 中３Ａ（ジキル博士とハイド氏） 中３Ｂ（アルトハイデルベルク）

（舞台）	中３Ｃ（不思議の国のアリス） 高一有志（24時53分"塔の下"行は竹早町の駄菓子屋の前で待っている） 全校有志（生きがい） 英語クラブ（新かぐや姫） 器楽クラブ（セロ弾きのゴーシュ） 中学合唱（くるみ割り人形） 演劇クラブ（真夏の夜の夢）

（舞台）	ロック＆フォーク（大ロック集会） 高校合唱 教官劇（ホンヤラ村）
（展示）	中１Ａ（OUR ROOM） 中２Ｂ（リッコちゃんと46人の悪童達） 中新聞部（心境荘園の報告） 地理研（公　害） 鉄道研究会（鉄道模型運転会） 硬庭同好会（硬式テニスについて） 高新聞部（映像と音のスライド） 高写真部（写真展示） 英語クラブ（E.S.S. など） 物理研究会（分子運動の模型） 続かるたをやる会 中学歴研（太平洋戦争） 歴研（沖縄orパリコンミューン） 数学研究会（数研迷路） 放送部と有志（アマチュア無線） 文芸部（シンポジウム） 中学写真部（写真展示） 中学生物部（佐保川の調査） 高３Ａ（おばけ屋敷） 美術部（自然の顔） 高２Ａ（先生の横顔を知る） 高２Ａ（禅道場） 美術科（学校美術展） 書道科（学校書道展）

（展示）		華道部（生花展示） 高２Ｃ（クバト場）　※別項参照
	小劇場	高１Ａ（手品・落語etc） 高２Ａ（月光仮面、笑点） 高２Ｂ（劇・落語） 文芸部新派（前衛劇） 高１Ｃ（ファッションショー） 高３Ｂ（史劇・ナツテレ）
	映画	部落問題研究会（16ミリ） 高２Ｃ（８ミリ） 現代史研究会（16ミリ） ワンゲル（８ミリスライド） 鉄道研究会（８ミリ）
	販売	文芸クラブ 図書クラブ
（模擬店）		高１Ｂ 高２Ｂ 高２Ｃ 高３学年 高校硬式テニス 高校ワンゲル部 高校バスケット部 硬式テニス同好会 家庭科クラブ

※現在とくらべて、発表団体数の多さが目につく。一人３役ぐらいをこなす生徒がいたように思える。

c．そ の 他

この年、生徒の一団体が、「トバク場」を再現するという企画を出した。教官側は、教育の場にふさわしくないとして、中止させている。

＝ 昭和47年度（第28回）＝

a．この年の特徴的なこと

準備の段階で、教官側より次のような方針が示されている。

- 日数……２日におさえる（中身の充実をはかる）
- 企画単位……できるだけ学級単位のものに
- 模擬店……できるだけ減らす

いずれも努力目標として示しただけで、この年には実行されなかった。

b．内容概観

日　程	9月21日(木)・22日(金)・23日(土) (21日11時まで準備)
(舞台)	中1B（レ・ミゼラブル） 中1C（ベニスの商人） 中2B（浦島太郎） 中2C（ルパン対ホームズ） 中3B（マッチ売りの少女） 中3C（狂　言） 高1B（リンカーン） 高1C（かぐや姫） 中学合唱クラブ 高校合唱クラブ 中高演劇部（夜雨） 英語クラブ（レ・ミゼラブル） 器楽クラブ（合奏） ロック＆フォーク同好会 有志劇（あやせ川） 有志劇（さなだふううんろく）
(展示)	中1A（公害屋敷） 中2A（お化け屋敷） 高1A（神　社） 高2B（よみせ） 高校化学部（電気化学・公害） 中高美術部（作品展示） 華道部（生け花展示・講習会） 高校写真部（写真展示） 中学化学部（イオン・メッキ） 中学地理研（民族の遺産の保存）

(展示)	中学生物部（水中・プランクトン） 放送部（アマチュア無線公開） 中学新聞部（取材報告） 中学写真部（奈良の仏像） 部落研（過去帳調べ） 高校生物部（水の中の生態系） ユース同好会（ユース同好会の紹介） 聖書研究会（講演会） 学校美術展 学校書道展
小劇場	中3A 高2A
映画	ワンゲル ロック＆フォーク同好会 有志 高3 有志
(模擬店)	高1A 高2B 高3 高2有志・2団体 ワンゲル部 硬式テニス同好会 高校軟庭テニス部 家庭クラブ
生徒スタッフ	中井康之・清水緑・安藤利典ら

＝昭和48年度（第29回）＝

a．この年の特徴的なこと

- 日程が大幅に縮小され、いわゆる「2日」となった。前日は午前中のみ授業で、午後は準備と開会式をおこなった。（昭和53年以降現在まで続いている形）
- 生徒の諸係は中高別に決められ、委員長も中・高一人ずついた。この年高校委員長は、清水緑（S2B）・中学委員長は植田○○（J3B）だった。（記録に乏しいが、この頃はずっと委

員長二人制であったと思われる。)

b．内容概観

日　程	9月22日(土)・23日(日) 21日は4限授業で、午後準備と開会式。
アーチ	ラッパを吹いている兵隊さん2人
(舞台)	中1A（謎の隣町） 中1C（第三の銃弾） 中2A（八十八話し） 中2C（竹取物語） 中3A（番町皿屋敷） 中3B（オズの魔法使い） 中3C（サンダカン八番娼館） 中学合唱部（合唱劇） 高一A（淀　君） 高一B（ラ・マンチャの男） 高一C（セビリアの理髪師） 高三A（裸の王様） 高校合唱部 演劇部（女鳥王） 高二有志（浦上哀話） 高二有志（ロック） 中高器楽部 E.S.S.（クリスマス・キャロル）
(展示)	中1B（工作展示） 中2B（おばけ屋敷） 中学化学部（クロマトグラフィー） 中学写真部 中学生物部 地理研 放送部 新聞部

(展示)	高校写真部 高校歴史研究部（ベトナム史） 高校生物部 高校古美術部（奈良の古寺の紹介） 高校化学部 高校放送部 高校鉄研部 中高美術部 中高華道部 学校美術展 学校書道展
(小劇場)	高二B 高三有志（　劇　） 高三有志（映　画） 高三有志（コンサート） 落語研 ロック&フォーク 高三B（原始共産社会）
(模擬店)	高二A 高二C 高三C 高一有志 高二有志 バドミントン部 軟式テニス部 ワンゲル部 文芸部 家庭クラブ
生徒スタッフ	清水　岡田

＝昭和49年度（第30回）＝

a．この年の特徴的なこと

◦30回記念として、前年の「2日」から「3日」になった。この年は、発表団体数も多く、発表

内容も充実していたようである。（このあと4年間、「3日」が続いた。）

◦教官有志による展示もおこなわれた。「戦争と青春」と名づけられ、かなり意欲的な取り組みであった。内容は、戦争を知らない世代に戦争を伝えようとするものであった。

b．内容概観

日　程	9月20日(金)・21日(土)・22日(日) 前日の19日(木)は、午前中40分授業・午後準備と開会式
（舞台）	中1C（わらしべ長者） 中2A（シンデレラ） 中2B（ロミオとジュリエット） 中2C（ベニスの商人） 中3A（ピノキオ） 中3B（西遊記） 中3C（杜子春） 高一A（白雪姫） 高一B（華麗なる変身） 高一C（ロミオとジュリエット） 高二B（ウエストサイド物語） 中高合唱 （ヘンデル　オラトリオ「メサイア」） 中高器楽（シング） 英語部（シンデレラ姫） 演劇部（「サロメ」大悲劇） 軽音同好会 （フォーク・ロック演奏） サウスタウンB・B （ブルース・ロック演奏） 「手古奈」オペラ団 （オペラ「手古奈」）
（展示） 小劇場	中1A（お化け屋敷） 中1B（私達の空想する未来） 高2A（お化け屋敷） 高3B（穴ぐら） 中学新聞部（アンケート発表） 中学生物部 中学写真部 中学地理研 中高放送部（無線公開実験ほか） 中高美術部 中学歴研 （奈良の歴史を別方向から） 中学化学部 高校化学部 高校新聞部（輪転機のある庭） 高校生物部 高校写真部 高校歴研（高松塚古墳の謎をとく） 軽音同好会 落語研究会 名曲愛好会（レコード・コンサート） サウスタンB・B 高二有志（ミュージカル） 高文芸部（劇・堕天使） 高二C（映画） ワンゲル（映画） 華道部 実行委員会展示（学園祭の歴史） 教官展示（戦争と青春）
（模擬店）	高3A 高3C 実行委 高2有志・5団体 高1有志　　器楽部 ワンゲル　　高敬式テニス バレー部　　バドミントン 家庭科クラブ
生徒スタッフ	細岡秀嗣（生徒会長）　吉村烈

═ 昭和50年度（第31回）═

a．この年の特徴的なこと

◦従来の完全公開から、入場予定者に招待券を配布する半公開に変わった。

詳細　招待券は父兄、友人を対象とする。

生徒１人当り５枚を配布する。

１枚で４人入場できる。

卒業生・学校関係者は入口で氏名などを記帳させる。

第31回　学園祭 招待券	9月21日	9月20日	9月19日
奈良女子大附属中学校・高等学校（市内循環寺町下車すぐ）1975／9月19日(金) → 9月21日(日)	A.M 9:00 ～ P.M 6:00 入場券	A.M 9:00 ～ P.M 5:00 入場券	A.M 9:00 ～ P.M 5:00 入場券
※当券一枚で計4名入場出来ます。			

◦プログラムに記された公示

> 第31回学園祭は、一般に公開することによって起こるさまざまなトラブルに対処するため、過去30回になく、招待状を持っている人だけが入場できるという、招待状制の公開方法をとっておりますので、ご了承下さい。

上に示された「さまざまなトラブル」とは、次のようなものと予想される。

① 近隣の幼児・小学生らが、多く入場し、展示場などで騒ぐ（前年のお化け屋敷がその例）。

② 地域の中学生らが、校内で暴力をふるい、生徒に被害者も出た。

③ 県下の高校の文化祭が非公開の方向にある。

b．内容概観

日　程	９月19日(金)・20日(土)・21日(日) 18日は午前中授業・午後準備
アーチ	トムとジェリー
（舞台）	中１Ａ（宝島） 中２Ａ（青い鳥） 中２Ｂ（高見の見物） 中２Ｃ（王子とこじき） 中３Ａ（クリスマス・キャロル） 中３Ｃ（地底探険）

（舞台）	高１Ａ（長靴をはいた雄猫） 高１Ｂ（オズの魔法使い） 高１Ｃ（金色夜叉） 高２Ｃ （「トミー」～ロック・オペラ～） 高合唱 （「ヘンデル＆グレーテル」～オペラ～） 中高器楽（「運命」他４曲） 中高E.S.S.（オリジナル劇） 中高演劇（陽気な地獄破り） 軽音同好会（フォーク・ロックの演奏）

（展示）	中１Ｂ（「建築物」模型） 中１Ｃ（お化け屋敷） 中生物 （ショウジョウバエ・淡水魚の観察） 中地理研 （柳生・竹内の街道・写真・模型） 中高放送（放送の歴史・アマチュア無線・電子回路 etc） 中歴研 （古墳・埋葬儀礼・ピラミッド） 高生物（クスサンの研究・他） 中高写真（展示） 高歴研 （島原の乱・西洋の哲学について） 中高華道 （生花の展示・生け方について） 中化学（イオンについての研究・実験記録映画の上映） 中高美術（絵・石こう像・ポスター） 高化学（合成樹脂のつくり方や作品展示・実験実演）

（展示）	高鉄道研究会 （鉄道模型運転・鉄道写真展示） 有志地理研 （奈良県南部についての問題） 学校美術展（生徒の絵 etc）
（模擬店）	ワンゲル部 軟　庭 高バスケ 高２有志・６団体 家庭クラブ有志 高３Ａ 高３Ｂ 高バド 高２Ｂ
生　徒 スタッフ	

＝昭和51年度（第32回）＝

a．この年の特徴的なこと

◦招待券制の二年めである。

詳細　１枚で一人入場できる券を、生徒一人あたり３枚配布する。
追加は、理由付申込書をつけさせ、３枚までみとめる。
招待券の裏へ配布生徒の「学年・クラス・氏名」を記す。
卒業生・父兄は確認さえできれば、券なしで入場。
６才以下の子供は、保護者同伴であれば券なしで入場。

◦学園祭の期間中、生徒の出席確認をするのがこの年より始まる。各クラス担任が、指定した場所で、朝９時までに、出欠をとることが会議で決められ、実行された。
（この年以前は、学園祭期間中の出欠確認はなされなかった。）
この年以降ずっとこの件は実行されている。

◦この年より、文化部が中心になって学園祭を指導する体制ができる。

b．内容概観

日　程	9月21日(日)・22日(月)・23日(火)
アーチ	キングコング
（舞台）	中２Ａ（西遊記） 中２Ｃ（アリババと４人の盗賊） 中３Ａ　マクベス 中３Ｂ　おきに召すまま　シェイクスピアフェアー 中３Ｃ　ベニスの商人 高１Ａ（不思議の国のアリス） 高１Ｂ（なりそこない王子） 高２Ａ（船乗りクプクプの冒険） 高２Ｂ（清水の次郎長） 高２Ｃ（嗚呼！花の新撰組） 高３有志（ジュリアス・シーザー） 中学合唱同好会・高校合唱部 中高E.S.S.（メアリー・ポピンズ） 演劇部（女の平和） 中高器楽部（ベートーヴェンetc） 軽音同好会
（展示）	中１Ａ（食品公害） 中１Ｂ（マンガ研究） 中１Ｃ（太平洋戦争） 中学写真部 中学生物部 中学美術部 （油絵・モザイク・焼物） 中学化学部

（展示）	放送部 高校写真部 高校生物部 高校化学部 高校鉄道研究会 高校歴史研究会 高校部落研究会 高校有志地理部 中２Ｂ（小劇場） 高１Ｃ（映画「ジキルとハイド」） 中・高華道部（展示＋模擬店） 高校美術部 高１・高２有志（フォーク） マンガイラスト 学校書道展 学校美術展
（模擬店）	高１有志・１団体 高２有志・２団体 高３有志・１団体 高３Ａ・Ｂ・Ｃ 高校美術部 高校バドミントン部 家庭クラブ 華道部 ワンゲル部
生徒スタッフ	陳憲一、中野順、毛利洋子

c．教官側の総括

文化部から、詳細なアンケート総括が提出された。

学園祭についての反省

文化部

1. 時期・期間など
   - 教官は圧倒的に「２日」が多かった。
   - 生徒は「現行どおり」、「３日」の頃。
   - 実施状況・時期は「今のままでよい」ということ。

2. 後始末（学園祭後の）

○全般的にはまずまずというところ。

・教官の側からは「何度も注意してようやく」という指摘もあった。

・調理室の使用状態良くない。（あと片付けに10日程かかる）

・ＨＲを使用した団体が、壁の掲示物などを勝手にはずしてもとにもどしていない。

3. 事前の準備（進行状況・もりあがり・使用した箇所の整頓状況など）

○進行状況

・全くといっていい程、計画どおりすすまなかった。最後には責任のなすり合い。
全然やる気がなく、すぐあそびの方へ行く。

・全員がセリフをおぼえたのは発表の前日。

・大幅におくれた。大道具は未完成のまま発表。

・アーチ部や野外部に無関心派がいて進まなかった。

・舞台部・野外部・装飾部・クラブなどの主力の者が多く、学級に集中できない。（Ｓ２）

・まず計画どおり進んだ。（中学の一部のクラス）

○団体内でのもりあがり

・全体にだらだらしてシラケた。

・盛りあがりがおそかった。（もりあがりが少なかった）

・本番になるまでほとんどのものがヤル気なし。

・やる気のある者はいくつもかけもち→人がそろわない。（特にＳ２）

・本番10日ぐらい前から、すごくもりあがった。
・本番５日　〃　〃　（先生がハッパ）
・すごくもりあがった。
} 全部中学。

○使用箇所の整頓

・教務室が乱雑になった。（総務部）

・講堂を使ったが掃除などしなかった。

・夏休みから学園祭初日までＨＲはゴミ箱同然、非常に使い方が悪い。

4. 全体の反省

○教　室

・クラブ単位またはクラス単位のどちらかにしてほしい。
（一人の生徒が何役も兼ねていてどれもが満足にできない）

・ほとんど何にもタッチしていない生徒がたくさんいる。

・地味な研究発表に人気なし。部員を落担させる。

・模擬店が目立ち、地味な発表がかくされる。模擬店を制限すべし。

・模擬店の装飾が凝りすぎ。品目の多さも問題。

・日程に日曜・祭日は入れるな。平日にやる方がよい。

・最終日のファイヤーストームは全員７時まで残るのは暗くなって危険。
６時半には終らせよ。

・日程を２日にせよ。劇を学年に１つぐらいに制限すればそんなに日をとらなくてもよい。

・クラス単位に制限せよ。クラブ・同好会には別に発表の機会を与えればよい。

・高２が他のところに手をとられて集まりが悪く、準備の段階で能率の悪さが目立った。
全体でとり組めるようなしくみが考えられないものか。

・休日登校の禁止を徹底すべし。

・１人の生徒が１つに集中できるシステムを考える要あり。

・教科の用具を無断で持ち出し、返品しないものがある。

・従来の学園祭準備よりは授業と練習とのケジメがついてきた。

・例年どおり準備不足が目立つ。

・生徒はほんとうに学園祭をやりたいのかどうか疑わしい。

・文化クラブの低調さが目立つが、展示だけの日を設けたらどうか。
・とくに舞台発表では力量以上のものをしようとするから、返ってセリフをおぼえきれなかったり、責任の転嫁をしたりするのだ。

◦生　徒

・ファイヤーの時はみんながバラバラ（特に高3・アーチ部員に勝手な行動あり）。
・ファイヤーはもっと野外部がリードすべきだ。みんなが楽しむはずのファイヤーストームが一部の人のものだけになっていた。
・何役も兼ねたので機械的に動かざるを得ず、今年の学園祭は何をやったのかわからなかった。
・舞台発表が多すぎる。全員参加がタテマエだが、準備段階ではいっこうに盛り上がっていない。
・いそがしい生徒とひまな生徒との差を少しでもちぢめるのが今後のポイント。
・もりあがりなく、ずるずる進行した感じ。
・これほど悔いの残る学園祭はなかった。
・学園祭に対して全く無関心な人が多い。運営委員と一般生徒との連絡不十分な点が多かった。

＝昭和52年度（第33回）＝

a．この年の特徴的なこと

◦教官側から、日程2日・舞台発表数をへらす・展示に力を入れるようにという提案がなされた。中心となった教官が会議に提案したものの要旨を次に示す。

1. 学園祭日程に関しては、例年のダラダラしているという反省から、教官の方としては、2日間に押さえたい。
2. そのために舞台に集中せず、展示に力を入れる。
3. 講堂の分を、小劇場、野外ステージへ出来るだけまわす。
4. 展示の充実のため、パネル、幕など毎年使用できる備品として、今年（半分でも）教室部を中心として制作、準備する。（費用は、15万円位の"もうけ"の内から、まわす――前借り可能）
5. 展示教室について、同教室での入替は大変なので、例えば、一日目・一階、二日目・二階とかとして、展示準備に時間をとり、しっかりとした展示をさせること。
6. 野外ステージでは、大きな建築用などのテントを借りられるとよい。裏、左右も幕でかこめるとよい。
7. 講堂について
   学校として、アンプ、スピーカーの修理と、つりマイクをつける、ドンチョウ、つり金具などの安全点検。

◦結局、この年は上の提案が実行されず、前年の形式をひきついだ。
（舞台発表希望団体が多く（18団体）、生徒大会が2日半を決議し、従来通りの日程でおこなわれた。）

b．内容概観

日　程	9月21日(水)・22日(木)・23日(金) 20日6限授業。その後、机・いす移動。21日午前準備。
アーチ	スヌーピー
（舞台）	中1A（長靴をはいた猫） 中1B（金太郎） 中1C（金のガチョウ） 中2A（二人のロッテ） 中2B（白雪姫） 中2C（夕　鶴） 中3A（十五少年漂流記） 中3B（オリエント急行殺人事件） 中3C（坊っちゃん） 高1A（裸の王様） 高1B（オセロー） 高1C（11匹のネコ） 高2A（新・荒野の七人） 高2B（カリギュラ） 合唱部（アンデルセン組曲） 演劇部（奇跡の人） 器楽部（ベートーヴェンNo.2）
（展示）	中学写真部 中学美術部 中学化学部 中学生物部 高校写真部 高校美術部 中高放送部 部落研究会（映画「破戒」） 中高天文同好会 華道部 高2C（映画「傷だらけの天使」） 軽音同好会　I（ロック） 軽音同好会　II（フォーク） 高2・高3有志 （レコード・コンサート） 学校書道展
（模擬店）	高1有志・1団体 高2有志・3団体 高3C有志 高3A 高3B 高3有志 家庭クラブ有志 高校美術部 高校軟庭部 高校ワンゲル部 高校バドミントン部 英語クラブ
生徒スタッフ	平野哲男・野崎元晴・油谷行泰

＝昭和53年度（第34回）＝

a．この年の特徴的なこと

∘前年の2日半の日程を2日にした。

（前日は土曜日で、その午後に準備と前夜祭をおこなっている。）

∘発表団体がおこなう催し物の内容を規定した。

中学1年	教室発表	各クラス単位
中学2年	舞台発表	
中学3年	教室発表	
高校一年	舞台発表	

高校二年　　内容規定せず
高校三年　　内容規定せず　}学年内グループ単位（一人１団体に限る）

（この年、高三はクラス単位で、３クラスとも模擬店をやっている。）

- 舞台重視から教室発表重視への転換がみられる。
- 高二において、いわゆる「学年内有志」の形がはじめて試みられた。
- 「クラブ・同好会の発表は、日頃の活動の発表に限る」と決め、クラブ・同好会による模擬店発表をなくした。
- 記録から見る限り、上記の改革は教師側の主導によるものと予想される。
- この年の、日程・参加様式・催し内容の規定などの多くを、現在そのまま引き継いでいる。この年の改革は大きな意味を持つ。

b．内容概観

日　程	9月17日(日)・18日(月) 16日(土)の午後準備・前夜祭
テーマ	めざめよ！暗闇に眠る獅子よ
アーチ	レ　オ
（舞台）	中２Ａ（リヤ王） 中２Ｂ（ベニスの商人） 中２Ｃ（ロミオとジュリエット） 高１Ａ（はいからさんが通る） 高１Ｂ（はだかの王様） 高１Ｃ（かぐや姫） 高２有志（額田王） 中高器楽部（田園交響曲） 中高合唱部（ソウルフィルハーモニー） 高校演劇部（サロメ） 軽音同好会（軽音楽の生演奏） ＰＴＡコーラス
（展示）	中１Ａ（宇宙とＳＦ） 中１Ｂ（現在・過去・未来） 中１Ｃ（人形劇・ゲームセンター） 中３Ａ（大正時代の復元） 中３Ｂ（江戸時代の見世物） 中３Ｃ（迷路・不思議の国のアリス） 高２映画班（転） 高２人形劇班（人形劇） 中学美術部（油絵・モザイク・やき物）

（展示）	高校美術部（油絵・彫塑） 中高放送部（エレクトロニクス工作） 中高化学部 中高生物部（池中生物の研究） 中高写真部 地学同好会 （天文・気象・岩石の研究） 昆虫同好会（フン虫の生態研究） 学校書道展・学校美術展 ＰＴＡ展示
（模擬店）	高３Ａ 高３Ｂ 高３Ｃ 高２有志・４団体 バザー 家庭クラブ
野外部の催し物	①前夜祭・仮装行列 ②盆おどり ③ファイヤー・フォークダンス ④野外ステージ
生徒スタッフ	福井敬治・熊野佐和子・川島昭彦 秋岡晴子・山崎比奈子・末広一彦 足立誠ら
ポイント	参加形式・催し物などに、大きな変化がみられる。前夜祭もこの年から。テーマもこの年から。

c．教官側の総括

学園祭後、教官会議に提出された総括をそのまま次に示す。

――模擬店部――

① 準備段階で

模擬店の数も制限して少なくなり、試作も学校では最少限に行ったので、管理上よかったと思う。

② 期間中

特に安全と事故（電気などの故障）のないように注意しておいたので、概して無事でよかった。ただ1人の指のけが（少々大きい）が残念であった。食堂その他の装飾もまずまず上出来。

③ 後始末と次回への提言

毎年のことながら、汚れおよび、備品の破損は幾分あるが、模擬店の数が少なかっただけに、忘れものも少なく、後始末も再三の注意で、やっと1週間ぶりに終わった感。後始末（手入れ）の処を、それぞれの団体に責任をもたせたのはよかった。生徒がやった後、もう一度、大掃除、整理はいつもの事ながら必要で、これなくして授業は出来ない状態である。模擬店の数は、以後、この程度にしぼってほしい。高3全体（3学級）で利益が相当あった由（15～16万ほど）。

――野外部――

① 準備段階で

生徒の部員との打ち合わせが不十分。

② 期間中

部員の掌握が十分にできず、仕事の段取りができなかった。

③ 後始末と次回への提言

生徒側…男子生徒が女子生徒に比べて少なかったと思う。教師の責任と任務を明確にする。

――ＰＴＡ展示部――

① 準備段階で

呼びかけなども大変だったが、出品点数の掌握が、間際まで出来ず困った。

② 期間中

係の2人がクラブ出張で、展示場の番が教官に依頼するしかなかった。

③ 後始末と次回への提言

来年度も展示をやるなら、ＰＴＡ役員の方で当日の番など、やってもらった方がよいのではないか。ただ、今回より、作品点数が余り多くなると、展示場の問題が出てくるので、呼びかけも程々にしないといけないのではないか。搬出の点でもう少し早くお願いした方がよかった。校長室に長らく、置かせてもらったのが気になる。

――舞台部――

① 準備段階で

殆ど生徒まかせであったが、前日の掃除、準備が大変。特に本年は講堂利用団体が少ないので、準備人数が非常に少なかった。

③ 後始末と次回への提言

∘大体良く出来たと思う。（当日中に手早く完了）

∘当日の会場整理が必要（出入が多くさわがしい。飲食物を持ち込む者が多い。）

∘進行・案内を校内に放送してはどうか。（時間のズレ等の為、出入りが多く余計に騒がしかった）

――アーチ部――

① 準備段階で

7月の初めにデザインが出来たが、本格的に制作に入ったのが、8月であった。高1の末広君（責任者）を中心に有志の協力もあって、ほぼ順調に仕上がったようである。ただ男子が少なかったので、長期の力仕事が多いだけに、大変であったと思う。

③ 後始末と次回への提言

∘本年度の予算が、9.2万円で、年々増えているようである。安くついて、しかもシンボル的なアー

チが出来ないか。
◦屋外での製作になるので、雨のときの対策。
◦安全面、大きなキャタツ・ドリル・ガス。
――視聴覚係――
① 準備段階で
講堂舞台部で放送機の扱いに慣れた生徒が居ないのは不都合。視聴覚器機の使用希望ではスクリーン・拡声器（アップ）・長いコード・8ミリ映写機・マイクロホン等が多い。
本年は、野外部はアンプを業者から借りた様であった。（来年も、この形でゆくのだろうか。）
② 期間中
初日、放送機が故障、スズキ教材に応急修理を依頼した。
舞台部で講堂の清掃を行うが、昨年同様、人数が少ない。
高2の川島等の2、3人の運営で、前日夕刻には、疲れ切った様子であった。
③ 後始末と次回への提言
◦前日の清掃…舞台発表以外の展示団体等が講堂前で作業し、そのままに放置。指導あるべし。
◦一日目の講堂内…食い物を持って入らぬ事になっていたが、昨年ほどではなかったが、相当のゴミであった。その清掃も舞台部の少人数でした。……これも改善すべきこと。
◦施設関係…①講堂の排水孔を作ること。②舞台前照灯電源を改善しておくこと。③放送機を改良しておくこと。④長い電源コードを購入すること。⑤移動できるアンプを購入すること。
――装飾美化部――
① 準備段階で
有志10人では、大変だったようだ。例年は、ゴミ箱作りは、生活部員に作らせていたが、徹底しないので、今年は、有志でこれも作り、全部揃った形のものでよかった。
② 期間中
装飾するのに人手不足の感。責任者に重荷がかかっていた様だった。ゴミ箱管理は生活部員であったが、責任をもってやっていた様だ。模擬店部のゴミは、それぞれで責任をもたせていたが、総じて良好。便所の使用状態も、例年に比べて良好。1日目の終了後に、こちらで掃除したが、生徒に、ペーパーだけでも入れさせるべきだった。（朝のトイレ掃除はよくないし、夕方では、生徒を使いにくい。）
③ 後始末と次回への提言
装飾・美化は有志のため人数不足で、装飾する時、とる時は、やはり大変だったようだ。予算を下回る安価な良い装飾が出来、なかなか良かったと思う。（3万→2万）
今年の要領で（各模擬店で責任をもつ）、さらに、展示催場は（廊下をふくむ）、その周辺の掃除を徹底させたい。
――中1指導部――
① 準備段階で
◦指導部の生徒がよく指導してくれた。
◦夏休み中の計画が、生徒がそろわなかったりで、不十分にしか出来なかった。
② 期間中
見学者が何人入るかばかり熱中していないで、展示物などの解説などをしたらよかったと思う。
③ 後始末と次回への提言
展示パネルがほしい。
――高2から――
① 準備段階で
班構成の際に最初に予定していた、いくつかの班に属せない少人数のグループが出来てしまった。クラス単位でないので、担任としての指導が、行き届かない点はあったと思う。
（高2であり殆ど自分達でやっているので特に問題になることもない）

② 期間中

クラス単位よりも、出しものが多いので、何もしないで遊んでいる生徒は少なかった様だ。

③ 後始末と次回への提言

特に問題になる程のことはない。

担任として、クラス毎の指導をするという点では、やりにくい。

── 教室発表部 ──

① 準備段階で

中３の展示は学年指定が、はじめてあったため、納得するまでに時間がかかった。しかし、決定ののちは、かなり熱心にとりくんだと思う。但し水泳訓練とかさなり、７月中はとても、忙しかった。中１についても、熱心であったが、何をやるかの討議の期間を十分に保障すべきであろう。

② 期間中

ＰＴＡ展示・高１フィールドワークの発表は、内容が充実していた。

各クラス・クラブの発表の教室清掃も、昨年よりも良かったと思う。展示・発表の場所が決まれば清掃の分担をはっきりさせたいものである。

③ 後始末と次回への提言

後始末は全体として、良好だったのではないか。

中３、中１とも展示内容がもっとよく討議され、クラスの盛り上がりがあるようにしたいものである。これはという展示がみられなかったのは残念である。ただ、来年度は、やや期待できるのではないか。

── その他 ──

- 外部から借りた物品の学校としての掌握・御礼については後で礼状を出している。
- 模擬店の純益が多すぎるのではないか── 見通しがたてにくい。
- ファイヤーの時のやけどが多かった。(6人) ── 子供の参加が少なかったのは、健康部としては助かった。
- 学校書道展の展示が大変。
- 展示・舞台発表の学年指定はどうだったか。
  - ２日になったのはよいが、中３で展示はむずかしい。
  - 講堂の使い方には、工夫するべき所があるのではないか。
- 野外部の出し物が低俗。
- 模擬店部で仕入金として10万近い金を家から持ち出して立て替えているのは考えるべき。

═ 昭和54年度（第35回）═

a．この年の特徴的なこと

- ほぼ前年度を踏襲。

b．内容概観

日　程	９月22日(土)・23日(日) 21日は午後準備。
テーマ	翼 ── つばさ ──
アーチ	ペガサス

（舞台）	中２Ａ（ヘンゼルとグレーテル） 中２Ｂ（白雪姫） 中２Ｃ（オズの魔法使い） 高１Ａ（忠臣蔵） 高１Ｂ（せむしの子馬） 高１Ｃ（シラノ・ド・ベルジュラック） 高２有志（父帰る）

（舞台）	高３有志（曽根崎心中） 演劇部（真夏の夜の夢） 合唱部（組曲くるみ割り人形） 軽音同好会 器楽部（メサイヤ序曲／ヴァイオリン協奏曲／未完成交響曲）
（展示）	中１Ａ（自動販売機） 中１Ｂ（世界から見た日本） 中１Ｃ（生活の知恵） 中３Ａ（幻　想） 中３Ｂ（世界のくにぐにと未来都市） 中３Ｃ（天国と地獄） 高２有志（映　画） 〃　（アニメーション） 昆虫同好会 地学同好会 中・高美術部展

（展示）	天文同好会（写真・展示 etc） 生物部（ピラミッドパワーを探る） 化学部（金属イオンの分析 etc） 中高放送部（映画の世界） 学校書道展 華道部 写真部 学校美術展 ＰＴＡ（ＰＴＡ作品展） 高２（フィールドワーク） 中２（昆虫採集）
（模擬店）	高２有志・４団体 高３有志・５団体 家庭クラブバザー 運営委員会・バザー
生徒スタッフ	油谷行泰・上山徹男・松田咲恵 中村竜也

c．教官側の反省

- 演奏の音（主に野外ステージ）で、近所が迷惑である。
- 模擬店は、準備の段階で顧問の指導を強めるべきだ。
- 学校備品を勝手に使っているのは問題。
- 解散後の一部の高校生の態度に目にあまるものがあった。

＝ 昭和55年度（第36回）＝

a．この年の特徴的なこと

- 入場方式について、「家族券」を発行。別に「招待券」は生徒一人あたり10枚（一枚につき１人入場の券）

b．内容概観

日　程	９月20日(土)・21日(日) 19日は午前中授業・午後準備。
テーマ	無限軌道 ― PEDRAIL ―
アーチ	恐　竜

（舞台）	中２Ａ（ハムレット） 中２Ｂ（王様の耳はろばの耳） 中２Ｃ（ロミオとジュリエット） 高１Ａ（新撰組） 高１Ｂ（そして誰もいなくなった） 高１Ｃ（ジュリアス・シーザー）

（舞台）	高２有志（モンテ・クリスト伯） 高３有志（器　楽） 中高器楽部 合唱部 演劇部（若草物語） 軽音同好会
（展示）	中１Ａ（祭　り） 中１Ｂ（市内循環） 中１Ｃ（食生活の移り変わり） 中３Ａ（遊　び） 中３Ｂ（原　爆） 中３Ｃ（ミステリー・ハウス） 高二有志（原始時代の生活を復元） 〃　（オリジナル映画） 〃　（寄　席） 〃　（VTR. 赤毛のアン） 高三有志（オリジナル映画） 美術部 生物部 化学部 放送部

（展示）	写真部 華道部 天文同好会 昆虫同好会 バザー 学校美術展 学校書道展 ＰＴＡ展示 フィールドワーク 中２昆虫採集展
（模擬店）	高二有志・２団体 高三有志・４団体 野外部 家庭クラブ
生　徒 スタッフ	浅井康一・熊木主典・植田致知ら
ポイント	高二有志の「原始人集団」が銅鐸作り・竪穴式住宅作り（正門横）をおこない、催し物の目玉となった。

c．教官側の総括

- 招待券が乱発されているように思える。
- 高二の生徒（特に、アーチ部・原始人集団の者）の中に、準備の為、欠席・欠課をしたものがいた。授業をちゃんとうけさせるべきだ。
- 休講をねだるのも不都合だ。授業を欠かないことを確認する。
- 高二有志「原始人集団」のごとく、経済的にまた対外的交渉において生徒の能力を超えるものがあったが、企画に無理があったのではないか。
- 用具・工具などは生徒会の備品として購入すべきだ。
- 野外部の花火は多すぎた。事故も心配だ。

＝ 昭和56年度（第37回）＝

a．この年の特徴的なこと

- 前年度は「招待券」と「家族券」が併用されたが、そのため入場者数が多くなったと教官側から批判があり、この年は前々年度の形にもどった。
- 前年度、準備期間中に休講をねだること、授業をぬけて学園祭の準備をすることが教官会議で問題視され、この年は、「準備のために授業を休講にしない。授業にきっちり出させる。」ことが申しあわされた。そして、自習時の講堂使用を禁止する、非常勤講師の方にもその旨伝える

こと、が決められている。

b．内容概観

日　程	9月22日(　)・23日(　)
テーマ	On a Faded Violet （しおれたすみれに）
アーチ	わからない
（舞台）	中２Ａ（誰も知らない） 中２Ｂ（森は生きている） 中２Ｃ（オズの魔法使い） 高１Ａ（アルト＝ハイデルベルク） 高１Ｂ（額田女王） 高１Ｃ（坊っちゃん） 高二有志（洛神の賦） 高三有志（ああ、野麦峠） 演劇部（マリー＝アントワネット） 中高器楽部 合唱部 軽音同好会
（展示）	中１Ａ（ノストラダムスの大予言） 中１Ｂ（戦争中のくらし） 中１Ｃ（人間の体） 中３Ａ（お化けセンター） 中３Ｂ（核兵器） 中３Ｃ（エネルギーについて）

（展示）	高二有志（人形劇） 〃　（８ミリ映画） 化学部 写真部（作品発表） 放送部（ハム・QSL） 華道部 美術部 生物部 昆虫同好会（昆虫天国パート４） ＰＴＡ展示 高二フィールドワーク バザー 学校書道展 昆虫採集展
（模擬店）	高二有志・３団体 高三有志・４団体 野外部 家庭科クラブ
生徒スタッフ	藤本京利・中野宏明・山脇淳子ら

c．教師側の総括

(1) いろいろな点で再検討すべきだという意見が出ている。

- 警備の教官の負担が大きい ── 生徒にもっと警備のしんどさを考えさせるべきだ。
- 非公開にすべき（招待券を出さないということ）
- 生徒が組織的に動かぬ。
- 前夜祭を全員参加にすべきか？
- 野外ステージでの騒音問題。
- アーチの生徒が日曜・祭日にも登校した。
- 準備のため、校内に泊った者がいた。
- 学園祭の為なら何をやってもいいという雰囲気がある。
- 学園祭が終わった後の、生徒の状態が問題である。

◦総括して、生徒に考えさせる必要がある。

◦学園祭をやめてもよい。生徒から本当に要求があった時に考えたらどうか。

(2) この年あたり、他の年に比して、いろいろな問題が頻出した。学園祭廃止が教師の中で言われだしたのもこの頃からであろう。

═ 昭和57年度（第38回）═

a．この年の特徴的なこと

◦前年度末の３月の教官会議で、次のような論議がなされ、教官側の積極的な取り組みが早い時期からなされた。

- 生徒の自主性だけでは運営がむつかしくなってきたので、教師の方で早い時期から各係なども決めて態勢をつくる。教師の指導を強めていく。
- 日程についても考慮の必要あり。
- 警備のあり方を考えよう。
- 内容（展示など）についても工夫がいる。
- 日頃の成果の発表、講演会も考えたらどうか。
- 運営委員会（文化部、生徒会係、中心になる学年担任、より各一名）をつくり、教師側の早い取り組みをはかる。……この項、会議決定事項。

◦この年、学園祭当日の警備ということが大きな話題となっている。
生徒の中の「警備員」が、教官の「警備係」とともに活躍した。
資料によれば次の如し。

a．生徒の警備員……３～５名を１グループとして、受付・管理棟屋上・校内巡視の３グループ１時間交替で、トランシーバーを利用し、本部の生徒指導部室と連絡を取り合う。

b．対外関係

① 春日校区補導委員　　22日・23日巡視してくれる。
　奈良市補導センター　　22日巡視してくれる。

② 都南中・春日中の生指部長に依頼し、トラブルがあれば連絡し応援をしてもらう。

③ 警察　防犯課の課長・係長が応援了承。「少年の非行」の展示を見学かたがた、22日に巡視。又、高畑駐在所が校内付近の巡視・見まわりを了解。

b．内容概観

日　程	９月22日（水）・23日（木） 21日は午前中授業・午後準備。
テーマ	Ready to fly
アーチ	（抽象的なデザイン）
（舞台）	中２Ａ（芥子の天人）

（舞台）	中２Ｂ（国境に春が） 中２Ｃ（あこがれ） 高１Ａ（十二夜） 高１Ｂ（マクベス） 高１Ｃ（検察側の証人） 高２有志（哀悼の義士） 高３有志（みにくいあひるの子） 演劇部（夕　鶴）

(舞台)	合唱部（くるみ割り人形） 器楽部 軽音同好会
（展示）	中１Ａ（宇宙と星座） 中１Ｂ（大和路周遊） 中１Ｃ（日本観光旅行） 中３Ａ（各地の産物） 中３Ｂ（中学生の非行） 中３Ｃ（COSMOS） 高２有志（ちむぐりさ） 高１（フィールドワーク） 写真部 美術部 化学部 生物部 華道部

（展示）	ＰＴＡ（作品展） 学校書道展 中１昆虫採集展 学校美術展 放送部（VTR放映） 高二有志（VTR•きらわれた学園） 高二有志（障害者と社会） 高二有志（からくり館） 高三有志（はちゃめちゃてれび）
(模擬店)	高２有志・２団体 高３有志・４団体 家庭科クラブ
生徒スタッフ	水島孝一郎・柳雄洋・植田由美

＝ 昭和58年度（第39回）＝

a．この年の特徴的なこと

- 有志参加が認められていない高一から、「Ｓ１アニメ同好会」が名のりをあげ、生徒の運営委員会は発表団体として承認する。教官会議で論議の末、教師側もこれを認めた。
- 開会式で、打ち上げ花火をしたい旨申し入れがあったが、教官会議はこれを認めず。やけどの心配・近隣への騒音が問題、の二点が認めない理由。
- 特別居残り時間について変更がなされた。この年から自動警備となったのが変更をうながすきっかけ。

直前一週間について

（従来）				（この年）		
中学生	6時まで	⇨		中学生	6時まで
高校女子	6時まで			高校生男女とも	6時半まで
高校男子	7時まで				

高校女子が、男子とともに７時まで残ってしまう傾向があり、それならともに６時半までにしようというのが主な理由。この年のものが現在まで引き継がれている。

- この年の４月から校舎内が上履となったので、それに伴う学園祭期間中の扱いが問題となる。「期間中も上履を厳守する。招待券に上履持参を明記し、持参しない人は、はだしか、入ってもらわないことにする。」を決定。生徒案をそのまま教官会議は承認。

b．内容概観

日　程	9月22日(木)・23日(金) 21日は午前中授業・午後準備。
テーマ	邂　逅
アーチ	ウッドペッカー
（舞台）	中２Ａ（１に12をかけるのと12に１をかけるのと） 中２Ｂ（青い鳥） 中２Ｃ（未来訪問） 高１Ａ（タイタンの戦い） 高１Ｂ（真夏の夜の夢） 高１Ｃ（銀の指輪） 高２有志（オリエント急行殺人事件） 高３有志（誰がために鐘は鳴る） 演劇部（おくれぬて） 器楽部 合唱部 軽音同好会
(展示)	中１Ａ（第二次世界大戦） 中１Ｂ（アニメ） 中１Ｃ（Hobby　Room）

（展示）	中３Ａ（過去の出来事・流行） 中３Ｂ（死について） 中３Ｃ（映画史） 高２有志（映画） 〃　（展示・食品添加物） 高３有志（映画） 化学部 放送部 華道部 写真部 美術部 アニメ同好会 ＰＴＡ展示 学校美術展 学校書道展 中２昆虫採集展
（模擬店）	高２有志・３団体 高３有志・４団体 家庭科クラブ 野外部
生　徒 スタッフ	近沢元太・矢野元・小川和延 石原啓子・小池朝子

c．その他

舞台発表最後の「軽音同好会」の発表が途中で打ち切られてしまい、10月８日(土)に追加発表をおこなった。

＝ 昭和59年度（第40回）＝

a．この年の特徴的なこと

- 40回記念ということで、「イベント部」が作られた。学園祭の歴史の展示・イベント広場・気球製作などが企画されたが、気球を除いて多くは企画だおれとなった。
- 教官劇の復活があった。

b．内容概観

日　程	9月22日(土)・23日(日) 21日は午前中授業・午後準備。
テーマ	Lodester（指針）
アーチ	ケンタウルス
（舞台）	中2A（白雪姫） 中2B（Until the morning） 中2C（不思議の国のアリス） 高1A（はぐれ狼） 高1B（落　日） 高1C（牡丹灯籠） 高2有志（ねずみとり） 演劇部・器楽部・合唱部 三部合同 ミュージカル（君よ知るや南の国） 軽音同好会 教官劇（陽気な地獄破り）
（展示）	中1A（建物の過去・未来） 中1B（人形劇） 中1C（MAIN奈良） 中3A（音　楽） 中3B（夜店 etc） 中3C（昔　話） 高2有志（お化け屋敷）

（展示）	高2有志（物語の部屋） 〃　（VTR） 〃　（ライブ） 高3有志（VTR） 写真部 華道部 放送部 美術部 化学部 中学昆虫採集展 中学社会スライド上映 学校美術展 学校書道展 ＰＴＡ展示
（模擬店）	高2有志・2団体 高3有志・5団体 家庭科クラブ 野外部
生　徒 スタッフ	祐岡武志・守屋元視・森川公靖 北川弥生ら
トピック	40回記念ということで、「イベント部」を作った。気球とアキ缶パネルが目をひいた。教官劇の復活も一つのトピック。

＝昭和60年度（第41回）＝

a．この年の特徴的なこと

◦前年度の学園祭運営委員長（高三・祐岡）が、今のような形の学園祭ならやめた方がいいという主旨の「学園祭廃止論」をぶちあげ、生徒間で大きな論議となる。その提唱に反発する形で高二の有志を中心に、しっかりやろうとする動きになっていった。

b．内容概観

日　程	9月21日(土)・22日(日) 20日は午前中授業・午後準備。
テーマ	DREAM UP OUR DREAM
アーチ	こたつねこ
（舞台）	中2A（シンデレラ迷宮） 中2B（もう1人のピノキオ） 中2C（眠れる森の美女） 高1A（ブラックコーヒー） 高1B（ハムレット） 高1C（ウエストサイド物語） 高2有志（アマデウス） 高3有志（心中天の網島） 演劇部（寿　歌） 軽音同好会 合唱部（夢の旅） 器楽部（CCSO）
（展示）	中1A（戦争について） 中1B（近くて遠い国韓国） 中1C（アニマルワールド） 中3A（SPACE＆AMERICA） 中3B（核） 中3C（放送局） 高2有志（見せ物小屋）

（展示）	高2有志（VTR） 高3有志（VTR） 軽音同好会（ライブ） 化学部 美術部 華道部 放送部 写真部 学校美術展 学校書道展 ＰＴＡ作品展 夏の生物作品展
（模擬店）	高二有志・2団体 高三有志・4団体 野外部 家庭科クラブ 模擬店部
生　徒 スタッフ	表和志・服部聡枝・秦裕林 岩野佳浩・小角昌義ら
トピック	前年度学園祭運営委員長の祐岡らが「学園祭廃止」を提唱。それに反発する形で計画・準備がおこなわれた。

＝ 昭和61年度（第42回）＝

a．この年の特徴的なこと

- 新しい形の学園祭という声もあったが、「普通の形の学園祭を」という保守的な傾向が生徒の中の主流を占めた。
- アーチ部を廃止しようという生徒会執行部の動きに対して、いく分の混乱があった。結論、アーチは例年通り製作された。

b．内容概観

日　程	9月20日(土)・21日(日) 19日は午前中授業・午後準備。
テーマ	浪　漫
アーチ	フェニックス
（舞台）	中2A（オズの魔法使い） 中2B（ピーターパン） 中2C（夕　鶴） 高1A（タルチコフ） 高1B（そして誰もいなくなった） 高1C（死者の学園祭） 高2有志（卒　業） 高3有志（石川啄木） 中高器楽部（CCSO） 合唱部 演劇部（アナザー・カントリー） 怪音同好会
（展示）	中1A（恐竜の世界） 中1B（蘇れ／ヨーロッパ中世） 中1C （あなたとなら大和寺、史跡） 中3A（死後の世界） 中3B（不思議の国のアリス） 中3C（ファッション）

（展示）	高2有志（VTR） 高3有志（ライブ） 写真部 放送部 化学部 夏の生物作品展 美術展 書道展 中2すうがく教科書展 奈良の仏像疎開 美術部 ＰＴＡ作品展 奈良県立ろう学校作品展
（模擬店）	高二有志・2団体 高三有志・4団体 野外部 家庭クラブ
生　徒 スタッフ	板倉寛如・仲田美知子・奥田善之 上野真ら
トピック	「廃止論」の中から、普通の学園祭をやろうという声が……。アーチも廃止をのりこえて完成した。

c．教官側の総括

以下は教官会議に示された、教官アンケート分のまとめ。

≪問題点・検討すべきことのまとめ≫

1. 開催の周期・時期を検討する。
2. 入場者が多すぎるのではないか。
3. 野外ステージの音についての問題。
4. 展示の低調さについての問題。
5. 教室の汚れ、作った物の置き場所を考えよう。
6. 生徒まかせではいけない、もっと手をかけてやらないと……。
7. 教官の各部でのひきつぎが必要。
8. 予算にからむ問題。
9. 毎年使う用具は、模擬店の収益で買いそろえよ。
10. 机・椅子の移動、展示用パネルの不手際。
11. ファイヤーが時間延長した点。

教師むけ
学園祭アンケートまとめ（個人の立場から）

凡例　a　全般的に見渡してお気づきの点
　　b　次年度への要望や提言
　　c　学園祭のあり方について

(1) a　今年は生徒の取り組みに真剣さが伺えて、好感がもてた。
　b　展示内容が更に充実するよう希望したい。
　c　特になし。

(2) a　例年になくアーチの仕上がりがはやかったし、出来ばえもよかった。
　高三有志劇は見ごたえがあった。
　玄関前の模擬店周辺にゴミ箱が少なすぎるように思う。
　野外部のステンドグラスや火文字の出来ばえもよかったが、時間が中学生にとっては延長しすぎるので、7時に終わるように指導してほしかった。
　b　中二の演劇は担任にとって、数年前に比べて、労力がかかりすぎるように思う。
　c　二年に一度でもいいのではないか？
　高校生主体で、中学生は観客的になってもいいのではないか？（中三の展示にあまり見るべきものがないのは、水泳訓練で時間的余裕がないし、中二の演劇は未熟で労力がかかりすぎるし、中一の展示は担任が必要に指導しないと成功しないという観点から）

(3) a　模擬店に工夫が無かった。内装などに個性を出さないなら、発表団体として受けつけなくてもよいと思う。
　装飾部は大きいことには熱心に取り組んだと思うが、校舎内には工夫が足りなかったと思う。もっと身近かなことで、お金をかけない取り組みがほしかった。
　b　教師がまめにアドバイスをしてやらないと、最近の学園祭は成り立たないように思う。こちらも覚悟を決めて、顧問を引き受けるべきであろう。
　c　オープニングセレモニーで感じたのだが、高三を引退者のように決めつけるのはどうかと思う。

(4) a　一人の生徒がいくつものことがやれる能力が、現在ではもはやなくなっている。学芸系クラブの活動がもっとも手抜きになり、発表も貧弱なものになる。
　夏休み中の活動がほとんどみられない。
　先輩（生徒）が後輩におごる。実習生や教師に〝おごり〟をせびる、この習慣を何とかしないといけないのではないか。
b　教師のもう少し強力な指導が必要になってきているのではないか。

(5) a　全般的に良くやった。
　教官の役割分担が決まっているので、各部毎で生徒指導をするべき。机・椅子の移動についての仕事は、総括部でなく教室部の仕事ではないでしょうか。
b　予算の使い方を柔軟にさせてほしい。余りが出ていながら、自己負担しなければならないのは不合理。
c　生指部が中心ではあるが、学校行事なので、今後も全教官で取り組んでいけばよい。

(6) a　招待券が多いためか、入場者が非常に多い様に思います。一考を要するのではないでしょうか。
　生徒の中で動いている者とそうでない者との差が大きすぎる。
　展示は毎年のことながら、良いものと悪いものとの差がはっきりし、全体的に低調。
b　招待券をへらす方向で考えて欲しい。

(7) a　高三有志劇がよかった。
　野外部のステンドクラスや火文字の出来ばえがよかった。

(8) a　平穏無事に終了できてよかったのではないか。
　スリッパの問題、今後も検討すべき。
　教室展示の場所、見学しやすいように工夫。
b　予算の問題、できるだけ個人に還元されるように。
c　生徒会と運営委員会の関連。

(9) a　学校全体としてバックアップ態勢を取るならば、後期実習後から半日にして準備にあててやればいいと思う。その分学園祭後の午後代休などなくてもよいと思う。
　指導部の人たちもがんばってくれたが、どうしても十日前ころから来てもらえず、また無理もいえず困った。
b　ファイヤーで7時までと各家庭に連絡してあるが、特に強く指導しないのなら7時半までに延長しておかないと、低学年の親は心配でしょうがないと思う。（苦情も聞く）
　アーチ以外でもやす材木は残して利用できないのか。材木屋から、かわりに木の端をもらっては。

(10) a　例年のことだけれど仕事に計画性がない。
　教生や、生徒間での〝おごる〟〝さし入れ〟が気になるが……。
　予算の中で活動する指導が必要。いくらでもエスカレートして出費が多くなる。（既製の展示物、貸衣装など）
b　アーチの「シート」や「テント」「道具類」等、毎年学園祭で苦労する物の購入を考えたらどうか。模擬店の利益を考えられないか。
c　二年に一度で良いのではないか。六ケ年で三回経験する。

(11) a　今年はアーチがはやく出来上ったので、ムードが盛り上ってよかったと思う。

(12) a　公開日をもう少し少なくするのがいいのではないか。人が多すぎてゆっくり見ることもできず

たいへんであった。小さな子どもが入るのをもう少し制限してみてはどうか。中学生以上にするとか。

野外部は非常にうるさかった。大きな声でどなりちらすのには閉口した。

最後の日の校外みまわりも余り良かった（効果があった）とはいえない。

c　二年に一回くらいでいいのではないか。

(13) a　野外、装飾などの外面的な飾りつけはよくできていた。

その半面、発表内容には不十分なものが多い。

b　部活動が不活発な点もあるが、文化系クラブの発表がもっとあってはしい。（たとえば高一の展示のようなもの）

c　二年に一度でよいと思う。

(14) a　全体として夏休み中の準備に生徒があまり揃わなくて、事実上9月に入ってからはじめるグループが多い。この傾向は年々ひどくなってきているので、時期についても再検討が必要。

教室の汚れも年ごとにひどくなってきているので、なんとかしなくてはいけない。

b　六年間もあるので、中一は清掃・運搬などの仕事につかせて、独自のとりくみは中二からでよい。一年目は見習いでよい。

c　学校の周囲の環境が変化してきているから、「音」を長時間にわたって出すことについては、根本的に考え直さなければならない。

(15) a　夏休み中のとりくみがあまりすすんでいなかったようだ。

教室がたいへんきたなく、掃除をきちんとやれていなかったように思う。

b　教室内があまりに汚れるのはどうかと思うので、大きな舞台用具や展示のものを入れておく場所とかも考えた方がよいのではないか。

(16) a　全体には盛り上がりに欠けた。やはり義務としてこなしている感じが強い。

机・椅子の移動に問題があった。

中三の教室発表に問題があった。（準備不足）

中一Cの教室発表は中学全体で一番よかった。皆でよく協力してとり組まれており、工夫もあっておもしろかった。

高三の劇もよく練習の跡がみられた。

アーチも良好。なかなかの力作であった。

b　今の生徒は、担任や顧問が積極的に指導してやらないと何もできないのであるから、とくに中学生の場合は、やらせっはなしにならないようにしてはしい。ある程度自分たちでできるのは高校生だけである。

c　どうしてもやる必然性がでてこない。一年休んでみたらどうか。学校として事前に、日程等でお膳立てをしてやる必要はない。係の先生と実行委員だけが忙しいのでは、何のための学園祭かわからない。

(17) a　二年も続いて教室部の手抜かりにはうんざりした。

裏方に徹する人間がもっと必要。地道に仕事をする人間が欲しい。

b　各部の部長など決める時に、根回しが必要。

c　当分、今のままの態勢で行けるところまで行こう。

(18) a　教室発表のあり方を根本的に問いなおす時期にあると思われる。個々にはよいものがありながら、全体としての統一を欠くために、よい意味での競合もなく、そこから生ずる緊張感も感じられない。自己本位でオザナリで、これでも「発表？」のつもりかと疑うようなものまで、堂々と

並置されているのでは、学校の文化祭として、その指導の姿勢を問われてもしかたないのではないか。

b　前夜祭的セレモニーは廃して、第一日の朝九時を期して、全校朝礼（A地区）を行い、続いて十時まで開会行事をやるようにしてはどうか。（全校生徒参加拘束。外来者は十時までは入れない。）

c　基本的には、「学園祭」は、他の諸行事と同様、本校教育の一環として大切にしたい。
　終了後の夜の街の見回りは、事前における指導の徹底によって、なんとしても不要にすべきである。

(19) a　高二を中心とした実行委員たちはかなりよくやっていたと思う。
　各クラスからの参加も、いっしょうけんめいやっていた。

(20) a　アーチなどをはじめとして、全体的には昨年以上に頑張っていたのではないでしょうか。

(21) a　今年は生徒がよく動いていて、今までになくいい学園祭であったと思う。ファイヤーをやっている時もよく動いていた。

c　今まで通りにやればよいと思う。

(22) a　計画を早くたてて、すべて早目に指導するようにして欲しい。特に教室部は前日の午後四時になっても掲示板ができていなかった。そのため、教室展示の場合、前日の三時から六時までは、時間不足で困った。

b　模擬店の利益は学園祭のために使っていただきたいと思います。毎年どうしても使用する備品（ものさし・工具・ハサミ・テント・防雨用シート・ミシン・はけ・カッターなど）を揃えて欲しい。そして、生徒が使いやすいような制度を考えて欲しい。

c　遊んで楽しかったらよいという傾向が強いように思う。学園祭の意義を考えて、計画的に取りくみ、研究発表分野も充実して欲しい。

(23) a　文化部から生指部に指導を移したが、その成果と問題点は考察すべき。今年度に限って言えば、その意味はあまりないのでは？
　学年や学級の横の連係は図られているが、縦の連係が弱い。

b　前夜祭はなくす。（今年のような〝開会宣言〟が必要とは思えないが、あっても不都合はないと思う。）

Ⅳ. まとめにかえて

このように「学園祭の流れ」を追ってくると、六年一貫が施行された頃から、教師サイドは、何回かにわたって、枠組・規制を与えてきたことがわかる。

それらが妥当であったか、やむをえぬものであったか、また行き過ぎであったかについては、この際問題外のことだ。ただ、そうした枠組・規制を改変したり廃止したりする力や意欲が生徒の方になくなってしまった今、私達教師サイドが真剣に見直してみる時期に来ていると私は思う。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

体育大会を総括する

―― その在り方を求めて ――

保健体育科　渡辺　幸子　　米田　博行

六年一貫教育の実施から、はや14年が経過した。今、ここで学校行事としての体育大会をふり返り、今後のあり方を考えていくことは、教師集団に課せられた大きな課題である。以下は、本校における体育大会はどのようなものであり、どのように実施してきたか、その成果と問題点等について明らかにし、さらに、今後の方向をさぐり、まとめたものである。

I　本校における体育大会はどのようなものであったか。

かつては、教師も生徒も秋の一日を運動場でトラックを囲み、体育の学習の成果を発表する場として整然とおこなわれた。特に、集団演技に多くの期待がよせられていた。このような体育大会は観る者の存在を意識し、観せる（発表する）ためのものであった。また、運営も教師中心におこなわれた。このため、準備のために多くの時間を必要とし、教科体育の授業がいびつなものとなるのみならず、生徒一人一人の運動への欲求や行事への期待を十分に満たすことができなかった。

以上の問題点を検討した結果、教科体育でおこなっていることそのものを体育大会の内容とし、生徒も教師も共に運動をおこない、そのよろこびを味わう一日とすることをめざしておこなわれるようになった。また、運営については、生徒が主体となり、自主的におこなうようになった。このように、「観せる体育大会から行う体育大会へ」「教師中心から生徒中心へ」と移り変わった。内容は、球技の部、陸上競技の部、その他の部というような性質の異なる三つのもので構成し、勝敗、記録、順位などを明確にして実施した。

ところが、昭和43年頃から本校でおこった学園紛争はさまざまな問題を提起した。学校の主役は生徒だという意識が彼らの中に広まり、学校行事の企画・運営の主導権を要求するようになった。これまでも、そうであったにもかかわらず特に体育大会においてそれが著しくあらわれた。これに対し、われわれ教師としては、指導・助言を加えながらすすめたものの、なお、彼らは過去を否定し要求を強くしつづけた。この状況に対して、われわれ教師は、今こそ新たに生徒の体育大会への主体的創造・参加が期待できると考え、援助・助言の役割を担うことで生徒の要求を認めることとなった。このため、内容的には、球技の部はこれまでのものが引き継がれたものの陸上競技の部は後退し、お遊び的なものがとりいれられるようになった。（パンくい競争、風船割り、借り物競争など）しかし、この種のものは、一時的にはおもしろくて楽しいものであり彼らの要求を満足させたものの、やがては、つまらないものであるということを生徒自ら気付きはじめたことと教師のねばり強い指導もあって、取り上げられなくなった。

以上のような変遷をたどりながらも、本校における体育大会は、中高六年一貫教育においても生徒が主体的に運営し、生徒も教師も共に運動をおこない、そのよろこびを共有する一日とすることに変わりはなく今日に至っている。

Ⅱ．どのように実施してきたか。

1. 期日について

昭和51年度までは10月中旬または初旬であったが、昭和52年度からは主として６月上旬に変更した。（表１）この理由は、二学期の学園祭を終えての体育大会は、生徒にとってかなりの負担であることに加えて共通一次試験の実施により高校３年生の積極的な参加が望めないようになったこともあって変更せざるをえなくなった。

表１

年　度	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
月／日（曜）	10/16（火）	10/15（火）	10/9（木）	10/7（木）	6/9（木）	6/1（木）	6/5（火）	6/6（金）	6/2（火）	6/2（水）	6/1（水）	6/1（金）	5/31（金）	6/3（火）

2. 全体の企画・運営の担当について

昭和50年度までは保健体育科が全体の企画・運営にあたっていたが校務分掌の改革により、昭和51年度～昭和53年度までは、体育大会は生徒の健康の保持・増進をはかるものであるとの認識もあって、これと日常的にかかわりをもつ健康部があたった。このために、保健体育科以外の教師も企画・運営の中心としてたずさわることとなった。このように保健体育科以外の人々がかかわりをもつことは良い点もあるが、実際には指導・助言や準備が円滑におこなわれにくくなるなどの困難な点も出てきた。このため、昭和54年度から再び保健体育科でおこなうようになった。一方、生徒側は生徒会体育部がこれにあたった。なお、表２は当日までの準備日程の一例として示したものである。

表２　　昭和60年度

月　日	計　　画	月　日	計　　画
5／8水	方針・日程について（教科会議）	5／20月	中間考査
9木	方針・日程について（教科と生徒会体育部長・副部長）	21火	中間考査
10金	体育部会で方針・種目の検討、クラスの意見・希望をきく	22水	種目別出場者名簿作成
11土	種目・出場人数原案作成	23木	役割分担、ルールの決定
12日	（市民体育大会）	24金	実施要項完成
13月	（代　休）	25土	役割分担表配布
14火	種目・出場人数原案検討（クラスで）	26日	
15水		27月	練習日（放課後）
16木	種目・出場人数決定	28火	
17金		29水	要項印刷
18土		30木	実施要項プリント配布、放課後準備
19日		31金	体育大会

3. 運動領域の設定と実施について

「球技」、「陸上競技」、「その他の競技」といった性質の異なる三つの運動領域を設定した。これらの実施については、時間、場所、人数などの点から中・高別に交代制をとっている。主として、中学では、午前の部は陸上競技とその他の競技、高校では球技をおこない午後は交代するというかたちをとっている。このように中・高別ではあるがその全員が同一場所で競技・応援する部分と分散して競技・応援する部分を設定したことは、これまでのいわゆる運動会としてのイメージからややかけはなれたものではあるが、生徒一人一人が自由な反面、約束やルールを守ることによって円滑な運営がなされている。また、どのように交代するかについては、体育部にはかられたり、中・高それぞれの体育部長の話し合いまたはジャンケンによって決められている。

4. 種目について

(1) 「陸上競技」、「その他の競技」（トラック、フィールドを使用）

中・高別	領域	種目＼年	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
中学	陸上競技	100 m 走			○		○		○	○	○	○	○	○	○	○
		200 m 走													○	
		長距離走					○	○	○							
		持久走									○					○
		走高跳					○	○	○	○		○				
		500 m リレー													●	
		スウェーデンリレー					●	●		●						
		選抜リレー											●	●	●	
		学級対抗リレー	●	●	●				●		●	●	●	●	●	●
		クラブ対抗リレー									●	●	●	●		●
		計	1	1	2		4	3	4	3	4	3	4	4	5	4
	その他	障害物競走		○	○		○	○	○	○	○	○		○		○
		借り物競争	○	○	○							○	○	○		
		条件競争														○
		むかで競走		●	●									●	●	
		二人三脚								●	●	●	●	●	●	
		n人（n＋1）脚	●	●	●											
		騎馬戦	●	●			●	●	●	●		●	●	●	●	●
		綱引き	●				●	●	●	●	●		●	●	●	●
		スプンリレー	●										●	●		●
		障害物競走＋借り物競争	●												●	
		障害物リレー											●			
		計	6	5	4		3	3	3	4	3	4	6	7	5	5
高校	陸上競技	100 m 走							○	○	○				○	
		短距離走					○	○								
		ハードル走				○										
		走高跳				○				○	○					
		100 m リレー												●		
		スウェーデンリレー			●		●	●								
		全員リレー										●				
		選抜リレー												●	●	
		学級対抗リレー			●	●	●	●	●	●	●		●			●
		通学年対抗リレー	●	●												
		クラブ対抗リレー						●	●							
		計	1	1	2	3	3	4	3	3	3	1	1	2	2	1
	その他	障害物競走	○	○	○	○		○	○	○					○	
		借り物競争	○	○			○			○	○					
		棒引き	○	○												
		おんぶ 25 m				○										
		むかで＋二人三脚					●	●	●			●				
		二人三脚			●									●		
		三人四脚								●	●					
		n人（n＋1）脚	●	●		●						●	●			●
		障害物リレー											●	●		
		二人三脚リレー													●	
		騎馬戦	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
		綱引き					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		タイヤでポン														●
		バルンでチュ														●
		キャンディアンドポンディ														●
		計	5	5	3	4	4	4	4	5	4	4	4	4	4	5

○…個人的種目　●…集団的種目　51年（中学）資料不足のため記入なし。

(2) 球　技

年度	種目＼学年・男女別	中1 男	中1 女	中2 男	中2 女	中3 男	中3 女	高1 男	高1 女	高2 男	高2 女	高3 男	高3 女
48	バレーボール	○		○		○			○		○		○
	バスケットボール		○		○		○	○		○		○	
	ハンドボール	○	○	○	○	○	○		○		○		○
	サッカー							○		○		○	
	ソフトボール	○	○	○	○	○	○						
49	バレーボール	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ハンドボール		○		○		○						
	サッカー	○		○		○							
	ソフトボール	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
50	バレーボール							○	○	○	○	○	○
	サッカー							○	○	○	○	○	○
53	バレーボール		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ハンドボール	○	○			○	○						
	サッカー	○		○				○	○	○	○	○	○
	ソフトボール	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ポートボール				○								
54	バレーボール			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ハンドボール				○	○			○		○		○
	サッカー	○		○				○	○	○	○	○	○
	ソフトボール	○	○	○	○	○	○	○		○		○	
	ポートボール		○				○						
	ドッヂボール	○	○										
55	バレーボール			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ハンドボール					○	○	○		○		○	
	ソフトボール	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ポートボール	○	○	○	○								
	ドッヂボール	○	○						○		○		○
56	バレーボール			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ハンドボール						○	○	○	○	○	○	○
	サッカー			○		○							
	ソフトボール	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ポートボール	○	○			○							
	ドッヂボール	○	○										

年度	種目＼学年・男女別	中1 男	中1 女	中2 男	中2 女	中3 男	中3 女	高1 男	高1 女	高2 男	高2 女	高3 男	高3 女
58	バレーボール			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	バスケットボール	○	○			○	○						
	ハンドボール							○	○	○	○	○	○
	サッカー	○		○	○	○							
	ソフトボール	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ポートボール	○	○			○							
	ドッヂボール	○	○	○	○	○	○						
59	バレーボール			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	バスケットボール	○											
	ハンドボール								○		○		○
	サッカー	○	○	○	○	○	○	○		○		○	
	ソフトボール	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ポートボール	○	○	○	○	○	○		○		○		○
	ドッヂボール		○										
60	バレーボール			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	バスケットボール	○	○										
	ハンドボール				○				○		○		○
	サッカー	○		○				○		○		○	
	ソフトボール		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ポートボール					○	○						
	ドッヂボール	○	○										
61	バレーボール			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	バスケットボール		○										
	ハンドボール	○		○	○		○						
	サッカー	○	○			○		○		○		○	
	ソフトボール	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ポートボール								○		○		○

50年（中学）資料不足のため記入なし。

以上の種目がこれまでに実施してきたものであるが、体育の授業との関連を考えて設定してきたものの、一部分、それに欠けるところがあった。陸上競技種目とその他の競技種目は、中学ではほぼ同数であるが高校では、陸上競技種目数が減少の傾向にあり、その他の種目とのバランスのくずれがみられる。また、個人的種目が減少する傾向にある。特に高校生にその傾向がみられる。これは、現代の中・高校生が、しんどいこと、他との競争により自己の能力が明白になることを避け、みんなで同一行動をとることで安心感やたのしさを味わうことを求めているためであろう。

しかし、このような現代の中・高校生気質ではあるが彼らなりに真剣に新らしい種目の創造に取り組み、創り出して実施したこともあった。あくまでも、安全、効果、経済等の面からの教師の指導によってではあるが。今後は、どのような種目を創造していけばよいかが問われるが、これにふさわしい場を保障し、育てていくことが重要であると考える。

5. 競技形式について

同一学年のみならず異なる学年との競争や協同を必要とする競技形式によって日常では味わえない学校生活を体験させることができると考え、次の四つの形式を設定した。

①学年内クラス対抗（男女別）　②学年内クラス対抗（男女混合）

③通学年男女別対抗　④通学年男女混合による対抗

6. チーム編成について

クラスごとに、男女別または男女混合チームを編成した。クラスや学年を越えたチームの編成までにはいたらなかったが、同じ色のはちまきやタスキをすることによって同一チームのメンバーとしての感情、意識を生み出すことの工夫がみられた。中学では、A組－白、B組－赤、C組－黄というようにほぼ毎年同じ色が生徒によって決まった。高校では、毎年異なるが、最近の傾向として学年を越えたチームの編成よりもクラス単位のみで、色はパステル調のものとなってきた。この現象は、他学年との一体感への関心の程度を示すものとして今後の体育大会のあり方を考えていくうえでの貴重な資料となることであろう。

7. 競技ルールについて

安全性や時間的制約の点から、さらにはみんなが真剣に競争することのおもしろさ、たのしさ、美しさを得るためには既成のルールを適用するのみならず作り変えることが必要であった。特に球技においてそれがしばしばおこなわれた。具体的な一例として次のようなものがあげられる。

競技ルールについて（高校の部）

●まず、プレイヤー全員に●

スポーツマンらしい行動をとるように心がけよう。

応援者、プレイヤー共に目にあまる行為があったときは、退場また審判には絶対に従うこと。

ゲーム開始時間はきちんと守ること。開始が遅れても終了時間は決めた通りにしますので試合には遅れずに来ること。

○バレーボール○　時間25分

1. ジャンケンで勝った方からサービス
2. 反則は　タッチネット・パッシングセンターライン（ふみ越しのみ）
   3回以内で返せなかった場合
3. ローテーション制をとり、必ず全員がまわること。

○ソフトボール○　時間25分

1. 9人制とする。
2. 3ストライク5ボール3アウト交代。デッドボールはなし。
3. 投手は下手投げ
4. 送球がファールグランドへ転がった時は走者は1塁の進塁を与えられる。
5. フェンスをダイレクトで越えたらホームラン。
6. 草にかくれてボールが見えなくなったら審判が判断する。

○ハンドボール○　時間10分×2

1. 乱暴な行為をした場合、フリースローが与えられる。
2. 反則は
   オーバーステップ（ボール保持後4歩あるくこと）
   ダブルドリブル（1度ドリブルを止めて再度ドリブルをすること）
   ゴールエリアラインを踏んだとき。
   バックパス（故意的にボールをキーパーに返すこと）
   相手のもつボールに手をかけたとき。
   オーバータイムス（ボール保持時間5秒以内）
   キックボール（ボールをけること）
   なお、反則があったときは、その場からフリースロー、相手ボール。
3. ゴールラインをこえた場合
   攻撃側フリスロー
   守備側コーナースロー

○サッカー○　時間12分×2

1. スローインは両手で投げる。
2. 危険なプレーをしない。
3. オフサイドをとる。

●勝負の決め方●

バレーボール	時間内で多く得点した方が勝ちとする。 時間がきたら、負けている方のサーブ権がなくなるまで続けて終る。
ハンドボール	時間内で多く得点した方が勝ち。
ソフトボール	時間内で多く得点した方が勝ち。25分を超えて新しいイニングに入らない。
サッカー	時間内に多く得点した方が勝ち。同点のときは引き分けとする。

8. 表彰について

これについては賛否両論があると考えられるが、協同による競争の結果としての順位は当然のことであり、教育的意義もまた大きいものと考え、総合優勝と学年優勝のクラス集団に対して学校長より表彰状がおくられている。また、高校では最下位クラス集団に対しても生徒会会長よりブービー賞なるものがおくられている。これは生徒の発案であり、下位集団への配慮がみられる。なお、昭和61年度より故玖村先生のご意志をもとにしてつくられた優勝杯がおくられている。

9. 応援合戦について

クラスごとに創意工夫をこらした応援を展開したが、最近では、種々な行事の関係で準備の時間がとれなくなったためにおこなわれなくなった。しかし、これの準備は、体育大会のムード作りとクラスの一体感を高めていくことに役立っていたことなどから今後は、準備のための時間を保障することを検討していきたい。

10. 運動場の草ひき、石拾い

全校生徒による草ひき、石拾いをおこない競技場の安全の確保をはかった。最近では、必要に応じて一部の生徒によっておこなうようになった。

Ⅲ. どのような成果と問題があったか。

成果としてあげられることは　1.生徒たちが体育大会に何らかの魅力を感じ、積極的に参加していること。2.体育大会が生徒の創意工夫によって創り出されていること。例えば、種目、チームの編成、競技形式、ルールなどがそれである。これらは、体育の学習内容とも深いかかわりをもっているものであり、体育大会によってそれが発揮されたものであると考えられる。3.クラスや学校全体のまとまり、士気のたかまりに影響を及ぼしていると思われることなどがあげられよう。

問題点としては、1.中・高六年一貫教育における体育大会の位置づけが必ずしも教師・生徒に明確に共通理解されていない。2.内容の面で教科体育との関連性に欠けるところがある。3.一学期での実施は他の行事などの関係からみて止むをえないが、準備期間中は、年度始めのため各種行事や祭日などがあり、討議や準備に十分に時間をかけることがむずかしい。4.生徒の積極的参加を保障するために、競技の練習の機会を設けたが教師の指導態勢が十分に確立されていなかった。

Ⅳ. 今後の方向

「観せる体育大会」から「行う体育大会」へ、「与えられた体育大会」から「生徒自らが創り出す体育大会」へと変化してきたが、六年一貫教育においても、これは継承されてきた。一般的に教育の管理主義的傾向が強くなってきているといわれている今こそ、今後さらにこれを維持しつづけていくことを願うものである。このためには、生徒一人一人が、教科（特に体育科）や教科外活動の中で、これにふさわしい学力を身につけていくことが必要であり、教師の民主的な指導・助言がさらに要求されてくる。

具体的な実施のしかたについてみると、これまでは、中・高別におこなっているが、何を一貫させているかが不明確である。この問題の解決に少しでも近づくために、全校生徒による、同一場所での競技とすること。企画・運営・競技・総括などあらゆることがらは、従割り集団（異なる学年・クラスによる集団）によっておこなうことが考えられる。これまでの中・高別に実施してきたものも残しながら六年一貫教育における利点に着目し、この方向について今後検討していきたい。

（文責　渡辺　幸子）

<資　料>

体育大会当日の諸注意

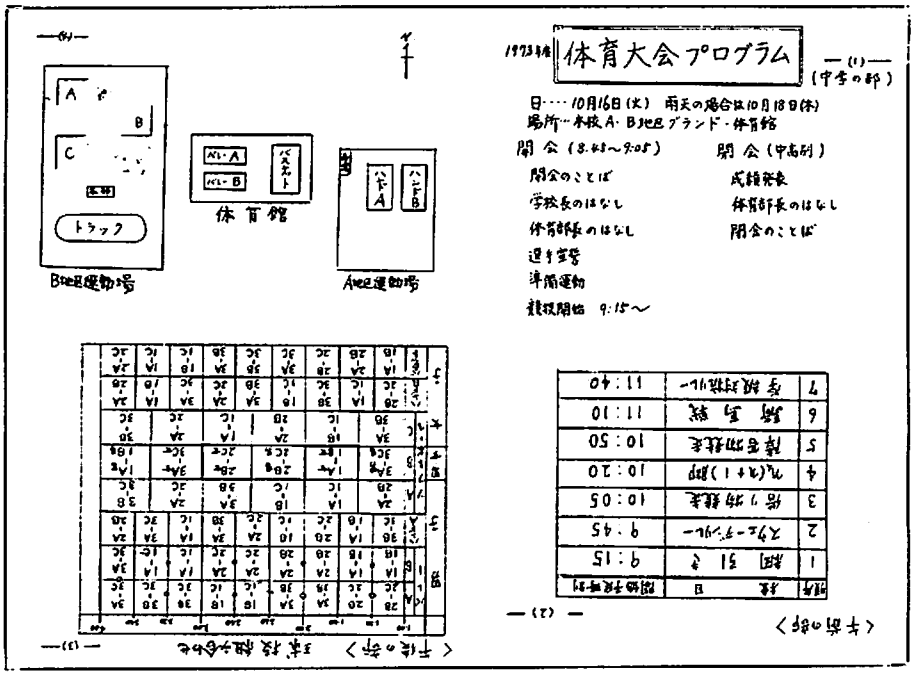
1. 大会進行

教官朝礼	8：25～
生徒B地区集合	8：30～
開会式	8：35～
競技開始	9：00～
昼食	午前の部競技終了次第
競技終了	4：00頃
閉会式	競技終了後ただちに（中・高別）

2. 貴重品は開会式終了後、各担任へ預けること。持ち物には記名すること。
3. 競技開始10分前には所定の場所に集合し、大会の運営が円滑にいくように協力すること。
4. 競技の前には十分、準備運動を行ない、ケガの防止に気を配ること。
5. 事故防止の意味からも真剣にプレイすること。ふざけてケガをしないように。
6. 間食は一切、持参しないこと。（昼食以外のホールでの飲食は禁止）昼食はできるだけ持参するように。
7. 自分で出した紙クズ・ゴミは他人の迷惑にならないように、自分できちんと始末すること。
8. 当日の持ち物は最小限にとどめ、貴重品はなるべく持ってこないこと。
9. 天候があやしい場合は、授業の準備もして登校すること。
10. 各自のイスの裏に、チョークで、学年・クラス・名前を記入しておくこと。
11. 中学生 —— 8：30にイスを持ってB地区所定の場所へ置き、開会式に参加すること。

    高校生 —— 午後の部がはじまるまでに各自のイスをB地区所定の場所へ移動させること。

次のプログラムは四つ折りにし体育大会当日使用に便利なように考えられたものである。



1973年度 体育大会プログラム (中学の部)

日……10月16日(火) 雨天の場合は10月18日(木)
場所…本校A・B地区グランド・体育館

開会 (8:45〜9:05)
- 開会のことば
- 学校長のはなし
- 体育部長のはなし
- 通り宮
- 準備運動

競技開始 9:15〜

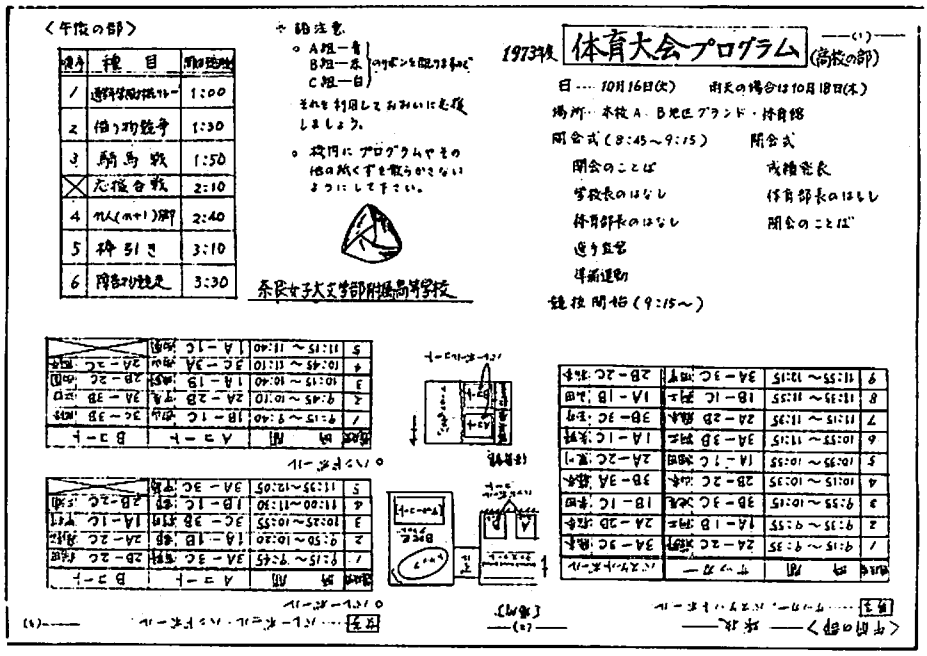
閉会 (中高別)
- 成績発表
- 体育部長のはなし
- 閉会のことば

〈午前の部〉

順番	種目	開始予定時刻
1	開会式	9:15
2	スタンプラリー	9:45
3	宿り物競走	10:05
4	九(3+1)部	10:20
5	障害物競走	10:50
6	騎馬戦	11:10
7	学級対抗リレー	11:40

〈午後の部〉 学年対抗チャンピオン

順番	種目	開始予定時刻
1	選抜学級対抗リレー	1:00
2	借り物競争	1:30
3	騎馬戦	1:50
×	応援合戦	2:10
4	九人(3+1)部	2:40
5	綱引き	3:10
6	閉会式・表彰式	3:30



1973年度 体育大会プログラム (高校の部)

日……10月16日(火) 雨天の場合は10月18日(木)
場所…本校A・B地区グランド・体育館

開会式 (8:45〜9:15)
- 開会のことば
- 学校長のはなし
- 体育部長のはなし
- 通り宮
- 準備運動

競技開始 (9:15〜)

閉会式
- 成績発表
- 体育部長のはなし
- 閉会のことば

〈午前の部〉 学級

順番	時間	種目	チャンピオンチーム
1	9:15〜9:35	24−2C 騎馬	3A−3C 騎馬
2	9:35〜9:55	1A−1B 綱引	2A−2D 綱引
3	9:55〜10:15	3B−3C 大縄	1B−1C 大縄
4	10:15〜10:35	2B−2C 仮装	3B−3A 仮装
5	10:35〜10:55	1A−1C 障害	2A−2C 障害
6	10:55〜11:15	3A−3B 障害	1A−1C 障害
7	11:15〜11:35	2A−2B 騎馬	3B−3C 騎馬
8	11:35〜11:55	1B−1C 綱引	1A−1B 綱引
9	11:55〜12:15	3A−3C 障害	2B−2C 障害

〈午後の部〉 学年

順番	時間	種目	チャンピオンチーム
1	9:15〜9:45	3A−3C 騎馬	2B−2C 騎馬
2	9:50〜10:20	1A−1B 綱引	2A−2C 綱引
3	10:25〜10:55	3C−3B 綱引	1A−1C 綱引
4	11:00〜11:30	1B−1C 騎馬	3B−3A 騎馬
5	11:35〜12:05	3A−3C 障害	2B−2C 障害

○パンチボール

順番	時間	種目	チャンピオンチーム
1	9:15〜9:40	1B−1C 綱引	3C−3B 綱引
2	9:45〜10:10	2A−2B 騎馬	3A−3B 騎馬
3	10:15〜10:40	1A−1B 障害	2B−2C 障害
4	10:45〜11:10	3C−3A 綱引	2A−2C 綱引
5	11:15〜11:40	1A−1C 綱引	3B−3C 綱引

○パンチボール

昭和61年度 体育大会 プログラム 中学の部

・期日 5月30日(金) ※雨天の場合は6月
・会場 本校グランド・B地区 体育館

《開会式》=中高合同=
1 開会のことば
2 学校長のお話
3 体育部長のお話
4 諸注意
5 選手宣誓
6 準備運動

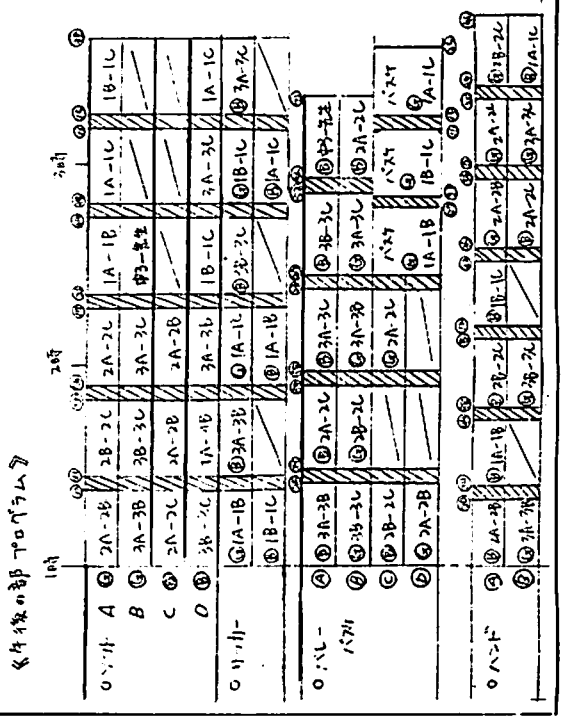
《閉会式》=競技終了後=
1 成績発表
2 体育部長のお話
3 閉会の言葉

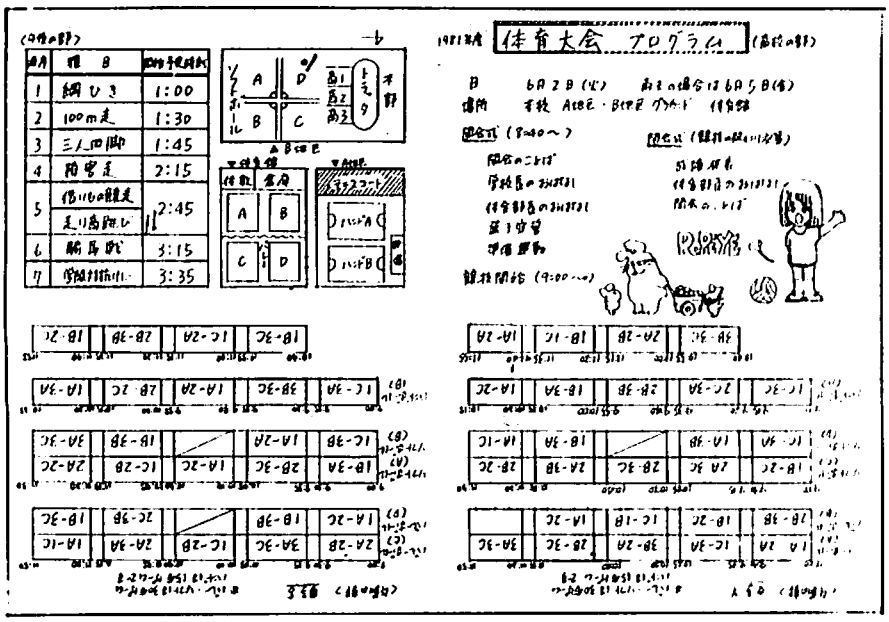
《午前の部 プログラム》

	種目	予定時間	A	B	C
1	綱引き	9:00			
2	障害物レース	9:30	○	×	×
3	スプーンレース	9:40	×	○	×
4	100m走	10:00	×	×	○
5	二人三脚	10:20	○	○	×
6	クラブ対抗リレー	10:45			
7	騎馬戦	11:00			
8	持久走	11:20			
9	学年競走	11:40	×	×	○
10	クラス対抗リレー	12:00			

(教師○ 見学×)

《午後の部 プログラム》





体育大会諸係（高校の部）　　昭和50年度

係		教官	生徒	仕事の内容
総務		松村、奈良、山口、濱辺	生良(委員)、体育部長(大内)	全般にわたっての運営・管理
進行		山中昭、濱辺	体育部長(大内)、副部長(木村)	各係との連絡、競技の進行
競技	採点・審判	野澤、吉岡	各クラス(別紙)	各球技の審判と結果を記録係に連絡
	誘導	中尾、林、谷本	須藤(52)、山口(53)、石上(51)、佐藤(51)、池田(51)、浅野(51)	各競技の集合場所での待機、誘導
	スタート	中道、芦村	吉田(53)、長谷川(53)、鈴木(53)、天牛(53)	スタート地点での誘導、出発合図
	ゴール	奥川、木村、藤川、吉田	中(53)、春井(51)、三浦(51)、栗栖(51)	ゴールでテープをはり、1～6位または3位までの為順番記録、模範誘導
	用具	山中昭、濱辺、奈良	体育委員全員	当日までの必要な用具の準備、当日の準備・管理
救護		中村、小原田	保健委員	傷者の救護、病院との連絡
放送		藤田	放送部	放送設備の準備・管理、後片づけ
記録		長谷	中嶋(53)、西村(53)、本村(53)	記録用紙と学年ごとの得点の集計記録、掲示
美化		野澤	生活委員	会場全体の美化
ルール		山中昭、濱辺	大内、木村	競技のルールの作成、必要に応じて臨機応変、変更、適用をはかる

昭和50年度　体育大会種別出場者　　高校（　）年（　）組

種目		出場人数	出場者氏名	代表者名
バレーボール	男子	12名	（前半）1. 2. 3. 4. 5. 6.　（後半）1. 2. 3. 4. 5. 6.	
	女子	12名	（前半）1. 2. 3. 4. 5. 6.　（後半）1. 2. 3. 4. 5. 6.	
ソフトボール	男子	9名(以内)	1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9.	
	女子	9名(以内)	1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9.	
学級対抗リレー		男女各4名	（男子）1. 2. 3. 4.　（女子）1. 2. 3. 4.	
スウェーデンリレー		男女各4名	（男子）1. 2. 3. 4.　（女子）1. 2. 3. 4.	
2人3脚		男女各10名	（男子）1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10.　（女子）1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10.	
障害走		男女各4名	（男子）1. 2. 3. 4.　（女子）1. 2. 3. 4.	
騎馬戦		全(男女別)	クラス人数　男子（　）名　女子（　）名	

1. この用紙は3部作成し1部は体育部長へ　2部は男女別にクラスの控にして下さい。
2. クラスの人数が球技の出場人数をオーバーする場合はソフトボールに入や、適当にナンバーチェンジをして全員が参加できるようにして下さい。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

今年の研究活動

研究調査部

(1) 研究紀要の発行　特集「六か年一貫教育の総括と展望」
第2充（行事、分掌、ゆとり活動）を内容とする。
全員が分担執筆する。発行は来年度予算で。

(2) 授業研究　希望者による授業公開
第一回：6月9日～6月14日、合評会6月18日。
授業者・中道貞子先生、理科分野・中1。
吉沢栄敏先生、美術・高Ⅱ(選択)。
加藤勇先生、中2・英語。
谷本文男先生、高Ⅲ・漢文。
第二回：1月23日～1月29日、合評会1月30日。
授業者・平塚智先生、数学・中1。
林良樹先生、理科1分野・中3。
物理・高Ⅱ(選択)。
熊野佐和子先生、国語・中1。

(3) 校内研究会　第一回：6月5日、講演：大阪教育大教授・秋葉英則氏「発達段階と教育」
第二回：12月3日「社会科の総括と課題について」社会科・勝山元照先生。
「六か年一貫教育の総括」英語科・水町律子先生
「理科六か年一貫教育新カリキュラム」理科・屋舗増弘先生。

(4) 全附連、高等学校研究大会の開催（会場校）
本校の発表：音楽分科会、山中竹一先生「本校音楽科の現状」
生活指導分科会、野沢省三・藤田周子両先生「本校の生徒会活動」
附属の在り方分科会、問題提起：教務的内容について・中尾博一先生。
問題提起：教育実習について・松本博史先生。

(5) 教科担当者会議　一学期・6月中に各学年で行われる。
二学期・希望学年のみ実施。

(6) 標準学力テスト　本年度は次の科目で実施。
国語：（中1～高3）、数学：（中1～高2）、理科：（中1～高1）
美術：（中1～中3）、技・家：（中1～中3）、家庭：（高1～高2）

(7) 標準学力テストの今後について提案
各教科に標準学力テストの今後の取り組みについてアンケート調査し、その結果、以下の試案について提案を行い、大方の賛同を得る。
提案：（中学）基本的学習事項について、5教科（国語、社会、数学、理科、英語）について行う。結果については、個人にフィード・バックする。（高校）現状の標準学力テストは、廃止する。

（必要があれば実力テスト的性格のものを考える）

提案については、決定を見ず、今後の課題となる。

（61/12/20：「模擬試験の結果から見た本校生徒の実態」について報告、本校生徒の学力について、高校における学力の姿をみる。）

(8) 公開研究会の実施について

次の決定をみた。「教科、有志グループ等が、研究の成果を授業をとおして、校外に公開、発表する場合、学校としてこれを主催する形をとり、研究調査課はこれに協力、バックアップする。」と決定される。

教科を軸とした教科教育の研究が活発になることが望まれる。

奈良女子大学文学部附属
中・高等学校研究紀要第28集
1987年6月

研究紀要第16集（1974）～第27集（1986）目次録

第16集（1974）　特集「中・高6年一貫教育における学校行事のあり方」
1. 学　園　祭……生　徒　課…　2
2. 球　技　大　会……生　徒　課…　5
3. 中1の一泊行事……昭和49年度中2担任会…　6
4. 修　学　旅　行……昭和49年度高3担任会…　9
5. 体　育　大　会……体　育　科…　10
6. 水　泳　訓　練……体　育　科…　11
7. 音　楽　会……音　楽　科…　14
8. 写　生　会……美　術　科…　17
学園祭展示「戦争と青春」について……吉田　裕…　21
地理授業での野外調査の試みから……寅貝　和男…　31
付属学校と地域公教育との接点を求めて……松村　正樹…　51
「高村光太郎」ノート　その九……井田　康子…　1
　　一光太郎の「へんな貧」一

第17集（1975）　**＜特集・六年一貫教育の問題点＞**
1. 六年一貫教育における人権学習の展開……社　会　科…　1
2. 理科における六ケ年一貫カリキュラムと
　　実施記録とその問題点……理　科…　29
3. 英語科における二年間のとりくみと問題点……英　語　科…　47
4. 美術科におけるカリキュラムの問題点
　　一週時間2：2：1の題材一……美　術　科…　51
5. 保健室からみた生徒の実態……健　康　科…　53
6. 中学校・技術家庭科における試みの一端……技術・家庭科…　59
＜個人研究・報告＞
アフガニスタン紀行……吉田　裕…　65
高村光太郎ノート　その十……井田　康子…　1

第18集（1976）　六年一貫教育における保健体育の問題点……保健体育科…　1
標準学力テストの結果について……社　会　科…　5
本校生徒の健康状態……健　康　部…　31
幼児数概念の研究　　同和地区における幼児の
　一同和地区における幼児の数概念の発達について一……松本　博史…　35
楽しい授業を創るための試み　一高校世界史一……松村　正樹…　57
51年度文部省教員海外派遣団（第14団）に参加して……山中　竹一…　73
高村光太郎ノート　その十一……井田　康子…　1

第19集（1977）
理科標準学力テスト（1976年度）の結果について……理　科… 1
標準学力テストを実施して……数　学　科… 34
本校生徒の健康状態（統計）……健　康　部… 75
幼児数概念の研究Ⅱ
—順序数と数の保存について—……松本　博史… 81
文部省派遣教員海外教育事情視察団に参加して……吉沢　栄敏… 91
高村光太郎ノート　その十二……井田　康子… 1

第20集（1978）
中学・高校の連続性をふまえた文語文法の理解度の実態
—「動詞・助動詞・品詞識別」の調査と考察—……国　語　科… 1
普通科における電子計算機の導入について
—中・高六ケ年間を通して—……数　学　科… 15
関数のグラフの知覚特性について……松本　博史… 39
関数のグラフの一指導について
—実験的研究—……松本博史・(協力)山野上智子… 54
授業を見直す　—教科教育改造の視座—……松村　正樹… 63
中学英語学力診断テストの結果について
荒木孝子・加藤　勇・吉岡幸子
水町律子・吉岡一郎…… 84

第21集（1980）
本校生徒の健康調査に関する一考察……健　康　部… 1
中学校音楽科標準学力テスト結果とその性差に関する研究
—その1　音高・リズム・メロディー・ハーモニーについて—……山中　竹一… 16
社会科における生徒の自主活動（フィールドワーク）について……社　会　科… 68
「現代社会」の内容について……社　会　科… 76
技術家庭科の男女共学を実施して……技術家庭科… 80
「コンピューターって？」
—コンピューター実習の前後における意識の変化について……松本　博史… 122
標準学力テストを5年間実施して……岡田セイ子… 148
全校アンケートの集計結果……岡田セイ子… 158
3・3制と6年一貫制における成績変動の比較および
成績変動とクラブ活動の比較……木村　維男… 165
中学三年生の「卒業論文」について
……鈴木　良・米田博行・林　良樹… 180
中学2年クラブと学習に関するアンケート調査結果……屋舗　増弘… 187

第22集（1981）
理科における六か年一貫カリキュラム実施記録とその問題点
—高等学校の場合—……理　科… 1
全校アンケートの集計結果……研究調査部… 27
自由教育運動から学ぶこと……松村　正樹… 33
社会科における学力をたかめるための一つの試み……鈴木　良… 49

本校における要医療災害の実態と分析……中村ハツ子… 59
中学校「特活・道徳」の時間の利用について
実践記録と反省……辻本美奈子・奈良重幸・藤川宣雄… 71
第23集（1982） 理科標準学力テスト（1980年度）の結果について……理　科… 1
中学校入学試験における理科実技検査の報告……理　科… 26
保健体育六年一貫カリキュラムの検討
—体育分野の教材配当—……保健体育科… 47
〝ゆとりの時間〟について
—その中間報告—……仲　光雄… 54
全校アンケート集計結果の報告……研究調査部… 92
人口集積と都市景観〔Ⅰ〕……寅貝　和男… 108
「数学的構造」の理解の評価法について……松本　博史・木村　維男… 122
逆関数の指導について……松本　博史… 133
電子計算機実習用テキスト……数　学　科… 147

第24集（1983） 保健体育六年一貫カリキュラムの検討……保健体育科… 1
—保健分野の教材配当—
本校生徒の身体計測および健康診断の結果……健　康　部… 13
本校生の生活実態と成長の姿……研究調査部… 21
—全校アンケートの集計結果—
図形指導の教材に関する一考察（その1）……玖村由紀夫… 39
—ユークリッド「原論」と平行線の定理—
人口集積と都市景観Ⅱ……寅貝　和男… 51

第25集（1984） 障害者への理解　—中学生の交流教育—
……中道貞子・平塚　智・鈴木　良… 1
標準学力テストのマイコン処理について(1)……研究調査部… 22
他教科へ触手をのばす試み　—世界史を中心に—……松村　正樹… 37
図形指導の教材に関する一考察（その2）……玖村由紀夫… 49
—ユークリッド「原論」と三平方の逆定理—
献立指導についての一考察……辻本美奈子… 61
—コンピューターを利用して—
地方都市と中心商店街……寅貝　和男… 72

第26集（1985） 附属学校における教育研究……山田　昇… 1
—附属学校の歴史を通して考える—
情報処理教育について……数　学　科… 11
—卒業生に対するアンケート調査より—
トルコと日本……松村　正樹… 27
—世界史における導入の例—

生徒の活動を重視した数学の授業実践……松本　博史… 36
　一問題解決学習の立場から－
中学男子生徒を対象としたバレーボールの授業の指導法……米田　博行… 58
地方都市と中心商店街（Ⅱ）……寅貝　和男… 101
スポーツルール……奈良　重幸… 140
　－テニス型サービスの方向づけをめぐって－
昭和59年度　海外教育事情視察派遣団に参加して……藤川　宣雄… 149

昭和59年度　本校の研究活動……研究調査部… 181

第27集（1986）

特集　6年一貫教育の総括

6年一貫教育10年の総括にあたって……研究調査部… 1
教育課程の変遷……教　務　部… 3
国語科における6年一貫学習指導の
　中間的総括と今後の課題……国　語　科… 12
社会科の総括と課題……社　会　科… 18
中学入試制度の変更にともなう
　数学の基礎学力の変化について……数　学　科… 56
理科におけるカリキュラムの検討と今後の6か年一貫教育……理　　科… 67
中高一貫教育における英語科のあゆみと課題……英　語　科… 75
「保健体育6年一貫カリキュラム」を総括する……保健体育科… 98
音楽科の立場から6年一貫教育をふり返る……音　楽　科… 114
美術・工芸……美術工芸科… 122
技術・家庭科の6年一貫教育のあゆみ……技術家庭科… 127
障害児校との交流教育
　－中学・高等学校4年間の実践報告－
　……荒木孝子・林　良樹・山中竹一・山中昭生… 147
地方都市と中心商店街（Ⅲ）……寅貝　和男… 167

37 悪　わるイ　ーアク
　　にくム　ーヲ

38 為リ人ト　人柄、性質。

39 百姓　ひゃくせい。人民、民衆。

40 夫子　ふうし。先生。

41 可シ　大別して許可と可能の二通りがある。また、適宜ということを表すこともある。

42 方ニ　まさニ。ちょうど、そのとき。

43 亦　（モマタ）　…も同様に。並列、添加。
　又　（サラマタ）　さらに、そのうえ。
　復タ再タ　（マタマタ）　二度、もう一度。

A ＋ V_1 →
　B 亦 V_1。
　A 又 V_2。
　A 復 V_1。

44 以　もっテ　ひきヰル　すでニ　ゆゑ

45 固ニ素ニ　もとヨリ。もともと、本来。

46 者　時、人、物、事等を示す。
　時を表す熟語　今者・昔者・向者・既者

47 所ニ以　ゆゑん。原因、理由を表すときと、手段、方法を表すときとがある。

48 能タ　可能を表す。動作・行為をする人の能力いかんに関る。
　「不能ヘ（あたハず）」と読みが変るのに注意。
　「得レ」は周囲の状況いかんに関る。

49 六書　漢字の成り立ち方の六種。象形・指事・会意・形声・転注・仮借

50 少シ　わかシ。

13 蓋シ　けだシ。たぶん、思うに。推測する語である。

14 漢音　漢字の音読みには、漢音・呉音・唐音の三種がある。日本に伝わったのは呉音・漢音・唐音の順である。現行の読みは漢音が多い。「行　コウ（漢音）ギョウ（呉音）アン（唐音）」

15 堯舜　古の聖天子。「堯・舜・禹」の三人が聖天子の代表である。逆に「桀・紂」は暴君の代表である。

16 於是　そこで。

17 是以　ここヲもっテ。「というわけで」の意。「以是」これヲもっテ」との違いに注意。こちらの方は「是」がなにか具体的に指すものがあり、「それで、それでもって」の意。

18 故人　友人。旧友。

19 対フ　こたフ。目下の者が目上の者に対して返答するときに用いる。

20 如・若　① もシ
② ごとシ
③ しク
右の三つの読みが共通してある。その他「若（なんぢ）」「如（ゆク）」という読みもある。

21 諸　これ。① ＝之於（文中）
② ＝之乎（文末）

22 子　あなた、男子の敬称。

23 四書五経　論語・孟子・大学・中庸を四書という。五経は次の五つである。詩経・書経・易経・礼記・春秋。

24 春秋五覇　斉桓公・晋文公・秦穆公・宋襄公・楚荘王

25 臣　わたし。一人称、謙遜していう。

26 寡ナシ　すくナシ。

27 則チ　…と。…するとき。

28 即チ　すぐに。

29 乃チ　そこで。こそ。なんと。

30 便チ　すぐに。たやすく。

31 輒チ　…するたびに。

32 戦国七雄　斉・秦・燕・楚・韓・魏・趙

33 夫レ　そもそも、いったい。

34 縱ヒ　たとえ、もし。仮定の字。

35 事　つかフ。ことトスル。

36 遂ニ　かくて、そのまま。

竟ニ

終ニ

卒ニ　結局、とうとう。

37 与　① と　ともニ
② あたフ　くみス
③ よりハ
①の用法で、「A 与 B」は「A（は）Bと」「AとBと」の二通りの場合がある。

38 唐宋八大家　唐　韓愈・柳宗元
宋　欧陽修・蘇洵・蘇軾・蘇轍・王安石・曾鞏

39 所　用言を体言化する。ただし客体をさし、主体はささない。「所ノ迫フ者ハ誰ゾ」という場合、「迫いかけている相手が誰か」を聞いているのであって、「誰が迫いかけているのか」を問うているのではない。

40 南面　王となって統治すること。北面は、臣下として仕えることをいう。

五言絶句の模範的な形式としては次の二つがある。

A										B							
●	●	○	○	●						△	○	○	●	●			
○	○	●	●	◎						△	●	●	○	◎			
△	○	○	●	●						●	●	○	○	●			
△	●	●	○	◎						○	○	●	●	◎			

◎は韻　○は平　●は仄　△は平仄どちらでもよい。

実際の詩の例を、五言絶句・七言絶句それぞれ一つあげておく。

絶句　杜甫

江碧鳥逾白　○●●○●
山青花欲然　○○○●◎
今春看又過　○○○●●
何日是歸年　○●●○◎

春夜洛城聞笛　李白

誰家玉笛暗飛声　○○●●●○◎
散入春風滿洛城　●●○○●●◎
此夜曲中聞折柳　●●●○○●●
何人不起故園情　○○●●●○◎

重要語句

1 字　あざな。二十歳になったとき、よびなとして名の他につける。他人を呼ぶときには字を用いるのが普通である。

2 敢（カ）　あえて、押し切ってする。「肯」も「あヘテ」と読むが、基本的には次のような違いがある。
非（ス）不（ル）敢（カ）言（ハ）乃（チ）不（ル）肯（カ）言（ハ）爾。（言う勇気がないのではない。そうではなくて言うことを望まないのだ。）
「不敢」と「敢不」の違いについては反語の項で説明済。

3 或（イハ）　①ことによったら。
②ある者（あるヒト）。

4 孰　①いづレ　事物をさすとき。
②たれ　人をさすとき。

5 苟（カモ）　いやしクモ。もし、かりにも。仮定の字。

6 雖（モ）　逆接の字。確定の場合と仮定の場合とがある。上に主語のある場合は確定のことが多い。

7 於　「おいテ」と読むが、置き字としての用法も多い。受身・比較・場所・対象・起点等の用法がある。

8 衆（シ）　おほシ。

9 以為（ヘラク）…と思う。「以て…と為す」と読むことも可能。「以A為BAをBであると考える。」もあわせて覚えておくこと。
「以為（ラク）然（リト）」「以（テ）為（ス）然（リト）」

10 寡人　諸侯の自称。徳の寡ない人の意。「孤」も同様に用いられる。

11 昔（ク）　過去の経験を表す。…したことがある。

12 且　①かツ
②しばらク
③まさニ…ス　再読文字の項参照。

詩について

一　初唐　（唐初　～七〇九）
　　張説

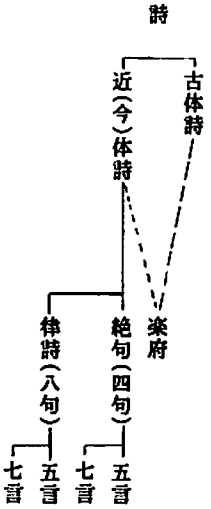
二　盛唐　（七一〇～七六五）
　　杜甫　李白　王維　高適　王昌齢　王翰

三　中唐　（七六六～八三五）
　　白居易　柳宗元　韓愈　張籍　賈島

四　晩唐　（八三六～　唐末）
　　高駢　杜牧　李商隠

五　宋　　蘇軾　司馬光

漢文・唐詩・宋詞・元曲という言葉があるように、詩の歴史において最も重要な時代は唐代である。唐代の詩人については、右のように四つに分けるのが通例である。年代の区分は厳密に考える必要はなく、おおよその目安としてよい。唐代以後近体詩の形式が整う。



五言　二　三
七言　二　二　三　　）と区切るのが原則

楽府　　もと漢代の役所の名。のち詩の分類の一名称となる。メロディーを伴う、あるいは伴うことが予想される。

古体詩　一句の字数・句の数など特に制限はない。外見的には絶句・律詩と全く同じ古体詩もある。押韻だけはしなければならない。換韻が許されている。

〔近体詩の規則〕

一　押韻について
1　脚韻を踏む。
2　隔句韻（偶数句）、ただし七言の場合は第一句も踏むのが原則。
3　韻は平声で踏むのが原則。ただし絶句は仄声の韻もありうる。
4　一韻到底。

二　対句について
1　律詩の頷・頸聯は対句を用いねばならない。律詩のはじめから二句ずつをまとめて、それぞれ首・頷・頸・尾聯という。
2　絶句・律詩の首・尾聯には要求されない。ただし、用いてもよい。

三　起承転結について
絶句は四つの句がそれぞれ起承転結にあたる。律詩の首・頷・頸・尾聯が起承転結に相当するともいえるが、絶句ほどはっきりしていない。

四　平仄について
漢字には平上去入の四つの声調がある。

平 □　上 □　去 □　入 □
仄

1　二四不同　二六対

△
△　平仄が同じ。
△
△
△
△　平仄を異にする。

2　弧平・弧仄をつくらない。
●○●　弧平
○●○　弧仄

3　下三連をつくらない。
－－－○○○　平三連
－－－●●●　仄三連

4　粘法・反法

△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△
△△△△△

―線で結んだところは平仄が同じ。
…線で結んだところは平仄が異なる。

次の文章の「尽」は主語と目的語のどちらに関っているか考えてみよう。

広之将兵乏絶之処、見水。士卒不尽飲。広不近水。士卒不尽食。広不嘗食。

☆ 介詞のあとにくるべき語の省略

以・与・為（ため）等の介詞（英語の前置詞に相当する）のあとにくるべき語が省略されることがある。意味を考えるときにはそれらの語を補って考えねばならない。

蘇秦者師鬼谷先生。初出游。困帰。妻不下機。嫂不為炊。

【蘇秦は鬼谷先生を師とす。初め出游して困しみて帰る。妻は機を下らず、嫂は為に炊がず。】

〔蘇秦は鬼谷先生について学んだ。初め遊説に出かけて困窮して帰ってきた。妻は機おりの手を止めようとせず、嫂は（蘇秦のために）食事の用意をしてやらなかった。〕

● 「嫂はそのために食事の用意をしなかった。」などと漠然と訳してはいけない。「不為蘇秦炊。」ということである。

吾騎此馬五歳、…不忍殺之。以賜公。

【吾此の馬に騎すること五歳、…之を殺すに忍びず、以て公に賜はん。】

〔私はこの馬に五年騎っている。…この馬を殺すに忍びない。この馬をそなたにつかわそう。〕

● 「以之賜公」「以此馬賜公」ということである。

☆ 主語？あるいは目的語？

楚荘王欲伐陳。使人視之。使者曰。陳不可伐也。荘王曰。何故。対曰。……王曰。陳可伐也

● 傍線を付した部分について、「陳」は主語であろうか。「主語－述語」という漢文の基本構造にのっとって考えるならば、主語と考えられそうであるが、実はそうではない。「陳」は「伐」の目的語であり、意味上の主語は「楚（われわれ）」である。なぜこんなことが起こるかというと、結局話題の中心となる事柄が先に示されているのである。漢文にはこういうことが多いから注意を要する。

抑揚

A 且 猶 尚 B 況 於 安 C 況 乎。 C 乎。

＊ 抑揚とは、「抑える」と「揚げる」ということであるから、ある事柄を抑え、別の事柄を揚げて強調するという形式である。

右の形式が一般的であるが、前半のみ、あるいは後半のみを用いた形式も多い。

死馬且買之況生者乎。

〔死馬すら且つ之を買ふ、況んや生ける者をや。〕

〔死んだ馬でさえ（高値で）買ったのだから、まして生きている馬ならなおさらだ。（高く買う。）〕

況陽春召我以煙景大塊假我以文章。

〔況んや陽春我を召くに煙景を以てし、大塊我に假すに文章を以てするをや。〕

〔ましてうららかな春が霞たなびく景色で我々をまねき、造化の神が我々に文章の才能を貸し与えている場合はなおさらだ。〕

至今每吟猶惻惻耳。

〔今に至るまで吟ずる毎に、猶ほ惻惻たるのみ。〕

〔今日になってもこの詩を口ずさむごとに、まだなお悲しみのために心がいたむ次第である。〕

その他

☆ 皆・尽・悉・独 などについて

これらの副詞は、行為の主語に関係する場合と行為の目的語に関係する場合とがある。「生徒がみなケーキを食べた。」と言う場合、「生徒の中には食べそこねたものがなく、一人残らず」ということを表す、つまり主語に関るのか、「ケーキが全部、あとかたもなく」ということを表す、つまり目的語に関るのか、にわかにはわかりにくいことがある。

項王至。漢軍畏楚尽走険阻。

〔項王至る。漢軍楚を畏れ、尽く険阻に走る。〕

〔項王がやって来た。漢軍は（項王の率いる）楚軍を恐れてみな険阻な場所に逃げて行った。〕

今独臣有舟。

〔今独り臣のみ舟有り。〕

〔今、ただ私だけが舟を持っています。〕

＊ 「皆」「独」は主語に関っている。

秦必尽誅五口父母妻子。

〔秦必ず尽く吾が父母妻子を誅せん。〕

〔秦はきっと私の父母妻子を一人残らず殺すにちがいない。〕

臣唯独知韓信。

〔臣唯だ独り韓信のみを知る。〕

〔私はただ韓信だけを知っていました。〕

＊ 「尽」「独」は目的語に関っている。

限定・累加

☆ 限定の副詞をあげる。

1 唯・惟・但・直・特・徒・維・

いずれも「ただ」と読む。

2 独・　「ひとり」と読む。

• 2は読みが異なるだけで、1とほぼ同じ。ただし「一人（だけ）」の意味になることはもちろんある。

☆ 限定の終助詞をあげる。要するに「のみ」と読む字である。

耳　爾　已　而　已

いずれも後に「矣」がつくこともある。

• 限定の副助詞と終助詞のどちらかのみを用いる場合もあれば、両者を組み合わせる場合もある。以下例文をあげる。

無恒産有恒心者惟士為能。

〔恒産無くして恒心有る者は、惟だ士のみ能くすと為す。〕

〔一定の財産がなくてつねに不変の道徳心を持ちつづけられるのは、ただ学問修養のできた士だけが、これをなすことができるのである。〕

書足以記名姓而已。

〔書は以て名姓を記するに足るのみ。〕

〔文字を書くのは自分の姓名を書くだけで十分なのだ。〕

独臣有舟。

〔独り臣のみ舟有り。〕

〔私だけが舟を持っている。〕

閨中只独看。

〔閨中只だ独り看るならん〕

〔ねやのなかでただ一人でみていることであろう。〕

☆ 特別な例をあげる。

自非……。　〔非ざるよりは〕

（……でない限りは）

人之性多偏自非聖人所難免也。

〔人の性偏すること多し。聖人に非ざるよりは免れ難き所なり。〕

〔人の性質は偏っていることが多い。聖人でない限りはその偏りから免れるのは難しいことである。〕

☆ 累加について

不（非）唯（独）……又（亦）……。

〔唯だに（独り）……のみならず（のみに非ず）又（亦）……。〕

〔ただ……だけでなく（その上）また……。〕

不唯無益而亦害之。

〔唯だに益無きのみならず而して亦之を害す。〕

〔ただ無益なだけでなく、その上有害でもある。〕

豈惟怠之又従而盗之。

〔豈に惟に之を怠るのみならんや、又従って之を盗む。〕

〔どうしてただその仕事を怠るだけであろうか、いやそればかりではなく、またその上に盗みをもはたらくのである。〕

• 否定を表す字のかわりに、反語の「豈」が用いられている。基本的には同じである。

寧ロ赴ニ湘流ニ葬ニ於江魚之腹中ニ安ンジ能ク以テ皓皓之白ヲ而蒙ニ世俗之塵埃ヲ乎。

〔寧ろ湘流に赴きて江魚の腹中に葬らるとも、安くんぞ能く皓皓の白きを以て世俗の塵埃を蒙らんや。〕

〔湘流に身を投げて川の魚のえじきになる方がましで、どうして潔白なこの身に世俗のちりを受けることができようか。〕

* 否定の字の代りに反語を表す「安」が用いられている。基本的には1の形である。

与ニ人刃レ我ヲ寧ロ自刃セン

〔人我を刃せんよりは、寧ろ自刃せん。〕

〔人が刃で私を殺すよりは、むしろ自刃したほうがよい。〕

与ニ其ノ生ヲ而無レ義ナ、固ヨリ不レ如カ烹ニ

〔其の生きて義無からんよりは、固より烹らるに如かず。〕

〔生きて正義に反するよりは、もちろんかまゆでの刑にされるほうがよい。〕

* 「烹」は文脈から受身に読まれている例である。

楚王之弧ヲ孰レニ与ヲ寡人ニ

〔楚王の弧は、寡人に孰与れぞ。〕

〔楚王の狩弧は、拙者の狩弧とくらべてどちらが盛大か。〕

* 「寡人」とは王侯の自称である。「孤」もほぼ同じように用いる。

与ニ其ノ有レ誉レニ於前ニ孰レニ若カ無キニ毀ニ於其ノ後ニ

〔其の前に誉れ有らんよりは、其の後に毀り無きに孰与れぞ。〕

〔生前に名誉を受けるのと比べたら、死後に毀りを受けないのとどちらがよいか。〕

* 2を疑問にした形と考えることができる。この例文の返り点はやや難解であるので注意せよ。

☆ 最上級にあたる形式をあげる。

1 莫シ如クハレ A ニ

〔Aに如くは莫し。〕

〔Aに及ぶものはない。Aが一番だ。〕

2 莫シレ C ナル ハ ニ 於 A ニ

〔AよりC（なる）は莫し。〕

〔AよりCなものはない。Aが一番Cだ。〕

最上級の1・2は比較のところであげた1・2に対応している。「如」の代りに「若」、「於」の代りに「于・乎」を用いてよい点も同じである。

衣ハ莫クレ如クハレ新ラタニ 人ハ莫シレ如クハレ故ニ

〔衣は新たなるに如くは莫く、人は故きに如くは莫し。〕

〔着物は新しいのが一番よく、人は古い友人が一番よい。〕

莫シレ若クハ ニ 六ム 国 従 親シテ 以テ 擯ルニ 秦ニ

〔六国従親して以て秦を擯くるに若くは莫し。〕

〔六国縦に同盟を結んで秦をしりぞけるのにこしたことはない。〕

天 下 莫シ柔ニ 弱ナルハ 於 水ニ

〔天下水より柔弱なるは莫し。〕

〔天下に水より柔らかくて弱々しいものはない。〕

＊ 熟語の場合の返り点のつけ方に注意するように。

晋 国ハ 天 下ニ 莫シレ 強シ焉ニ

〔晋国は、天下に焉より強きは莫し。〕

〔晋国は、天下にこれより強い国はない。〕

＊ 「焉」はこの場合「於此」と同じ。したがってこの形も基本的には2の形である。なお「焉」は置き字として文末にくる用法や、「いづクンゾ（クニカ）」と読んで、疑問・反語を表す用法もある。

☆ 選択を表す形をあげる。

1 寧ロ A ス ト モ 不 （無）レ B セ ズ

〔寧ろAすともBせず。（Bする無かれ。）〕

〔Aしてもよいが Bしてはいけない。〕

2 与リハ ニ （其）ノ B ニ （也）（寧ロ A ニ 不レ 如カ A ニ ス ル ベ シ）

〔（其の）Bせんよりは 寧ろAせん。Aするに如かず。〕

〔Bするよりは Aする方がよい。〕

＊ 「与」の下に「其」があったりなかったりするが、あったとしても「其」に意味はない。また「也」もあったりなかったりするが、あったとしても読まないことになっている。なお、「与」のいろいろな用法に注意すること。

3 孰 与 （若）。

〔孰 与（若）れぞ。〕

〔どちらがよいか。どちらが勝っているか。〕

＊ 比較の疑問の形式である。

寧ロ 為ラ ニ 鶏 口ト 無カレ 為ル ニ 牛 後ト

〔寧ろ鶏口と為るも、牛後と為る無かれ。〕

〔鶏の口にはなっても、牛の尻にはなるな。〕

以五十歩笑百歩則何如。

〔五十歩を以て百歩を笑はば、則ち何如。〕

〔五十歩逃げた者が百歩逃げた者を臆病ものだとあざ笑ったとしたら、どうでしょうか。〕

朋友之際如何

〔朋友の際は如何せん。〕

〔友達どうしのつきあいはどうしたらよいでしょうか。〕

虞兮虞兮奈若何

〔虞や虞や若を奈何せん。〕

〔虞よ虞よおまえをどうしようか。（どうしようもない。）〕

＊ 「奈若何」は、ここの「若」は「なんぢ」と読む字であって、「若何」ではない。

比較・選択

☆ 二つのものを比較する形式をまずあげる。

1 B不如A

〔BはAに如かず。〕

〔BはAに及ばない。（BよりもAの方がましだ。）〕

「如」の代りに「若」も用いられる。

2 A C於B

〔AはBよりもC（なり）。〕

〔AはBよりもCである。〕

「於」の代りに「于・乎」も用いられる

1は二者のどちらがよりよいかを述べる形である。それに対し、2は、二者のうち、どちらがCという点においてよりまさっているかを述べる形式である。単純に二者を比較するのと、ある観点を定めて、そこから比較するのとの違いがある。

百聞不如一見

〔百聞は一見に如かず。〕

〔百回聞くのは一回見るのに及ばない。〕

青出於藍而青於藍

〔青は藍より出でて、藍よりも青し。〕

〔青色は藍から作りだされるのであるが、藍よりも青い。〕

＊ 「於」が二度用いられているが、初めの方は起点を表す用法。後の方が比較の用法である。「於」はこの他に場所や受身を表す用法があるので、十分な注意が必要である。なお、「藍」とは染料の原料となる藍草のこと。

沛公安在。

〔沛公安くにか在る。〕

〔沛公はどこにいるか。〕

☆ その他の例をあげる。

礼与食孰重。

〔礼と食と孰れか重き。〕

〔礼と食とでは、どちらが重要か。〕

誰知之者。

〔誰か之を知る者ぞ。〕

〔誰が知っていようか。（誰も知りはしない。）〕

＊ 「孰」は「たれカ」と読んで反語に用いることもある。

何為斬壮士。

〔何為れぞ壮士を斬る。〕

〔どうして壮士を斬首の刑にするのか。〕

＊ 「なんすレゾ」という特殊な読みを覚えること。もちろん文脈によっては反語の場合もある。

学而時習之、不亦説乎。

〔学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや。〕

〔学んで、それを機会あるごとに復習する。なんとよろこばしいことではないか。〕

＊ 「不亦…乎」は詠嘆的反語と呼ばれている。

百獣之見我而敢不走乎。

〔百獣の我を見て、敢て走らざらんや。〕

〔多くの獣たちは私を見て逃げないことがあろうか。いやきっと逃げる。〕

＊ 「不敢走」の形は否定。この場合、「決して逃げない。」という意味になる。

豈足以言得士。

〔豈に以て士を得たりと言ふに足らんや。〕

〔どうして立派な士を集めたなどといえるであろうか。いやそんなことはいえないのだ。〕

＊ 「豈」も本来、疑問の副詞であるから、疑問の用法もあるのだが、どういう訳か、高校の漢文では反語としてしかまず出てこない。

☆ 「いかん」について

① 何如　状態・様子・程度・真偽

何若

如何

② 若何　手段・方法・処置

奈何

①・②いずれも「いかん」と読むのである。その意味は記したような違いがある。疑問が基本であるが、②は反語となることもある。②について注意すべきは目的語の入る位置である。すなわち次のようになる。

如○何　○を如何せん

如○○何　○○を如何せん

＊ 通常、熟語が目的語をとる場合は「○－○●」●を○○す」となるのであるが、「如何」の場合だけは「如－何●」とは書かないので注意すること。

疑問・反語・詠嘆

この三者は形の上では区別がない。反語というのは強調するために疑問の形を用いたものであるから、前後の文脈から判断しなければならない。ただし訓読上は区別があって、反語は「…ン（ヤ）」と終ることが多い。

☆ 疑問の副詞をあげる。

1 何 胡 奚

① なんゾ　（理由）
② なにヲカ　（事物）
③ いづレノ　（時・所）
④ いづクニ（カ）　（場所）

2 安 焉 悪

① いづクンゾ　（理由）
② いづクニカ　（場所）

以上の二つの項目にあげてあるのが代表的なものである。まず読みをものにすること。事柄の性質上、反語は二つの項目とも①の場合が多く、他は疑問である場合が多いが、そうではない場合はいくらもある。

☆ 疑問の終助詞をあげる。

乎 哉 也 耶 与　が主なものである。

疑問の副助詞と終助詞のどちらかのみを用いて疑問・反語・詠嘆を表すこともできるが、実際はこの二つを組み合わせて用いることも多い。以下、例文をあげる。

不レ有ニ佳作一、何ン伸ニ雅懐一。

〔佳作有らずんば、何ぞ雅懐を伸べん。〕
〔よい詩ができなければ、どうしてこの風雅な心を表すことができようか。〕

何ン楚人ノ多*也。

〔何ぞ楚人の多きや。〕
〔何と楚の国の人が多いことか。〕

* これは詠嘆を表す。

必ズ不レ得レ已ムヲ而去ル於ニ斯ノ三者一。

〔必ず已むを得ずして去らば、斯の三者に於て、何をか先にせん。〕
〔どうしてもやむを得ず、取り除くとしたら、此の三者の中で、どれを第一に取り除きますか。〕

何ノ処リカ秋風至ル蕭蕭トシテ送ル雁群一。

〔何れの処よりか秋風至る、蕭蕭として雁群を送る。〕
〔どこから秋風が吹いてくるのか、ざわざわと吹いて雁の群れを送ってくる。〕

* 時を表す用法には有名な杜甫の「絶句」に、「何レノ日カ是レ帰年ナラン」という句がある。

聴キテ其ノ言ヲ一也、観レバ其ノ眸子ヲ一人焉クンゾ廋サン哉。

〔其の言を聴きて、其の眸子を観れば、人焉くんぞ廋さんや。〕
〔（ひとみにはその人の心があらわれるから）その人のひとみをみれば、人はどうして内心をかくすことができようか、できない。〕

王侯将相、寧クンゾ有レ種乎。

〔王侯将相、寧くんぞ種有らんや。〕
〔王や諸侯、将軍、大臣などというものは、どうしてきまった血統があろうか。そんなものはないのだ。〕

* 「寧」は反語にしか用いられない。

* 「有」について説明しておく。「有」は「無」と同じく、普通は返り点を伴って返読する字である。つまり右の例文ならば、「常ニ有リ千里ノ馬、而モ不常ニ有ラ伯楽。」となるのが通常の語順である。このような書き方は極めて珍しい。

有レ徳者ハ必ズ有レ言。有レ言者ハ不ニ必ズモ有レ徳。

〔徳有る者は、必ず言有り。言有る者は、必ずしも徳有らず。〕
〔徳のある人には必ず善言がある。しかし善言を言う人が必ずしも徳のある人とはいえない。〕

遂ニ去リテ不ニ復タ与ニ言ハ。

〔遂に去りて復た与に言はず。〕
〔かくてその場を立ち去って、二度と語りあうことはなかった。〕

* 一度は話をしたが、その後二度と語りあうことはなかったという意味である。「復タ不与ニ言ハ」となると、はじめのときも語りあうことなく、二度めのときも語りあうことはなかったということになる。

☆ 特殊な例を二例あげる。

不レ可ニ勝ツ数ヘ。　〔勝げて数ふべからず。〕
不レ可レ勝レ数フニ　〔数ふるに勝ふべからず。〕

〔全部は数えきれない。〕

* 「勝」の読みに注意。右のどちらの読み方も可能。「勝ツ」と読む方がどちらかといえば多い。

是ノ故ニ無レ貴ト無レ賤ト無レ長ト無レ少ト
道之所レ存ル師之所レ存スル也。

〔是の故に貴と無く賤と無く、長と無く少と無く、道の存する所は、師の存する所なり。〕
〔こういうわけで、身分が貴かろうが賤しかろうが区別なく、年長であろうが年少であろうが関係なく、道を修め身につけている人であれば、その人は自分の師とすべき人である。〕

* 「無レ A ト無レ B ト」は、「AとBとの区別なく、AとBとに関わりなく」ということを表す。

弟子不必不知師。

〔弟子は必ずしも師に如かずんばあらず。〕

〔弟子は必ずしも師に及ばないことはない。〕

不敢不告也。

〔敢へて告げずんばあらざるなり。〕

〔（勇敢に）申し上げないわけにはいきません。〕

＊ 二つの否定の字の間には、以上のように「曾」「必」「敢」や、その他「始」などの副詞が入ることが多い。訓読に注意すること。

「……ズンバアラズ」と読むことになっている。「……ザラズ」などと読まないこと。

☆ 否定語の連用

二重否定と形の上では少し似ているが、表す内容は全く異なる。二重否定は、訓読して二つの否定の字を続けて読むわけであるが、否定語の連用は上の否定の字を含む句が条件を表す形になるのである。漢文には頻出する形であるのでよく覚えておくこと。

不入虎穴、不得虎子。

〔虎穴に入らずんば、虎子を得ず。〕

〔危険な虎のすみかに入らなければ、貴重な虎の子を手に入れることはできない。〕

人而無信、不知其可也。

〔人にして信無くんば、其の可なるを知らざるなり。〕

〔人間であってもし信義を守らないならば、その人についてよい点は認められない。〕

非礼勿視、非礼勿聴。

〔礼に非ざれば視ること勿かれ、礼に非ざれば聴くこと勿かれ。〕

〔礼にかなっていないならば、それを視てはいけない。礼にかなっていないならば、それに耳を傾けてはならない。〕

＊ 「不…」「無…」「非…」という送り仮名に留意すること。「不…」「無…」「非…」と読んで誤りとは言い切れないが、大勢に従うほうが無難。

☆ 部分否定と全(部)否定

否定を表す「不」（未・無・非等も用いることがある）と副詞「常」「必」「俱」「尽」「甚」「復」等の位置関係によって部分否定か全(部)否定かになる。すなわち次の1のように、否定の字が上にあるのが部分否定で、2のように副詞のほうが上にあるのが全(部)否定である。上の字が下の字を修飾するのであるから当然のことである。

1 不常○　不必○　不俱○

不尽○　不甚○　不復○

2 常不○　必不○　俱不○

尽不○　甚不○　復不○

＊ 送り仮名が微妙に異なる点に注意すること。ただ「不復○」と「復不○」は訓読すると「復た…ず」と全く同じになる。部分否定の例をいくつかあげる。全(部)否定については、副詞の意味がわかればわけはないので特にあげない。

千里馬常有、而伯楽不常有。

〔千里の馬は常に有り、而も伯楽は常には有らず。〕

〔一日に千里を走る名馬はいつもいるけれども、伯楽（馬のよしあしを見分ける名人）はいつもいるとは限らない。〕

＊「至」「超」「守」「関」「敵」「越」ということをする主体はいずれも、上の動詞「妾」「遣」「説」のそれぞれ目的語となっている「之」「将」「夫逆」である。

☆ 1・2いずれの読みも可能である例をあげる。

遣中郎将蘇武使匈奴

【中郎将蘇武をして匈奴に使ひせしむ。】

遣中郎将蘇武使匈奴

【中郎将蘇武を遣はして匈奴に使ひせしむ。】

＊ ここの「使」は使役の助字ではなくて、「使者として行く」という意味の動詞である。王維の詩の題「送元二使安西」を思い出せ。

☆ 前後の文意から使役に読む例をあげる。

坐之堂下賜侯妾之食

【之を堂下に坐せしめ、侯妾の食を賜ふ。】

【之(ここは張儀をさす)を表座敷の前の庭に座らせ、下男下女の食事を与えた。】

☆ その他、注意すべき点として、使役の形式を用いて仮定の意味を表すことがある。

使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六国相印乎。

【我をして洛陽負郭の田二頃有らしめば、豈に能く六国の相印を佩びんや】

【私にもし洛陽郊外の田が二頃ほどあったならば、六国の大臣を兼ねることができたであろうか、いやできなかったであろう。】

「使我有洛陽負郭田二頃」と読むことも可能である。が、通常は使役に読むのがよかろう。

否定

代表的な否定の語は次の三つである。

1 不　行為・状態の否定。
2 非　事実の否定。
3 無　存在の否定。

＊ 1は下に用言またはそれに準ずる語がくる。2、3は下に体言またはそれに準ずる語がくる。否定の字にはこの他に、「莫」「勿」や再読文字のところで述べた「未」等がある。1、2、3の単純な否定については特に例文をあげることはしない。

☆ 二重否定

前述の三つの字をいろいろ組み合わせた二重否定が存在する。「無不……」「非無……」のように、否定の字が直接続いているものは訓読も難しくなく、意味も肯定を強めていると単純に考えてよいので、詳述しない。

二つの否定の字の間に何等かの文字が入り、返り点の指定によってその二つの字を続けて読む例を次にあげる。

苟得其養無物不長

【苟くも其の養を得れば、物として長ぜざるは無し。】

【もしもその養分を十分に得たなら、どんなものでも生長しないものはない。】

＊ これは上の方の否定の字が「無」の場合で、「無A不(無)B」という形で、「どんなAでもBしない(Bがない)もの(こと)はない。」という意味を表す。

吾未嘗不得見也。

【吾未だ嘗て見ゆるを得ずんばあらざるなり。】

【私はまだ一度もお目にかからなかったことはありません。(いつもお目にかかっています。)】

使役

1　使ム二A一ヲシテ　B一ヲ。
〔AをしてBせしむ。〕
〔AにBさせる。〕

＊「使」の他、「令」「教」「遣」等も用いる。
「B」は一語の動詞とは限らない。「使　A　○　○」等の形も当然あるわけで、「ヲシテ」と送り仮名をうつべき「A」がどこまでかを見きわめることが肝要。

2　V一レA一ニ　B一シム。
〔AにVしてBせしむ。〕
〔AにVしてBさせる。〕

＊「V」は「命」「遣」「教」「説」等の動詞であることが多いが、別に決っているわけではない。要は、「V」の目的語である「A」が「B」の動作・行為の主体となるという点がポイントである。

☆　1と2の両方に「遣」「教」の字があげられているが、これらの字が用いられている場合、どちらの読みをすればいいのか、にわかに判定しにくいばあいがある。
その他、文脈から使役に読まねばならない場合がある。

1　天ニ無シ口一、使ム二人一言フ。
〔天に口無し、人をして言はしむ。〕
〔天には口はない。人の口を借りて言わせるのである。〕

使ム二子路一問ハ津ヲ焉。
〔子路をして津を問はしむ。〕
〔子路に渡し場についてたずねさせた。〕

天帝使ム二我一ヲシテ長ニ百獸一ヲ。
〔天帝我をして百獣に長たらしむ〕
〔天帝がわたしを百獣の王にならせている。〕

＊「B」が動詞一語の場合、一字、二字の目的語（補語）をそれぞれ伴う場合の、三通りの例をあげてある。

民ハ可レ使レ由ラレ之ニ不レ可レ使レ知ラレ之ヲ。
〔民は之に由らしむべく、之を知らしむべからず。〕
〔人民は之（聖人の道）に従わせることができるが、知るようにさせることができない。〕

＊「使　A　B」の「A」が省略された形である。ただし、意味の上からは「民」が「A」に相当することは明白であり、
「使二民一由レ之ヲ」の「民」が上に提示されていると考えればよい。

2　燕資シレ之ニ以テ至レ趙ニ。
〔燕之に資し、以て趙に至らしむ。〕
〔燕は彼（ここでは蘇秦のこと）に資金を与えて、趙に行かせた。〕

故ニ遣レ将ヲ守ラシメ関ヲ者ハ備ヘ二他盗ノ出入一与ニ非常一也。
〔故に将を遣はし関を守らしめ者は、他盗の出入と非常とに備へしなり。〕
〔わざわざ将を派遣して関所の守備をさせたわけは、他の盗賊の出入りと非常事態とに備えたのである。〕

太宰伯嚭ハ受ケ二越ノ賂一ヲ説二夫差一ニ赦シ越ヲ。
〔太宰伯嚭、越の賂を受け、夫差に説いて越を赦さしむ。〕
〔大臣の伯嚭は、越の賄賂を受け取って、夫差を説得して越をゆるさせた。〕

2 労力者治於人

〔力を労する者は人に治められる。〕

〔肉体労働をする者は、人に統治される。〕

3 先即制人後則為人所制

〔先んずれば即ち人を制し、後るれば則ち人の制する所と為る。〕

〔人より先に手を下せば、相手を制することができるが、人におくれてやると、人に支配される。〕

* この場合の「即」は「すぐに」の意ではない。「則」と同じで、「…すると、…の場合は」の意味である。

且為虜所虜

〔且に虜とする所と為らんとす。〕

〔今につかまえられてしまうぞ。〕

* 「為B所A」の「B」がない形である。

身為宋国笑

〔身は宋国の笑ひと為れり。〕

〔自分自身は宋国じゅうの人に笑われた。〕

* 「所」を省略したもので、こちらの方が古い形だという。

☆ 2と3は互いに書き換えが可能である。こころみに先にあげた例文を書き換えてみる。

労力者為人所治

先即制人後則制於人

★ 文意から受身に読む例をあげる。

狡兎死走狗烹高鳥尽良弓蔵

〔狡兎死して良狗烹られ、高鳥尽きて良弓蔵せらる。〕

〔すばしこい兎が死んでしまうと良い猟犬は煮て食われ、空高く飛ぶ鳥がいなくなってしまうと良い弓はしまわれてしまう。〕

6 用人宜取其所長

〔人を用ふるは宜しく其の長ずる所を取るべし。〕

〔人を用いるにはその人のすぐれている点をとりあげるのがよい。〕

7 過猶不及

〔過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。〕

〔ほどよさを越えたものはほどよさに達しないのと同じである。〕

「猶」は再読文字でない用法もある。「それでもなお、やはり」の意となる。（学ハ如不及猶恐失之）

8 盍各言爾志

〔盍ぞ各爾の志を言はざる。〕

〔どうしてそれぞれおまえたちの抱負を話さないのか、話すがよい。〕

「盍」は「何不」と同音（カフ）で同じ意味。

（何不各言爾志）と、置き換えることができる。

受身

1 見A

〔Aせらる。〕

為A

〔Aされる。〕

被A

2 A於B

〔BにAせらる。〕

〔BにAされる。〕

＊「於」のかわりに「于」「乎」を用いることもある。

3 為B所A

〔BのAする所と為る。〕

〔BにAされる。〕

以上の三つが基本の形である。文脈から受身に読む場合もあるが、しいて一つの形というほどのこともない。1と2をくっつけた「見A於B」という形もあるが、送り仮名「ラ」のかわりに、「見」があると思えばよい。3の形を「為B所A」と読むやり方も行われているようであるが、よくない。「為」の声調にかかわることがらであるが、ここは「なす、なる」の意のときの声調である平声なのであり、「ため」の意のときの去声ではない。

1 厚者為戮薄者見疑

〔厚き者は戮せられ、薄き者は疑はる。〕

〔ひどい場合は殺され、軽い場合でも疑われる。〕

＊ 助字「為」「見」「被」は、四段に接続するときは「る」と読む。したがって「見疑」のように、送り仮名はない。その他の場合は「らる」と読むから、送り仮名として「ル」を送ることになる。

再読文字

次の八種類しかない。

1 未ダ　未だ……ず。
2 将・且ニ　まだ……しない。
　　将（且）に……す。
　　今にも（今に）……しようとする（しそうだ）。
3 当ニシ　当に……べし。
　　当然……すべきである。
4 応ニシ　応に……べし。
　　きっと……だろう（はずだ）。
5 須ラク　須らく……べし。
　　……する必要がある。
6 宜シク　宜しく……べし。
　　……するのがよい、適当だ。
7 猶シ　猶ほ……ごとし。
　　ちょうど……と同じだ。
8 盍ル　盍ぞ……ざる。
　　どうして……しないのか（したらどうだ）。

右のうち2は二つあるから、つごう九つの漢字しかない。なお、3と4は読みは全く同じだが、意味は少し異なっている。

初読の方の仮名は右下に送り、再読の方は左下に送ることになっている。1・2には左に何も書かれていないが、これは再読が1は「ず」、2は「す」と、漢字の読みのみで終わるからである。3～6の再読は「(べ)シ」7は「(ごと)シ」8は「(ざ)ル」である。（　）内は漢字の読みとされている部分。ただ、（　）内の従来漢字の読みとされている部分をも含めて再読の部分はすべてカタカナで送った方がわかりやすいので、そう書いてもよいが、これは少数派である。

1 未ダ能ハ事ヲ人ニレ
【未だ人に事ふる能はず。】
（まだ人につかえることはできない。）

2 将ニ自ラ撃タントス之ヲ
【将に自ら之を撃たんとす。】
（今にも自分でこれを撃とうとする。）

引キテ酒ヲ且ニ飲マントス之ヲ
【酒を引きて且に之を飲まんとす。】
（酒を引きよせて今にも飲もうとする。）

3 及ブ時ニ当ニシ勉励スベシ
【時に及んで当に勉励すべし。】
（時をのがさずに勉学に励むべきである。）

4 応ニシ知ルベシ故郷ノ事ヲ
【応に故郷の事を知るべし。】
（きっと故郷の事をご存じでしょう。）

「当」と「応」は通用することがある。「応」の字を用いて「当」の字の意味とすることの方が多い。

5 人生得レ意ヲ須ラク尽クスベシ歓ヲ
【人生意を得れば須らく意を尽くすべし。】
（人生でうまくいっている時は歓楽を尽くすことが必要である。）

「須」は否定の形になると読みが変るので注意を要する。（再読しない）
「不レ須ト復ビ煩ハスニ大将ヲ」（復た大将を煩はすを須ひず。）

返り点

1　②レ　①

2　⑤㆓　①　④㆒　②　③一

3　⑦下　③㆒　①　②一　⑥中　④　⑤上

1　レ点は一字返る時に用いる。

2　一・二点（三、四等も用いる）は二字以上隔てて返る時に用いる。

その時、返り点・一のついている字の読む順がnだとすると、返り点・二のついている字の読む順はn＋1、返り点・三のついている字の読む順はn＋2というようになる。

3　上・下点（中もある）は一・二点をはさんで返る時に用いる。したがって上・下点が用いられている時は、常に一・二点も用いられていることになる。

☆　次に誤りの例を示す。

①　○㆓　○㆒　○一

②　○下　○上

この二つはいずれも単純なミスで、①はレ点を用いるべきところを三とした誤り、②は一・二点を用いるべきところを上・下点を用いた誤りである。

③　●㆒　○　●レ　◉一　↓　○㆒　○　○下

④　◉㆓　●　○　●一　↓　○レ　○㆒　○　○一

⑤　●下　○㆒　○　○一　●レ　◉上　↓　○下　○㆒　○　○一　○㆑　○

⑥　●㆑　○　●レ　◉㆒　○　○一　↓　○㆒　○　○下　○㆒　○　○一

いずれも上段の返り点は誤りで、下段が正しい。③⑤⑥は◉の次に、レ点と一・二点、あるいは上・下点の規則により、●を二つ同時に読まねばならないことになる。④は同じ理由により、◉の前に●を二つ同時に読まねばならないことになる。

レ点の組合せは一レと上レしかなく、二レ、下レなどというのは存在し得ない。また……○レ○、……○一○のようにつけることはできず、……○下○、……○上○としなければならない。

☆　次の五つの例文を覚えるとよい。

一　送㆑孟浩然之㆓広陵㆒

【孟浩然の広陵に之くを送る】

二　莫㆑柔一弱於㆓水一

【水より柔弱なるは莫し】

●ここは「莫　柔一弱　於　水」としてはいけない。「柔弱」と熟語になっているためである。「於」は置き字。

三　不㆑為㆓児孫㆒買㆓美田㆒

【児孫の為に美田を買はず】

四　莫㆑若㆓六国従親以㆒擯㆓秦㆒

【六国従親して以て秦を擯くるに若くは莫し】

五　見㆑孺子之将㆓入於井㆒

【孺子の将に井に入らんとするを見る】

●「将」は再読文字。「於」は置き字。

① について

王子墊問曰士何事

〔王子墊問うて曰く、士は何をか事とする。〕

〔王子の墊が問うて言う、「士は何をつとめとするか。」と。〕

＊「aをbする」のときは、普通「b a」の語順となるが、aに相当するもの（ここでは「何」）が疑問詞の時に「a b」の語順となる。疑問詞と「以・与・由」等が結びつく場合も同様である。

王曰何以利吾国

〔王は何を以て吾が国を利せんと曰ふ。〕

〔王はどのようにして吾が国に利益をもたらそうかと言う。〕

＊「以レ○」の形となるのが普通だが、「以レ何」とは書かない。

② について

子曰不レ患レ人之不レ己知レ患レ不レ知レ人也

〔子曰く、「人の己を知らざるを患へず。人を知らざるを患ふるなり。」と。〕

〔孔子が言われるには、「人が自分のことを知ってくれないのを心配する必要はない。自分が人のことを知らないのを心配すべきである。」〕

＊「不レ己知」と「不レ知レ人」を比べてみるとよくわかる。

「不レ知レ己」とは書かない。

③ について

身不善之レ患レ毋レ患レ人ノ莫レ己知

〔身の不善を之れ患へよ、人の己を知る莫きを患ふる毋かれ。〕

〔自分の身の行いの好くない点を注意せよ。人が自分を知ってくれないことを気にしてはならない。〕

＊「患レ身ノ不善」を倒置したものである。「之」は倒置したということを示すだけであるから、単に「コレ」とだけ読んで、訳す必要はない。

「莫レ己知」は前の②の形。

富貴不レ能レ淫貧賤不レ能レ移威武不レ能レ屈此之レ謂レ大丈夫

〔富貴も淫する能はず。貧賤も移す能はず。威武も屈する能はず。此を之れ大丈夫と謂ふ。〕

〔富貴な地位で誘惑しても、その心をみだすことはできない。貧賤の苦しみでも、その節操をかえさせることはできない。権威や武力でおどしても、屈服させることはできない。このような人をこそ、大丈夫（一人前の立派な男）というのである。〕

＊「此之レ謂レ大丈夫」を通常の語順に直すと

「謂レ此大丈夫」となる。

漢文の基本構造と例置

☆ 基本構造

一 主語 ― 述語

花 開。（述語が用言）

李白 詩仙。（述語が体言）

二 主語 ― 述語 ― 目的語（補語）

歳月 不レ待レ人。（目的語）

我 登レ山。（補語）

三 主語 ― 述語 ― 補語 ― 目的語

我 与レ彼書。（我 与レ彼レ書。とは読まない。）

四 主語 ― 述語 ― 目的語 ― 補語

景公 問レ政於孔子。

（景公 問レ政於孔子。とは読まない。）

五 主語 ― 述語 ― 補語 ― 補語

管仲 仕レ桓公於斉。

☆ 倒置

倒置として注意しなければならないのは次の二つである。

1 主語 ― 述語 の倒置

2 述語 ― 目的語 の倒置

1について

子曰ク賢哉回也。

〔子曰く、賢なるかな回や。〕

〔先生（孔子）が言われるには、賢人であるなあ、回（顔回）は。〕

甚シイ矣吾衰ヘタルも也。

〔甚だしいかな吾が衰へたるや。〕

〔まことにはなはだしいなあ、私が年をとって衰えたことは。〕

＊ 傍線を付した語が主語に相当する。この形式のときは、述語・主語の下にそれぞれ「哉・矣・也・乎」等の助字を用いるのが普通である。述語としてよく用いられる語は他に「宜・久・惜・難」等がある。

2について

述語と目的語の倒置には三種類ある。

① 目的語が疑問詞である場合

② 否定形で目的語が代名詞である場合

③ 倒置を示す「之・是」等を用いる場合

漢文の句法

奈良女子大学文学部附属中・高等学校　谷本文男

一　はじめに

漢文を教えていて、古文における文法テキストのようなものがないことに常々不便を感じ、不満にも思っていた。教科書の巻末に申し訳程度に載せてあるものではどうしても十分な指導ができない。のみならず、漢文の句法としてまとめてある内容が、教科書ごとにバラバラであって全く統一がとれていない。そこで、私なりの基準で句法を分類し整理してみることを思い立った。一九八五年四月から七月にかけて一応の完成をみた。

二　ワープロを利用するにあたって

1　本文の字の大きさは倍角文字とし、字と字との間は一文字分空けた。
2　返り点は外字作成機能で作成した。
3　送り仮名は片仮名ルビ。
4　JIS規格第二水準にもない字はやむを得ず手書きとした。
5　再読文字の再読部分の送り仮名は手書き。

☆　ただし、4、5については、基本的には外字作成機能を使えば解決できるが、そこまで手が回らなかった。

三　句法の分類について

次の十三章に分類した。

一　漢文の基本構造と倒置　2頁
二　返り点　4
三　再読文字　5
四　受身　6
五　使役　8
六　否定　9
七　疑問　反語　詠嘆　12
八　比較　選択　14
九　限定　累加　17
十　抑揚　18
十一　その他　18
十二　詩について　20
十三　重要語句　21

分類について説明しておく。

一は句法というにはあてはまらないとも思われるが、漢文を読むための土台として重要と考えたので加えた。

十二では、平仄の内容にまで踏み込んで説明してみた。個々の字の平仄は高校生にはわからないまでも、規則としては理解でき、授業で教えてみて、その方が漢詩に対する認識が深まるように思えるからである。

十三には雑多なものが入っている。主として、文学史的な知識や、助字として注意すべきもの等である。とりあえず五十項目ある。

その他の章はごく普通に取りあげられているものである。

四　「漢文の句法」（2頁～23頁）

五　おわりに

私が作成したこの「漢文の句法」を冊子にして、一九八五年の二学期初めに高校三年生に、一九八六年の一学期から高校生全員に持たせた。今までの私の指導が行き届いていなかったせいで、高校三年生においても漢文を自分で読むということはなかなかできない。これから授業の中でこの「漢文の句法」を如何に活用するか、大きな課題である。

ところで、最初にこの冊子を作成した意図は、実は生徒に与えて自学自習用とすることにあったのではなく、私自身が授業の中でしゃべるための手引書とすることにあったのである。おそらく、内容に様々な誤謬を含むことと思われる。御気付きの点御指摘いただければ幸甚である。私自身も活用していく中で検討を重ねなければならないが、先を急ぐならば、次の課題として句法を修得するためのまとまった教材の整理ということが挙げられる。そうして句法学習を意図して整理された教材を学習させることによって、難解な語彙等は辞書の手を借りるとしても、高校生が漢文を読めるということになることを目指したい。

研究紀要　第28集

昭和62年6月30日発行

発行者　奈良女子大学文学部
附属中・高等学校
校長　新　睦人

〒630　奈良市東紀寺町1−60−1
TEL・0742(26)2571